

千葉演習林沿革史資料（6）

—松野先生記念碑と林学教育事始めの人々—

根岸賢一郎*・丹下 健**・鈴木 誠***・山本博一****

Chronological Notes of Tokyo University Forest in Chiba (6)

The Monument to Professor Hazama MATSUNO and

Pioneers in Schooling Forestry in Japan

Ken'itiroo NEGISI*, Takeshi TANGE**, Makoto SUZUKI*** and Hirokazu YAMAMOTO****

はじめに

地方演習林には、多くの記念樹や記念碑などの記念物が存在する。大半は、林学科や演習林につながりが深かった人々に関わるものである。記念物が造られてから相当な期間は、由来を知る職員が多く、口頭による申し送り程度で、十分な管理が継続される。

しかし、世代の交替が続き、内外の諸変化のもとで長い時間が流れると、ときには管理が疎かになる。千葉演習林における「濱尾 新総長による植栽樹」の不適切な扱いが、その一例である²⁷⁾。原因は種々あろうが、濱尾と林学科や演習林との関係を明記した資料の不備が、一因と考えられる。

また千葉演習林所在の「松野先生記念碑」および「松野記念林」と関連して、松野 礎と林学第二（造林学）講座および演習林との関係につき、誤りの多い記事が発表されたことがある⁶⁸⁾。訂正には、松野に関わる正確な記録が必要であるが、充分に対応できる資料が、未だ用意されて

*元東京大学農学部附属演習林

The University Forests, Faculty of Agriculture, The University of Tokyo, retired in 1989 under the age limit

**東京大学大学院農学生命科学研究科森林科学専攻造林学研究室

Laboratory of Silviculture, Department of Forest Science, Graduate School of Agricultural and Life Sciences, The University of Tokyo

***東京大学大学院農学生命科学研究科附属演習林千葉演習林

The University Forest in Chiba, Graduate School of Agricultural and Life Sciences, The University of Tokyo

****東京大学大学院農学生命科学研究科附属演習林研究部

Research Division of the University Forests, Graduate School of Agricultural and Life Sciences, The University of Tokyo

いない。なお、それとは別に「松野記念林」自体の設定経過や取扱いには、不明な点が多い。

濱尾の記念樹は、1908/M(明治)41年5月の視察時³⁷⁾に植樹されたと思われる。松野の記念碑、記念林は、1910/M43年に建立、設定された。濱尾や松野が、黎明期の林学教育に重要な役割を果たしたことは、当時、周知のことであり、その認識のもとに造られた記念物である。しかし、百年近くの年月が経過するなかで、認識は薄れ、失われ、上記のような問題を生じたと考えられる。この種の記念物の維持・管理を適正に継続するには、失われた認識を文書化し、申し送ることが有効と思われる。

本報では、そうした資料のひとつとして、わが国の林学教育の黎明期に関わった人々につき、年代順に記述する。主役となるのは、樹木試験場を開設したのち、それを足場に東京山林学校を創設した「松野 礪」、東京山林学校の内容を充実し、東京山林学校が駒場農学校と合併した東京農林学校時代にも引き続き活躍した「中村彌六」、ついで東京農林学校が帝国大学の分科大学のひとつ、農科大学となったのちに、林学科の教育体制を整えた「志賀泰山」の三人である。

また準主役として、大学総長に就任する以前から林学への理解が深く、演習林の創設・拡張などに尽力した「濱尾 新」について述べる。中村と志賀は、大学南校→東京開成学校（東京大学の前身）に在学時代からの友人であり、濱尾は当時から二人の師であった。

ほかに、林学科を農科大学の一部にすることを批判した「高橋琢也」、および東京農林学校から農科大学初期の専門教育に尽力した「ハインリヒ・マイエル」と「オイスタッハ・グラスマン」について、多少くわしく述べる。

なお、松野 礪についての記述では、従来あいまいにされてきた部分にも触れる。とくに中村、志賀らの活動を併記し、対照することで、松野の役割の把握が容易になると考える。

ドイツ林学の導入

緒方道平による林学の導入

明治新政府には、幕府からの引継ぎ分をふくめ西欧の林制資料があった。

1873/M6年1月、緒方道平（1846-1925、緒方竹虎の父、注、緒方竹虎1888-1956、朝日新聞主筆、自由党総裁）は佐野常民（1822-1902、政治家、日本赤十字社を創立）に随伴、ドイツ語通訳としてオーストリア、ウィーン万博へ出張する。同地で佐野から林学の勉学を命じられ、ウィーン旧市内に所在したマリヤブルン（Mariabrunn）王立高等森林専門学校で、諸科目を聴講する。緒方は翌1874/M7年11月に帰国、西欧の林学・林業関係の資料を持ち帰った。佐野は緒方に、山林学校の設立を期待したといわれる³¹⁾。

その後、ドイツで林学を履修した松野 礪が帰国、林学の本格的な導入を図る。

松野 礪についての伝記

松野 礪の履歴と業績については、いくつかの文献がある。まず、松野の口述による二つの自

伝^{9,35)}と、松野の死去直後の追悼文²⁹⁾があげられる。田中波慈女による伝記「松野 礪先生(1962)」⁶⁰⁾は、以上の文献を主材料にしている。したがって松野の側に立っての描写が主で、内容が一面的と感じられる。故人の顕彰を目的とする「林業先人伝」³⁹⁾の一編なので、当然ともいえる。

長池敏弘は「松野 礪と緒方道平(1975)」³¹⁾で、上記伝記には、松野の評価に過大な部分があると述べている。すなわち、帰国直後の林制活動に対する緒方の寄与、学校設立後における松野の姿勢の消極化、などの指摘、説明が不十分としている。

手束平三郎による「物語林政史(1979-81)」⁶²⁾での、松野に関する記述は、推測も多いが客観的である。多数の資料を比較検討したうえで松野の業績を考察し、欠点を含めた松野の人物像、関係者の動き、時代背景などを、時にはドラマのように描いている。

いずれの文献も、ドイツでの林学の勉強、帰国後の林制面での活動、樹木試験場の開設、林業・林学に対する啓蒙運動、山林学校の創設など、松野の前半生についての記述が詳しい。これに対して、山林学校、農林学校などでの教育活動や、大学から林務官へ転出後の状況など、後半生についての記述は簡略である。

上記の諸文献によって、まず樹木試験場開設までの松野 礪の履歴、業績を以下に要約する。なお、附表-2に東京大学所蔵の人事記録などを掲載する。

松野 礪の履歴（ドイツからの帰国まで）

松野は、長州藩郷士 大野徳右衛門の四男として、1847/弘化4年3月、長門国美祢郡大田村（現在、山口県美弥郡美東町大田）で生まれた。幼時、地元で和漢学を学ぶ。のち山口在住の義兄（姉婿）で医師の長松 幹宅に寄寓、同地で漢学のほか蘭学初歩を数年間修める。その後、幕末の動乱期の京大阪に逗留、1869/M2年には、東京に出てドイツ語を学ぶ。この間に当時の脱藩者の例にしたがって改姓し、「松野」とした。生家の大野姓と義兄の長松姓から一字ずつを採ったものである。

1870/M3年末、北白川宮能久親王（1847-1895、伏見宮家出身、輪王寺宮公現法親王、上野寛永寺門跡、1870/M3年、還俗して伏見宮家に復帰、1872/M5年、北白川宮家を相続、のち日清戦争に近衛師団長として出征、台湾で戦病死）が兵学研究のためドイツへ出発する。松野はドイツ語の学力を評価され、随行員となった。翌年3月ベルリンに到着して間もなく任を解かれ、官費留学生になる。

初め国家経済学を志すが、自身の性格には実学が向いていると感じ、同郷の先輩、青木周藏（1844-1914、留学生のとき一等書記官に抜擢され、のち駐独公使）に勧められ「林学」専攻を決意する。まず基礎学を1年間修め、ついでハルツブルグ（Harzburg）で林学の実地を研修、1872/M5年10月にエーベルスワルデ（Eberswalde）高等森林専門学校へ入学する。このころ政府は財政窮乏のため、官費留学生への給費打ち切りを考えていた。

明治政府は1871/M4年10月、岩倉具視（1825-83）を特命全権大使、木戸孝允（1833-77）、大久保利通（1830-78）らを副使とする米欧使節団を派遣した。使節団は1873/M6年、ベルリンに到着、80余名も居た在ドイツ留学生の専攻を調べたところ、聞きなれない「林学」を専攻する松野に興味をもつ。呼び出された松野は、森林の効用、国家ならびに私経済への重要性、日本の林業に対する林学履修の意義などについて熱心に説明し、給費の継続を願った。松野の願いに使節団は理解を示すが、なかでも大久保利通は松野の林業・林学についての見解に、強く賛意を表した。

帰国後、大久保は内務卿として「大久保健白書」（内政整備と殖産興業に関する建議書）をまとめる。林業政策の作成には、緒方道平をはじめ、山本清十、中野武營らが関わる。手束は、留学生松野との面談が間接の影響を与えたと推測し、「日本林政の方向はベルリンで決まった」と表現している⁶²⁾。

1875/M8年6月、松野は高等森林専門学校を卒業、同年8月初めに帰国する。駐独公使青木周藏は木戸孝允あての手紙で「松野を主幹として泰西文明の学術を基礎とする森林学校を設置し、及び林業の経営を創始せしめんこと」を建議する。このことは、木戸から大久保に伝えられたと想像されている⁶²⁾。

官林調査・直営伐採事業（杉浦 讓および櫻井 勉と松野 圃）

帰国早々、大久保に呼ばれた松野は、日本の林制は山林調査から始まると主張し²²⁾、内務省地理寮山林課に採用される。上司の地理頭（のちの地理局長）杉浦 讓（1835-77）は、旧幕臣から新政府に登用された少数者のなかの逸材で、維新前に2度の渡欧経験があり、松野を重用する。

「大久保健白書」には、官林の管理経営から森林法の制定におよぶ一連の林制構想が打ち出されている。構想の作成に関わった緒方のもとで、松野はドイツで得た知識によって「官林調査仮条例」を作り、官林の実態把握を組織的に進めようと図る。

さらに松野らは、官林でのドイツ式直営伐採事業を計画する。1877/M10年5月には、杉浦地理局長に対し山本清十らと候補地の現地視察を勧め³³⁾、遠州門桁山から木曾上松の官林を案内した。しかし、もともと虚弱な杉浦は、悪天候下の強行軍に疲労し、帰京後まもなく死去、松野は良き理解者の上司を失うことになる。なお直営伐採事業は、計画不備、経験不足などから停滞を重ね、期待していた収益はあがらず、1880/M13年3月に中止となる。つぎの局長時代のことで、官林の体制が未だ整わず、時期尚早であった。

杉浦の後任の地理局長には櫻井 勉（1843-1931）が就任する。櫻井は兵庫出石藩の出身、松山県参事のときに大隈重信に見出され中央に移る。1874/M7年、内務省地理寮五等出仕となり、大久保内務卿に信任され、1877/M10年局長となる。翌年、大久保遭難のあとを継いだ内務卿伊藤博文（1841-1909）からも重用され、作業費導入による直営伐採事業の継続、官林の中央直轄への試行、森林法制定への準備作業、山林局の新設など、めざましい業績をあげた。

1879/M12年5月、櫻井は内務省山林局初代局長となるが、同じ内務官僚で薩摩出身の松方正義（1835-1924）および長州出身の品川彌二郎（1843-1900）からは、以前から良く思われていなかった。藩閥意識などによる悪感情の積み重りといわれる。1880/M13年2月、伊藤の後任として松方が内務卿になると、櫻井は地理局長に戻されて、山林行政から遠ざけられる。品川が内務少輔に昇進し、山林局長を兼任、山林局の課や人員の削減を行ない、櫻井の手足となって協力した緒方道平らを順次追放する。

ところで櫻井は、杉浦前局長のもとで活躍した松野を信任せず、「山口人松野 礪なるものあり、ドイツ国にて山林学を修め来りしといふも、諸事を諮詢するに茫漠として信頼するに足らず」と、のちに評している^{31, 62)}。また、内務省山林局設置前後に局務に努力した者として、宮島信吉、中野武營、杉山榮藏、深井 寛、山本清十、坂本俊健、緒方道平をあげているが、松野 礪の名前は無い⁴³⁾。このように櫻井から疎外されたことに加え、品川が同郷であったことが幸いして、松野は櫻井の失脚後も山林局に留まることができる。そして、ついに東京山林学校の創設を達成することになる。

樹 木 試 験 場

設立の事情

松野は杉浦局長のもとで、官林調査や直営伐採事業の現地指導にあたったが、現場に手足となる人材が乏しいため、思うように事業が進まなかった。また中央に、森林・林業の重要性を十分に理解する人材が少ないことも障碍であった。こうした状況を変え、官林の経営をさかんにするには、まず林学教育を行なう学校を興し、林業技術者を養成することが急務と考えるようになる。

そこで機会を見ては関係の実力者に、林学の学校の必要性を説くが、なかなか相手にされない。たまたま同郷の先輩で、内務大書記官の品川彌二郎に話をしたところ、財政的に考えて学校教育までは無理だが、試験場程度なら上に頼んでみようということになる。さっそく松野は、東京府内に馬車を走らせて樹木試験場の適地を探し、北豊島郡西ヶ原の高台（現在、北区西ヶ原二丁目）に所在の民有茶園など3町歩を候補地とする。

こうして1877/M10年12月、内務卿大久保利通の設置伺と太政大臣三條實美の裁可を経て、樹木試験場の設置が経常予算内での条件つきで認められる（附表-1）。松野の直属の上司である櫻井地理局長は、立場上これらの手続きを進めたが、内心は東京への設置に批判的であった⁶²⁾。曲折はあったが、民有地を購入し、主任に藤田克三、守園吏に池内眞三雄を雇入れ、1878/M11年3月には、生垣による区画の設定、管理官舎の建設、苗木の植栽などを開始する。

農学校の開校

同じ1878/M11年1月24日には、駒場に新築された内務省所管の農学校で、開校式が華々しく行なわれた。式には、明治天皇が親臨し、内務卿大久保利通ら政府要人が参加する。品川も松野

も、農学校の開校にいたる経緯を念頭に、樹木試験場の設置に関わったと想像される。

農学校の沿革は、1874/M7年1月、内務省勸業寮内藤新宿出張所（現在、新宿御苑）に農学掛を設けたことに始まる。農学掛の役割は、1. 内外農産物・農芸品の蒐集と展示、2. 農業関係の新説紹介、実験、報告、3. 農業生の教育の三つである。1に対しては農業博物館、2に対しては試験場を設置した。3に対しては、農事修学場（のちの農学校）を設けることになり、1875/M8年2月、太政大臣の裁可を受けた。この間、試験場で農業生を募集し、牧畜、樹芸、農業機械使用などの現業教育を行なったが、中途半端との理由で中止する。

本格的な教育を行なうためイギリス人教師を雇い、1876/M9年10月に農学、獣医学生徒の入試を実施する。11月に内藤新宿から駒場への移転計画がきまり、土地の確保と開墾、校舎などの建築が始まる。翌年1月から内藤新宿出張所内の農業博物館を仮教場として授業を開始、同年末に駒場へ移転、その翌年の1878/M11年早々に、上記の開校式を迎えることになる¹⁾。

樹木試験場の活動

樹木試験場は、初め内務省地理局山林課のもとにあった。1879/M12年5月、内務省に山林局がおかれると松野を責任者として試験場掛が設けられ、ほぼ以下の役割を担った。樹木試験場の管理、山林の学術的研究、樹木苗の栽培法、樹種別成育条件・効用の調査、材鑑と林業器械の蒐集、日本樹木誌・山林叢書・雑報の編集など²⁴⁾。

駒場農学校等史料²⁾のうちの、樹木試験場史料を通覧すると、樹木種子・苗の国内外からの蒐集、苗木の育成、温室の建設、育成苗木の払下げ、シイタケ栽培試験、木材見本・材鑑の国内外からの蒐集、森林の保全方法やマツケムシ対策などについての地方からの照会への回答、など多彩な活動の記録がある。なお、1882/M15年1月には「山林局樹木試験場報告」第1号を発刊する。

山林学校設立への下準備

松野は20年近く経ってから樹木試験場の当時は回想し、つぎのように語っている。「東の方、道灌山（注、西日暮里から田端にかけての高台）から、西の方、飛鳥山にいたる一圓の地を得、他日、山林大學校を設け、構内に於て學生の播種、植樹の試験をなすに十分の餘地あらしめ、尚豆州天城山をも譲受けて學校の附屬地とし、學生の實習場に供せんことを期せり」⁹⁾。

この夢の実現に向けて、折々に土地を購入して敷地の拡張に努め、山林学校時代までに10町歩弱となる。また、1879/M12年開催の内国勸業博覧会に出品した、木材などの標本類を保管する名目で、陳列場1棟を場内に建設したが、将来に備え教室に転用できる構造にする。なお1879/M12年2月には、博物局から同局所蔵の山林関係書籍を借用、翌1880/M13年5月には、ドイツに留学中の中村彌六に依頼した山林学関係書籍48冊を受け入れるなど、教育資料の充実も図る²⁾。しかし、上司の櫻井は時期尚早と消極的で⁶²⁾、松野の山林学校設置計画は相手にされなかった。

さきに述べたように、1880/M13年2月、松方正義が内務卿に就任すると、櫻井は地理局長に

左遷される。後任の山林局長は品川彌二郎が兼任し、山林局の課や人員の削減に努めており、松野が山林学校の設置を提案できる情勢ではなかった。この時期、松野は品川の勧めにしたがい、局員を集めて林学の大意を講義した。また一方では、民間人有志を対象に、林業・森林の重要性に関わる講話を定期的に行ない、1881/M14年1月には「山林学共会」を組織した。こうした集会の折に山林学校の必要性を訴え、設立の機運を盛り上げようと考えたのである。なお「山林学共会」は、翌1882/M15年に「大日本山林会」へと発展する。

東京山林学校

設立の認可

1881/M14年4月、農商務省が新設され、山林局は内務省から移管される。初代農商務卿の河野敏鎌（1844-95）は地方出張で不在の期間が多く、また山林局長も同年11月に武井守正が就任するまでは空席に近かった。そのため松野は提案相手も定まらない状況にあったが、たまたま河野の臨時代理を務める西郷従道（1843-1902、西郷隆盛の実弟）に対し、山林学校設立の宿志を訴える機会が訪れる。多分、相手にされまいと覚悟しての熱弁であったが、意外にも「私がやりましょう」との確答を得て欣喜雀躍する。

同年7月8日、松野は山林局に新設された学務課の課長を命じられ、山林学校設立の準備を開始する。西郷従道は、同月20日に西ヶ原の樹木試験場を視察、10月20日には二代目農商務卿に就任する。翌1882/M15年、学校の組織などの計画が完成、7月7日に農商務省は西ヶ原に「山林学校」を設置することを上申書にまとめ、太政大臣に提出、10月25日に裁可される。上申書は、設置の理由書と山林学校規則で構成されている（附表-1）。

農商務省から学校創立費として6千円が交付され、陳列場の教室への改築、化学教室、木材置場、学生寄宿舎の建設などが行なわれた。11月初めに学務課は廃止され、西ヶ原で事務を開始、樹木試験場は名称を廃止して学校附属となる。このころ、学生の募集を発表したところ、50名の定員に対して百余名の応募者があり、江崎政忠ら49名の入学を許可する（実際の入学者は48名）。11月11日に松野が山林学校長に任命され、同月21日に校名が「東京山林学校」に決まる。

軍人で、のちに日清・日露戦役に向けての海軍作りに功績のあった西郷従道が、山林学校の設立に賛同したのは、以下のような判断によると手束⁶²⁾は推測している。畑違いの林政については、先輩の大久保利通の遺した方針どおりにやればよい。学校設立につき、「大久保建白書」に明確な記述はないが、官林経営は林学教育による指導者養成から始めるべきだとする松野の主張は、すでに発足していた陸海軍の士官養成の制度に照らして合理的である。財政的な負担については、大蔵卿が大隈重信から、自分と同じ薩摩出身の松方正義に替わるので（注、明治14年の政変による）、多少の無理は聴いてもらえるだろう。

開校式

1882/M15年12月1日、西郷農商務卿の臨席のもと、西ヶ原で東京山林学校の開校式が行なわれる。松野は、ときに満35歳、その生涯で最も輝いた日である。当日の状況、挨拶、訓諭などの詳細は、山林誌に掲載されている（附表-1）。

式は、松野校長の挨拶に始まる。ついで西郷農商務卿から訓諭があったが、「復タ論ヲ俟タス」の「論」を薩摩弁で「ドン」と発音したことが、永く学生達の記憶に残る。以上に対し、生徒総代の中川鉦次郎が答辞を述べるが、緊張のあまり帽子を脱ぐのも忘れる⁸⁾。

つぎに、山林学校と同様に農商務省に所属する東京商船学校の中村六三郎校長の祝辞があった。最後に恩田啓吾から祝辞が述べられる。山林誌に説明はないが、恩田啓吾は内務省地理局の文書課員である。当日は、櫻井 勉地理局長も招待されたと思われる。しかし上述のように、松方や品川との軋轢、樹木試験場や山林学校設立に対する批判的な考え、松野に対する評価など、櫻井には種々の確執があり、恩田の代理出席になったと想像される。

なお同じく農商務省に所属する駒場農学校（1882/M15年5月、農学校を改名）では、東京山林学校の開校を記念して当日は臨時休校とした。祝辞は呈しなかったが、関係者が式に参加したと思われる。

山林学校では当初、学生は緑色小倉地（木綿服地）の制服・制帽を着用する。松野がドイツの森林官の服装を参考に考案したとされるが、町では悪童に「青だけ」「芋虫」「青鬼」などと囃され、悪評であった。そこで後には、灰色の羅紗地（毛織服地）に緑色の肩章をつけた制服と緑色の羅紗帯を巻いた制帽に改められる^{7,33)} [有田正盛、中牟田五郎談]⁴⁵⁾。

学生達が山林学校を志願した理由はさまざまである。後年の回顧談⁴⁵⁾では、他の官立学校入試に失敗、徴兵のがれ、健康のため、海軍志願のところ軍艦建造に木材が必要と考え転向、などがあげられている。そうしたなかで江崎政忠は、入学時に林業や森林につき多少の知識があり[片山吉成談]⁴⁵⁾、仲間から一目置かれていた。

江崎は、松野から山林学校への入学を勧められるが、外国語ではなく日本語で講義が行なわれることへの不満を表明する。ほかの学校に比べ、山林学校には外人教師が一人もおらず、授業内容に不安を感じたのであろう。これに対して松野は、ドイツで最新の林学を修めた中村彌六が間もなく帰国、本人は行政面での活躍を希望しているが櫻井派なので無理、結局は山林学校で教えることになろうと期待を込めた予想を語る。山林学校が開校した1882/M15年12月に中村が帰国、さっそく江崎は級友の中川鉦次郎を誘って訪ねたところ、いろいろと説諭されたという [江崎談]⁴⁷⁾。

開校からの1年間

東京山林学校の学科課程を表-1にしめす。修業年限は前期1年、後期2年の計3年間で、各学年は2級（冬学期と夏学期）で構成される。各学年は9月11日に始まり翌年7月10日に終わる

(冬学期：09/11-02/20，夏学期：02/21-07/10)。

表－1．東京山林学校級別学科目 1882/M15年³⁶⁾

前期第1級	植物学，無機化学，物理学，数学，鉱物学，記簿法，製図法，山林歴史
前期第2級	植物学，動物学，有機化学，物理学(附気象学)，地質学，画学，幾何学(三角術)，山林歴史
後期第1級	山林植物学，山林動物学，山林測量術，樹木測知法，造林学，山林保護法，山林利用論
後期第2級	山林植物学，山林動物学，山林測量術，樹木測知法，造林学，山林保護法，山林利用論
後期第3級	営林規法論，獸糞学，山林義務解除法，林政論
後期第4級	営林規法論，経済論，法律学，林価算法

一般科目については、担当教官の推薦を東京大学へ依頼した。その結果、安本徳寛を中心とする、主として医学部別課関係の教官が、助教または嘱託として着任する。また専門科目は、ただ一人の教授である松野が担当し、補助として山林局ドイツ語翻訳係の堀 保が助教になる（表－2）。

表－2．東京山林学校職員録²⁴⁾

校長：松野 礎

幹事：1882/M15 種田 邁，1883/M16 増田穂風，1884-85/M17-18 松本 収，1885-86/M18-19 奥田義人

身分（期間）	氏名	担当科目
教授（1882-86/M15-19）	松野 礎	造林，保護，利用，山林歴史など
助教（1882-84/M15-17）	安本 徳寛	植物
助教（1882-84/M15-17）	下山順一郎	化学
助教（1882-84/M15-17）	飯盛 挺造	物理
助教（1882-84/M15-17）	堀 保	松野教授補助
嘱託（1882-84/M15-17）	富士谷孝雄	鉱物，地質
嘱託（1882-84/M15-17）	菅沼 慎一	数学
助教（1882-85/M15-18）	瀧田鐘四郎	動物
教授（1883-86/M16-19）	中村 彌六	林政，管理，設制，測樹，林価算法，較利など
助教（1883-85/M16-18）	志賀 泰山	物理，気象
助教（1884-85/M17-18）	松本 収	化学
助教（1884-86/M17-19）	石田二男雄	測量，土木
助教（1884-86/M17-19）	多々良恕平	数学
助教（1885/M18）	山口鋭之助	数学
助教（1885/M18）	和田維四郎	鉱物，地質
教授心得（1885-86/M18-19）	中村 孟	法律
教授心得（1885-86/M18-19）	中隈 敬藏	経済，理財
助教（1885-86/M18-19）	奥田 義人	法律
助教（1885-86/M18-19）	藤山 治一	動物，ドイツ語
助教（1885-86/M18-19）	加藤 保吉	植物
教授心得（1886/M19）	北尾 次郎	物理，気象，数学

幹事に山田嘉猷(1883/M16修業式)の氏名が見当たらない。苗圃実習などの指導には、池内眞三雄，北原大發智らがあたった。

山林学校では開校翌年の1883/M16年には、3月に冬期試験を、7月に夏期試験を実施、9月17日に前期の修業證書授与式を行なう。開校が前年の12月1日であったので、日程の遅れを種々調整したと思われる。

前期は一般科目が大半を占め、松野による専門科目の講義はわずかであった。4月の試験休みには、松野が引率して相州志田山で植樹実習を行ない、実際の山林を知らない多くの学生には、長く記憶に残る行事となる。池内眞三雄らの覚束ない指図に従い下刈、地拵を行い、西ヶ原で育てたスギ、ヒノキなどの苗を植えたが、はたして成林したのかどうか、半世紀後の座談会での話題になっている⁸⁾ [有田ら談]⁴⁵⁾。

9月17日の修業證書授与式には、山林局から武井守正局長ほか数名、農商務省から大、少書記官、駒場農学校および東京商船学校から各幹事が参加した。式は松野 磯校長の訓辞に始まり、安本徳寛助教の訓示、中川柳次郎の答辞、修業證書授与と優等生の表彰、山田嘉猷監事(幹事?)の謝辞で終わる。このうち安本助教の訓示は、学生の勉学態度と退学者の少ないことを称賛するものであった(附表-1)。

38名の前期修了者のうち16名が、優等生として表彰される。とくに中川柳次郎、江崎政忠、田町與三郎、秋山謙藏の4名は、成績優秀で官費生となる。

このクラスからは1886/M19年10月に13名、翌年6月に3名が卒業した。合計16名の卒業生数は入学者48名の1/3に過ぎない。最初の1年間は他校に比べて退学者が少なかったが、学年が進み林学の内容が明らかとなるにつれ、また規則改正による修業年限の延長などもあって、脱落者が増えたと思われる。

中村彌六の教授就任と経歴(東京山林学校教授に着任まで)

1883/M16年夏に入学試験が行なわれ、80余名の出願者のうち村田重治ら42名に入学が許可され、9月から学生数が倍増する。10月には待望の中村彌六が教授に就任し、山林学校の雰囲気が発化する。

ここで、中村彌六の生立ちから東京山林学校教授に着任するまでの経歴を記述する^{33, 40)} (附表-2)。

中村彌六は信州高遠藩の儒官、中村黒水の次男として、1854/安政元年12月、長野県上伊那郡高遠町で生まれた。祖父中村中侗は江戸昌平黌に学び、帰郷後、藩黌進徳館を創設、文武の人材養成に努力したことで知られる。

学者の家に育った中村彌六は、進徳館で抜群の成績をおさめる。1869/M2年に上京して安井息軒に師事、翌1870/M3年に大学南校に入学しドイツ語を学ぶ。

大学南校は、1684/貞享元年設立の幕府天文方に始まり、蛮書和解御用掛(1811/文化8年)、蕃書調所(1857/安政4年)、開成所(1863/文久3年)などを経て、明治政府の開成学校(1868/明治元年)になり、翌1869/M2年大学南校と改称する。

大学南校は、その後、南校（1871/M4年）、第一大学区第一番中学（1872/M5年）、第一大学区開成学校（1873/M6年）、東京開成学校（1874/M7年）と頻りに名称を変え、1877/M10年4月に東京医学校と合併して東京大学（法理文学部、医学部）となる。在学生の学修の進度に応じて上級学校が設置された時代である。

東京帝国大学五十年史（上冊）に「第一番中學生徒」（1872/M5年）と題された中村彌六ら6名の集合写真が掲載されている⁶⁷⁾。中村のほかに、生涯を通じて親交があった志賀泰山や、後々も交友のあった穂積陳重（1856-1926、法学者、法科大学長）、杉浦重剛（1855-1924、教育家）や、一瀬勇三郎（1864-1932、司法官、関西大学長）、野村鈺吉（1855-96、司法官、関西大学創立者）が写っている。第一番中学校は、上等中学（1～6級、生徒数180名）、下等中学（1～6級、181名）および予科（29名）で構成され、それぞれ英、仏、独の各学部に分かれている⁶⁴⁾。写真は、独逸学部の、あるクラスの全員であろうか。

この時代の学校は外人教師の使用言語により3学部に分かれていたが、1873/M6年、文部省は経費節約のため、専門学科の教授用語を英語に限る方針を定める。暫定的に仏蘭西学部を諸芸学部、独逸学部を鉱山学部と改称して継続するが、東京開成学校時代の1875/M8年7月、独逸（鉱山）学部は廃止される。在学生46名の前途は、鉱山学部を改称した化学部に6名、英語学部へ転部14名、外国語学校または医学校へ転校19名、退学7名と、希望により決まる⁶⁴⁾。

東京開成学校に在学中の中村が、どの途を選んだかは明らかでないが、翌1876/M9年8月には東京外国語学校の、ついで大阪師範学校のドイツ語教員を務める。1878/M11年に同校が廃校となり、同年10月からは内務省地理局雇としてドイツ書の翻訳にあたり、ガイエル（Karl Gayer）の造林や森林利用の著書を読み、林学に興味を持つ。さらに各藩の林制関係資料を調べて、日本における林業の重要性を認識する。そこで上司の櫻井 勉局長に、林学研究の留学生を欧州に派遣することの必要性を進言し賛同を得る。

しかし藩閥政治の時代に小藩出身の自分が選ばれる確率は低いと考え、少しでも可能性を高めようとドイツへの私費留学に出発する。用意できた資金は僅かで、濱尾 新から節約のため、インド洋経由の3等船客を勧められるが、アメリカ経由1等船客での渡航を決め、厳しく叱責される。

1879/M12年7月に横浜を出帆、背水の陣を敷いての留学で、それまでの「白水」の号を「背水」に改め、覚悟のほどを示す。同年10月にドイツに到着、残る資金が少ないので物価が安い地方都市アイゼナッハ（Eisenach）に所在した高等森林専門学校を選び、森林経理学、林政学、森林数学などを聴講し、実地に重点を置く林学を修める。働きながら勉学を続けるが、佐野常民、櫻井 勉らの尽力によって、1880/M13年3月末に現地で大蔵省御用掛に採用され、ドイツの山林税賦課法、官林管理法などの調査を命じられる。

これにより経済的に安定、1881/M14年にミュンヘン大学に移り、ハイエル（Friedrich

Casimir Gustav HEYER) の森林経理学, 較利学, ハルチツヒ (Robert HARTIG) の植物生理学, エーベルマイエル (Ernst EBERMAYER) の森林化学をはじめ, 森林法律, 理財学, 経済学, 文明史, 外交史などを聴講する。ハルチツヒのもとで「日本産針葉樹材の比較解剖」の学位論文をまとめ, 1882/M15年6月にミュンヘン大学を卒業する。

ミュンヘン大学では, のちに東京農林学校の外国人教師として来日するハインリヒ・マイエルと同窓になる。マイエルの父はミュンヘン近郊のグラフラート (Grafrath) 営林署長であったので, しばしば見学に訪れる。そのおり寄贈した日本産樹木種子のうちニホンカラマツは, 後年, 見事な林に成育する。

なお, 大蔵省からの課題の調査や, 憲法関係の調査で訪独した伊藤博文一行への協力などを行ない, 同年12月末帰国する。しばらくは大蔵省で, 調査結果の整理, 翻訳などに従事する。農商務省から, 東京山林学校の教授にとの話があり, また学生の江崎政忠, 中川柳次郎からも講義を聴きたいとの願望を聞く。

しかし, 中村には山林局に入り, ドイツで得た知識を行政面に生かしたいとの強い希望があり, 教師になる積りはなかった。1883/M16年10月4日付農商務省権少書記官の辞令を, 続いて同月20日には兼任東京山林学校教授の辞令を受ける。山林行政の傍ら学校の面倒もみるとの約束で承知したが, 出仕してみると行政的な仕事は与えられず, もっぱら山林学校の職務に励むように申し渡される。ベテンにかけられたと憤慨するが, もはや後の祭りと観念し, 以後, 林学教育に専念することになる。

前述のように山林局は品川彌二郎の系統で固められており, 櫻井系として警戒されていた中村が受け入れられないのは, 当然の成り行きである。松野の予言と期待どおりに中村が着任したことで, 東京山林学校は遅滞なく専門教育を続けることが可能になったと見ることができる。

専門科目の講義・討論

山林学校では, 最初の入学生が1883/M16年秋から後期課程に進み, 専門科目が主となる。専門科目の教官は, 松野教授と補助の堀助教だけであったが, これに中村が教授として加わることになる。中村は, 松野につき「エーベルスワルドに於いて林学を学んだと称する人」と評した³³⁾。松野の造林学講義につき「豈それ然らむや, それ然り」に終始し要領を得ないと批判したのも [和田國次郎談]⁴⁵⁾, おそらく中村であろう。また堀については「自身が充分に解っていない林価算法の講義をするのだから生徒に理解できるはずがない」と断じている³³⁾。

こうした専門教育に不安を感じた中村は, 自ら多くの専門科目を引き受け, 週36時間の講義を行なうことになる³³⁾。ただし, 山林学校関係の資料は少なく, 上記を裏付ける日課表(時間割)は残されていないようである。当時の学生の回顧談によると, 松野からは保護, 造林, 中村からは測樹, 較利, 設制の講義を受けたという⁴⁵⁾。めずらしく残された1884/M17年3月からの, 4級(後期第2級)学生の日課表によると, 中村は測樹と造林の, 松野は保護の講義を担当している²⁾。

中村の講義によって、江崎らは「森林学とは何か」を始めて理解できたという⁸⁾。のちの東京農林学校時代の簡易科および乙科生徒は、中村の講義につき、声量があり名調子で、聴く者に快感を与えたと回想している²⁸⁾。しかし、授業の態度は峻厳で痼癩も強く、黒板の悪戯書きに腹を立てて休講を続け、実際には関係のない乙科生徒達を困らせたこともあったという [高木摠夫談]⁴⁶⁾。

この時代、大日本山林会は毎月小集会を開催、テーマを決め討論を行なっている。松野らが司会し、山林学校の教員、学生も参加、活発に意見を述べている。集会は、専門科目のゼミの役割を果たしていたように思われる。

校則の改正

中村が着任して半年ほど経つ1884/M17年5月、校則の大改正があった。修業年限が3年間から5年間に延長され、学科課程が表-3のように大幅に変更される。延長は官林での実習重視による。また課目名の「山林」が「森林」に改められる。この改正には、中村が深く関わったと思われる。

表-3. 東京山林学校級別学科目 1884/M17年³⁶⁾

第10級	錬兵術, 代数学, 幾何学, 普通植物学, 物理学, 化学, 画学, 実業 (平素ハ本校構内ニ於テ実習セシメ尚授業ノ都合ニ由リテ一時地方森林ヘ派遣シ之ヲ演習セシム 以下之二做フ)
第9級	錬兵術, 幾何学, 普通植物学, 普通動物学, 金石学, 物理学, 化学, 画学, 実業
第8級	錬兵術, 記簿法, 物理学, 化学, 地質学, 製図学, 三角術, 分析化学, 森林植物学, 森林動物学, 実業
第7級	錬兵術, 土性学, 測量術, 気象学, 森林植物学, 顕微鏡用法, 森林動物学, 測樹学, 森林保護論, 造林学, 森林利用学, 実業
第6級	錬兵術, 測量術, 気象学, 測樹学, 森林保護論, 造林学, 森林利用学, 林価算法, 森林土木学, 実業
第5級	錬兵術, 林価算法, 森林較利学, 森林設制学, 森林禁樵論, 理財学, 森林法律, 経済学, 実業
第4級	錬兵術, 森林較利学, 森林設制学, 林政学, 森林法律, 理財学, 経済学, 実業
第3級	実地演習 (専ラ地方森林ニ在テ学業ヲ実習セシム 以下之二做フ)
第2級	実地演習
第1級	実地演習

なお、従来の校則にあった「生徒」の呼称が新校則では「学生」に変わっている。それまでも、たとえば前記の修業證書授与式における挨拶で安本助教は「学生」の用語を使っている。東京大学では1881/M14年に各学部の本科生徒に限って「学生」と称することを決めた (附表-1)。そうした状況下での「学生」の使用は、山林学校の心意気を示したものであろう。

学生募集は、これまで年1回で、9月入学、定員50名であった。新校則では、年2回、2月および9月入学、定員各25名となる。2月募集は、校則改正以前の1884/M17年2月から実施され、

本多静六ら24名が入学した。また同年9月には川瀬善太郎ら20名が入学した。翌1885/M18年2月には和田國次郎ら25名が、同年9月には9名が入学した。1886/M19年2月入学の志望者に対しては、同年1月29日から2月4日まで試験が行なわれた。初日の受験生140名余は日ごとに減り、合格したのは佐藤銀五郎ら8名に過ぎなかった〔佐藤談〕⁴⁵⁾。これが東京山林学校最後の入学生となる。

学外実習

中村は表-4のように、着任後、各地で行なわれた実習の指導にも当たる。これらの実習には、冬季休業(12月21日～翌年1月10日)および夏季休業(7月11日～9月10日)の期間を利用した。1885/M18年の天城山実習には、夏休みの60日間があてられ、江崎らのクラス(1882/M15年12月入学)は施業案編成を、村田らのクラス(1883/M16年9月入学)は測量を行なった。初めて天城山の中腹以上に成立する原生林を目前にした中村彌六と石田二男雄は、その規模に圧倒され、どのように調査したものか途方に暮れていたと、のちのちまで学生の語り草となる⁸⁾。翌年夏の森林設制実習は、東京農林学校への移行で、中途打ち切りになる。

表-4. 東京山林学校時代の学外実習

年/月	指導教官	内容	場所など
1883/M16/04	松野 礪	造林	相州志田山官林 ⁸⁾ [有田談] ⁴⁵⁾
1884/M17/12	中村彌六, 石田二男雄	測量, 測樹	上州館林大屋原官林 ⁸⁾ [有田談] ⁴⁵⁾
1885/M18/07	中村彌六, 石田二男雄	測量, 設制	豆州天城山, 60日間 ^{8,30)} [有田談] ⁴⁵⁾
1885/M18/12	中村彌六	設制	遠州横須賀小笠山 ²¹⁾
1886/M19/07	中村彌六	設制	上州館林 ²¹⁾

学生募集と山林学校予備校「明治義塾」

山林学校には、年々多数の志望者があったが合格できるものは少なく、しかも、せっかく入学できても、多くの退学者があった。中村は、入試不合格は基礎学力の不足に、途中退学は林学に関する予備知識の不足に因ると考える。そこで1884/M17年に近畿から和歌山へ出張したさいには、各所で山林学校と林学の内容を紹介し、入学を勧誘した。後日、入学の相談に中村宅を訪ねたのが、川瀬善太郎、白杵永次郎、三木隆太郎、望月 常らである。また、かつての学友、杉浦重剛が伝通院近くで開いている「礪川塾」の一部を借りて、山林学校予備校「明治義塾」を設け、基礎学を教授する。そのときの生徒で林学を修めたのが、新(旧姓千葉)萬らである^{26,33)}。

教育陣の充実(教官の更迭, 教官のドイツ留学, 外国人教師の招聘)

中村は一般科目についても教官の充実を考える。東京師範学校から旧知の志賀泰山を物理学, 気象学担当の兼任助教として招いたのは、中村自身が教授に就任する以前のことである。その後、倍に近い給料で専任の助教にしたところ、厚遇による引き抜きと、師範の校長から苦情が出る。

中村は能力相応の待遇は当然のことと反論する³³⁾。個々の理由による転退職もあったろうが⁹⁾、やがて安本徳寛系の教官は総退陣し、一般科目の教官が一新する⁸⁾ (表-2)。

さらに中村は、長期的な観点で貧弱な専門教育の体制を補うため、ドイツへ林学研究の留学生を派遣すること、およびドイツから外国人教師を招聘することを考える。1885/M18年6月、1年余の欧州視察を終えた山林局長武井守正は、ドイツ林業に深い感銘を受けて帰国する。これを好機と考えた中村は、上記の目標に向け、裏方として努力する。前者は1885/M18年9月からの志賀泰山と松本 取のドイツ留学、後者は東京農林学校時代に入ってから、マイエルおよびグラスマンの来日として実現する^{8, 33, 40)}。

留学した志賀泰山に替わる教官として、中村はドイツで友人になった北尾次郎 (1853-1907) を東京大学理学部 (当時、非職教授) から招く。北尾は1870/M3年、大学東校在学中にドイツへ官費留学、理学を専攻、1883/M16年に帰国、のちに農科大学「農林物理学・気象学」講座の初代担任教授になる。

また、松本 取 (岡山出身、1880/M13年東大理、化学科卒) に替わる幹事には、奥田義人 (1860-1917) が着任する。奥田は1884/M17年東京大学法学部卒、のち農商務省関係を主とした官界で活躍、大正年代初期の山本権兵衛内閣の文部大臣、司法大臣を務める。

北尾は学校教育について、学生は学級に関係なく希望の課目を聴き、試験に合格さえすれば、3年のところを2年で卒業しても可との、ドイツ流の考えをもっていた。奥田は北尾の意見に賛成であったが [和田談]⁴⁵⁾、実施する間もなく山林学校は廃校になる。しかし、この考えは東京農林学校へ移行時の学級編入試験に生かされたようである。

高橋琢也と林業関係資料の翻訳

山林局長武井守正は、欧州から多数の林業関係資料を持ち帰り、その翻訳を農商務省兼務の中村彌六に依頼する。しかし中村は、山林学校に追いやられたことへの不満から、翻訳作業を少しも進めない。やむなく武井は、品川彌二郎の了解のもとに、当時陸軍参謀本部で翻訳に従事していた西 周 (1829-1897) にドイツ語の翻訳に堪能な人材の推薦を求める。その結果1885/M18年11月、参謀本部翻訳官の高橋琢也が山林局に移る⁸⁾。

高橋は精力的に仕事を進め、ドイツの制度を参考にして官林の官制を作成、武井は、これを1886/M19年4月に公布する。しかし、早急に実施された官制は、現地の実状に合わない点が多く、はげしい非難を浴びる。その責めを負って翌1887/M20年3月、武井は立案者の高橋とともに辞任する⁶²⁾。

なお中村は、1886/M19年1月に兼務を解かれ、山林学校教授専任となっている。

東京農林学校林学部（林科）

東京山林学校の廃止

1886/M19年4月、東京山林学校官制が公布され、駒場農学校とともに農商務大臣直轄となる。同年7月、農商務大臣西郷従道（臨時代理、本務は海軍大臣）は、東京農林学校の設立を閣議に諮り認められる。東京山林学校と駒場農学校を廃止し、駒場に東京農林学校を設置する内容で、主目的は実質的な合併による経費の節約にある。

学校当局や教員には、全く事前協議のない措置であったから、種々の不都合を生じる。山林学校では実地演習のさいに、往復旅費として日当を学生に支給していた。このときも、静岡県和知官林で本間誠次郎と田町與三郎が、福井県坂井官林で中川鉦次郎と江崎政忠が実習中であった。廃校によって日当の支給が困難になり、学校当局は山林局長武井守正に帰校旅費の支出を要請する²⁾。

中村彌六は、学識経験もない刀筆吏（小役人）が勝手に学校を廃合し、それに反対をしない松野校長に強い不満を抱く。同意見の北尾次郎とともに辞職を考えるが、幹事の奥田に「これまで教育してきた学生の前途はどうなるのか」と慰留される³⁾。

松野にとって西郷は、山林学校の設立に尽力してくれた大恩人であり、抗議することなど到底できなかったと思われる。西郷は1885/M18年から1898/M31年まで、交替による中断期間はあったが、海軍大臣として乏しい国家予算のもとで海軍の整備に苦心した。農商務大臣の代理は1886/M19年3月から7月までの短期間であるが、その間に自らが関わった東京山林学校の始末をつけ、多少とも国家予算の節減を図ったと考えられる。

こうして東京山林学校は卒業生を出すことなく廃校になった。創立以来の在籍者数などの推移を表-5にしめす。

表-5. 東京山林学校の入学者数、在籍者数

年	2月入学	9月入学	入学者累計	年末在籍者数
1882/M15	—	48*	48	
1883/M16	—	42	90	79
1884/M17	24	20	134	102
1885/M18	25	9	168	126
1886/M19	8	—	176	124**

*12月入学、**7月22日現在（東大百年史、通史1、p.767を改変）

東京農林学校への編入試験^{24, 25)}

廃校につき在籍学生は、つぎのように通告される。「今般勅令第五十六號ヲ以テ駒場農學校及東京山林學校ヲ廢シ 更ニ東京農林學校被置候ニ付 右兩校學生ハ總テ農林學校へ編入相成候條

此旨廣告ス 明治十九年七月廿三日 東京農林學校」。夏季休業中のことで、帰省先や旅行先で伝え聞いた学生もあったという。ついで学生各人は「本校ハ來ル九月十一日ヨリ始業可致ノ處 惡疫流行ニ付九月二十五日迄延期ス 但始業ノ際ハ臨時試験ヲ施行ス」との8月31日付葉書を受け取る。

在京の学生は、臨時試験の目的や内容の概要を知り、準備を行なう者もあった。しかし、地方に在って全く事情を知らずに予告の始業期日の前日に登校し、以下の掲示を見て仰天する学生も居た。「校達八號 元駒場農學校及東京山林學校ヨリ本校ニ引繼キタル學生生徒ヲ 本校各學部ノ相當級ニ編入ノタメ 來二十九日ヨリ臨時試験ヲ執行シ 其試験課目 處分法並日割ヲ定ムルコト別紙ノ如シ 但獸醫學部學生生徒及農學部速成科生徒ハ別ニ之ヲ試験セス 明治十九年九月二十四日 東京農林學校長 前田献吉」。

発足時の東京農林学校は、農学部、林学部、獣医学部、および各学部へ進むための予備科からなり、別に速成科を置いた。修業年限は農学部、林学部、速成科が2年間、獣医学部、予備科が3年間である。元山林学校学生は、林学部本科1、2年級、予備科1、2、3年級のいずれかへの編入となるが、試験に合格さえすれば希望の級（志願級）へ進めるとの内容であった。

上記「校達八號」の別紙には、各級の試験課目、試験成績による編入級の決定方法（處分法）、試験日程が記されていた。たとえば、林学部本科2年級の編入試験科目は造林学、測樹学、林価算法、土木学、定性分析問題、気象学、財政学で、同1年級は植物学、動物学、定性分析問題、測量、高等数学、法律学、経済学である。また、志願級への編入条件は、全課目60点以上か、平均60点以上で1課目のみ30点以上または2課目のみ40点以上の、いずれかである。この条件に達しないときは、細かな成績区分により志願級より1または2級下への編入となる。さらに成績が悪ければ編入せず、つまり進学できないとされた。

なお、元山林学校開校時の入学生のうち、第3級および第4級生は同校規定の学業を修了したのものとして、東京農林学校から卒業証書を授与されることになる。それ以外の学生104名が受験したが、多くは相当級よりも1級上を志願級に届け出た。編入者の総計は67名で、内訳は本科2年11名、1年14名、予備科3年17名、2年25名である。残り37名は進学できなかったが、すべてが退学したわけではなく、他学部への転学者²⁵⁾や、速成科への入学者もいたようである。

編入試験の結果、それまでの同級生が上級や下級に別れ別れに編入されることになり、いろいろな悲喜劇もあったという。和田國次郎は1885/M18年2月入学で予備科2年相当であったが、本科1年に編入され、最短記録の3年半で卒業する。山林学校最後の、1886/M19年2月入学の佐藤銀五郎のクラスは試験の結果、全員5名が予備科2年に編入される。このため予備科1年生は居なくなり、佐藤らの翌年、1893/M26年の卒業生が0となる。予備科2年には上級生が加わり、25名となる [佐藤談]⁴⁵⁾。

両校の実質的合併にともなう事務処理や、学級編入試験などのすべては、山林学校幹事から引

き続き農林学校幹事になった，奥田義人の主導で進められる。奥田の存在は，山林学校側にとって心強かったという [和田談]⁴⁵⁾ [佐藤談]⁵⁸⁾。編入試験には，前述した北尾の「年数に関係なく試験に合格さえすれば卒業」との考えが取り入れられた。山林学校時代に川瀬善太郎は，賄征伐の首謀者として腕力にまかせた傷害事件を起こし，奥田に説諭された。このときの反論の態度が，奥田の心証を害し，試験成績よりも1級下に編入されたと，川瀬は回想している¹⁹⁾。

開校，教育陣，学科課程，学外実習

1886/M19年10月11日に開校式が行なわれ，駒場農学校校長から東京農林学校校長になった前田献吉から，設立の趣旨などにつき訓辞があった。両校の合併で，職員，書籍，器具などの重複を少なくし，予算を効率的に使用して学校の発展を図るとの内容である。

同月16日には，江崎政忠ら旧山林学校第3級生および第4級生の計13名が卒業した。

山林学校の教官の多くが農林学校へ移った（表-6）。林学専門科目の教官は，依然として松野と中村の2名のみである。

表-6. 東京農林学校職員録（林学関係）²⁴⁾

校長：1886-88/M19-21 前田献吉，1889/M22 高橋是清，1890/M23 前田正名
幹事：1886/M19 奥田義人，1887-89/M20-22 酒匂常明，1889-90/M22-23 豊島住作

身分	(期間)	氏名	担当科目 (その他)
教授	(1886-90/M19-23)	松野 礎	造林，保護，利用など
教授	(1886-89/M19-22)	中村 彌六	林政，管理，設制，測樹，林価算法，較利など
教授	(1886-88/M19-21)	石田 二男雄	測量，土木
教授	(1886/M19)	奥田 義人	法律
教授	(1886-90/M19-23)	北尾 次郎	物理，気象，高等数学
助教	(1886-89/M19-22) 教授(M23)	多々良 恕平	数学，物理，気象
嘱託	(1886-88/M19-21)	中隈 敬藏	経済，理財
教授	(1886-90/M19-23)	佐々木忠次郎	動物，森林動物
教授	(1886-90/M19-23)	守屋 物四郎	化学，林産製造
教授	(1886-90/M19-23)	西 松二郎	鉱物，地質
助教	(1886-88/M19-21) 教授(M21-23)	白井 光太郎	植物，森林植物
教授	(1888-89/M21-22)	林 正枝	測量，土木
傭外国人教師	(1887-90/M20-23)	オイスタッフ・グラスマン	林学諸科
傭外国人教師	(1888-90/M21-23)	ハインリヒ・マイエル	造林，森林植物
助教	(1888/M21) 教授(M22-23)	田町 與三郎	測量，製図など (簡易科/別科担当)
教授	(1889-90/M22-23)	和田 國次郎	設制，測樹，林価算法，較利(簡易科/別科担当)
教授	(1889-90/M22-23)	中川 鉦次郎	林学諸科 (簡易科/別科担当)
教授	(1889-90/M22-23)	志村 源太郎	法律，経済

東京農林学校では，短期間に2回の校則改正と学科目の変更があった。すなわち1887/M20年12月，林学部は林科，予備科は予科，速成科は簡易科と改称，修業年限がすべて3年間に延長され，学科目も変更になる。1889/M22年9月には，第二次の校則改正があり，林科は林学部の名称にもどり，簡易科は別科と改称され，学科目も一部が変更される。

表-7に比較的初期の林学部学科目をしめす。このころ（1886/M19年9月-1887/M20年7月）の授業表によると、松野は、本科1年の造林法、本科2年の森林保護法、森林利用法、林役解除法、速成科1年の造林法を、中村は、本科1年の測樹術、林価算法、本科2年の森林設制法、森林較利法、林政学を受け持っている²⁾。

表-7. 東京農林学校林学部学科目 1887/M20年7月²⁾

本科	独逸語学, 高等数学, 気候学, 森林植物, 森林動物, 水産論, 林産物製造法, 測樹術, 林価算法, 造林法, 森林保護法, 森林設制法, 森林利用法, 林役解除法, 森林統計, 森林較利法, 林政学, 森林法律, 林業水産業実習及旅行演習, 卒業論文
予備科	操練, 和漢学, 自在画学, 動物学, 植物学, 物理学, 代数学, 幾何学, 化学, 定質分析, 簿記学, 経済学, 独逸語学, 測量術, 製図, 土木学, 金石学, 地質学, 土壤学, 理財学
速成科	化学, 土壤論, 水産論, 平面測量, 製図(自在画学), 造林法, 森林保護法, 森林設制法, 森林利用法, 日本森林法律, 林業水産業実習及旅行演習

数次の改正があり²⁴⁾、文献36, 66に所載分は、1889/M22年9月のものである。

表-8に東京農林学校時代に行なわれた学外実習をまとめる。資料が不完全で、内容不明のものがあり、また、まったく脱落した例も多いと思われる。

表-8. 東京農林学校時代の学外実習²⁾

年/月/日	(期間)	学級	内容	場所など
1887/M20/04			地質	(西 松次郎指導)
1887/M20/04/23-	(3週間)	本科2年, 1年	設制	秩父郡官林
1887/M20/04/24-	(3週間)	予備科3年	測量	秩父郡官林
1888/M21/12/11-	(28日間)	本科2年	測樹	群馬県館林官林
1889/M22/03/28-	(25日間)	本科2年		天城山官林
1889/M22/03/28-	(25日間)	本科1年		遠州横須賀官林
1889/M22/03/28-	(30日間)	簡易科2年		遠州三方ヶ原

旧山林学校と旧農学校の感情的対立と融和

一片の法令で別々の学校に所属した教官や学生が、準備期間も無く一緒にされたので、発足時には多少の摩擦があった。東京農林学校では教官会議を設置し、管理運営を協議したが、旧東京山林学校側の勢力は相当なものであった。このため旧駒場農学校側には「庇を貸して母屋を取られる」と心配する教官も在り、弁も立ち行動力もある中村は、とくに目障りとされ、暗殺を口にする者さえ居たという³³⁾。

両校の学生間の懇親を図るために、各学部の学生有志が相談し、1886/M19年秋、池上本門寺で運動会を開く。奥田幹事も趣旨に賛成し、学校から資金援助を行なう。閉会に当り中村は、感情融和を促す演説を行ない、学生らに感銘を与える[志和地榮介談]⁴⁶⁾。翌年からの運動会は駒

場で開かれ、昭和年代初めまで続く「駒場の運動会」の始まりとなる⁴⁸⁾ [佐藤談]⁵⁸⁾。

1887/M20年6月30日、村田重治ら11名が卒業する。

私立農林学校予備校

このころ中村は、山林学校予備校の「明治義塾」と同趣旨で、「私立農林学校予備校」設立の必要性を提唱し、前田献吉校長を始め各学部教官の賛同を得る³³⁾。農商務省へ1887/M20年5月3日付援助を要請する²⁾。その結果、旧蚕糸試験場解体材の提供があったが、資金援助は無理と言われる。資金の寄附を募るが105円集まっただけで、前途が怪しくなり、前田を始めとし予備校校長予定の松野ら、趣旨に賛同した多くの教官が逃げ腰となる。

そこで主唱者である中村は、やむなく前田の斡旋で2千円を個人名義で借金、信濃町に校舎を建設、地方出身者のために寮も設ける。1887/M20年秋に開校、教員の手配など、運営雑務の大半も、中村が引き受ける。当初は独逸語部と英語部を設け、中村自らがドイツ語を教える²⁶⁾。のち、東京農林学校の外国語入試課目が英語のみになり、独逸語部は廃止される。

資料が乏しく、全容は明らかでないが、予備校生の半分ほどが、農科大学へ進学したといわれる。中村の記憶および生徒の集合写真の氏名から判明した農科大学卒業生を、学科別、卒業年順に附表-1に記載する。これは一部に過ぎず、たとえば新島善直（1896/M29年、林学本科卒、北海道大学林学科の創始者）も同校に在籍したのち、1888/M21年に東京農林学校に入学したが、新入生の大部分が予備校出身者であったという³⁴⁾。また予備校から慶応義塾に入学し、商法の専門家になった青木徹二のような例もある³³⁾。当時、東京農林学校に在学中の川瀬善太郎は、予備校寮の舎監を務め、その手当を学資にあて、学業を続けることができた [川瀬談]⁴⁵⁾。

このように予備校は、多くの青年の進学を援けた。しかし、東京農林学校が農科大学へ移行するとともに閉鎖され、中村には上記の借金のみが残った。「閉校は閉口に通ずる」と冗談めかしているが、利子の返済すら滞り、2千円の借金は大正年代末には、元利合計1万数千円に太り、終生中村を苦しめることになる³³⁾。

1888/M21年7月、和田國次郎ら14名が卒業する。

傭外国人教師の活動

1887/M20年末から翌年初めにかけて2名のドイツ人教師が着任する。オイスタッハ・グラスマン (Eustach GRASMANN, 雇用期間1887/M20年11月11日-1895/M28年7月12日) とハインリヒ・マイエル (Heinrich MAYR, 雇用期間1888/M21年1月12日-1891/M24年2月28日) で、林学初の外国人教師の登場である。

かねてからの中村彌六の招請案を、農商務次官岩村道俊が尽力し実現したとされる [村田談]⁴⁵⁾。岩村道俊 (1840-1915) は、高知宿毛藩の出身、戊辰戦争で官軍軍監、佐賀の乱、萩の乱、西南戦争の現地処理に手腕を發揮、北海道庁初代長官を経て1887/M20年に農商務次官、翌年に農商務大臣、のちには御料局長官を務め、林業との関係が深くなる。

マイエルは、前述のように中村とはミュンヘン大学の同窓であった。1878/M11年同大学を卒業後、営林の実務に就く。1882/M15年母校に戻り、ハルチッヒ教授の助手として研究に従事する。樹脂およびカンバ寄生菌の研究で学位を取得、同大学の講師（Privatdozent）となる。このころ、ハルチッヒ教授の外国樹種造林試験と関連して世界各地の森林樹木の研究が計画される。この計画にしたがいマイエルは、1885/M18年に北アメリカ北部、カナダを訪れる。ついで日本に来て、同年「大日本植物帯調査報告」を発表した田中 壤の案内で、本州、北海道、九州の森林を視察する。マイエルは日本の森林は荒廃がひどく、すべて官有にして緑化すべきであると主張する。これに対して田中は、荒廃は交通の便利な場所のみと反論している^{32, 61}。その後マイエルは、インドネシア、インド方面を調査して、1887/M20年秋ミュンヘンに帰着する。ほどなく東京農林学校からの招請があり、イギリス、北アメリカ南部の視察を経て、翌年早々の再来日となる¹³。

1888/M21年1月12日マイエル来着、1月19日に「松野教授造林法講義ヲ廢シ ドクトル マイエル氏 造林法及森林植物学 各3時間講義セシム」との掲示が出る²。以後1891/M24年2月までの3年間にわたり講義が行なわれるが、故国で修めた広い教養と林学の知識、および世界各地の森林踏査で得た知見にもとづく優れた内容であった。聴講したのは主として、1890/M23年7月卒業の本多静六、川瀬善太郎らのクラス、1892/M25年7月卒業の佐藤銀五郎、八戸通雄らのクラス、および1894/M27年7月卒業の右田半四郎、白澤保美らのクラスと思われる。本多は後年、わが国における造林学の発展を回顧し、日本固有の造林学の基礎はマイエルにより築かれ、「本多造林学」は当時の講義筆記を受け継ぎ、広げたに過ぎないと述べている¹¹。なお1888/M21年、林学予科に入学した新島善直は、「植物学」の講義を1年間英語で受けた。マイエルは長身、頭髪を梳らず粗髭を蓄えた風貌から、学生たちは「青鬼」と綽名を付ける。実際は親切で温良で研究的な先生であったと、新島は述べている³⁴。

マイエルは、休暇を利用して本州中部、東北、北海道、千島、四国などの森林をさらに踏査し、また中村の斡旋で山林局に兼務する〔磯山廣居談〕⁴⁷。こうした機会に得た見聞は、講義の内容を充実し、また著書「日本産モミ科植物考 (Monographie der Abietineen des japanischen Reiches, 1890)」, 「日本の森林 (Aus den Waldungen Japans, 1891)」などをまとめるのに役立ったと思われる。

マイエルは着任して間もない1888/M21年2月、大日本山林会第5回大集会で「森林経済法撰定一班」の表題で、造林樹種、造林法につきドイツ語で講演、藤井善衍が通訳をした〔山林73〕。しかし、翌年2月の第6回大集会で講演「造林法と材質の関係」は、片言ながら日本語であった〔山林85〕。ときに応じてドイツ語、英語、日本語を使い分けた。

マイエルの任期は、東京農林学校が農科大学となった翌年の1891/M24年2月末で終わる。2月27日には別れの演説を駒場構内第二寄宿舎講堂で行ない、学生らに感銘を与える⁴⁴。新島善直は演説のなかの「森林家は森林を愛するものでなければならぬ。森林家は視察力を鋭敏にせねば

ならぬ。日本の森林は常に林学のみでなく、万有学、普通学に重きを置いて、林木と土地気候との関係を明らかにせねばならぬ。」との教えを、ことあるごとに思い出したという³⁴⁾。3月15日、マイエルは横浜から乗船帰国するが、中村彌六夫妻と佐藤鋳五郎らのクラス有志学生7名が、新橋から同道、別れを惜しんだ〔佐藤ら談〕⁴⁵⁾。

マイエルは数年後、高齢で引退したガイエルのあとを継いでミュンヘン大学教授に就任する。造林学、木材識別論、外国林木論などを講じ、日本人を含め多くの留学生が教えを受けた。なお、1903/M36年5月には、バイエルン国親王の随員として3度目の来日を果たし、大日本山林会の小集会（通常会）で講演をしている〔山林247〕。

もうひとりの外国人教師グラスマンは、1887/M20年11月に来日、1895/M28年7月まで8年間近くも教壇に立った。ミュンヘン大学出身で、彼もまた中村と同窓である。営林実務の経験豊富で、林学の諸科目を担当した。すなわち必要に応じ、森林歴史、森林管理、森林法律、造林学、森林保護学、森林道路、森林利用学などを講義し、日本人教官による教育陣が整うまでの空白を補った。

グラスマンも来日して間もない1888/M21年2月の大日本山林会大集会で、二日間にわたり講演を行なった。「獨乙森林經濟沿革論」および「獨乙森林設制沿革」で、多くの質問があり、藤井善衍と中村彌六が通訳を務めた〔山林73〕。その後も、山林会の大集会や、農科大学の林学会集会で口頭発表をしている。

1889/M22年の夏期休暇にグラスマンは、松野の案内で木曾方面を視察、一部区間を教授に兼任して間もない和田國次郎も同行した。木曾福島の投宿先で木曾節を聴いた松野は「木曾の名木ヒノキにサハラ、ネズヤアスヒにカウヤマキ」と即席の民謡を作って唄い、粹人ぶりを發揮する。この謡は以来、唄い継がれている。御嶽山で寄生植物につきグラスマンと論争した和田は、その強情さに嫌気がさし、以後、別行動をとる。松野らは、水害による通行止めと、外人同行による意外な出費で旅費が尽き、静岡の旅館で足止めになる。同行の学生河合銆太郎が金策に帰京、事情を聴いたグラスマン夫人は、大声を上げて泣いたという⁶⁹⁾。

1895/M28年6月29日、グラスマンの送別会が芝紅葉館で開かれ、濱尾総長、松井学長、松野磯、中村彌六、卒業生、在学生ら50余名が参加した。グラスマンは別れの挨拶で「林業の成果を得るには長年月が必要で、目前の利益を追う者に林学を学ぶ資格はない」と強調する〔山林151〕。ドイツに帰国後は、ふたたび営林の実務につき営林署長、のち定年まで森林監督官を務めたという⁵⁷⁾〔山林479〕。

外国人教師の人事記録は、大学に残されていない。マイエルに関しては多くの人が語っている。いっぽうグラスマンについては、滞留期間が長かったわりには話題に乏しい。

中村彌六の転出

1889/M22年2月、中村彌六は教授を辞任、林務官として山林局に勤務する。山林学校、農林

学校での中村の実績は目覚ましく、さらなる活動が期待されていた²⁴⁾。しかし前述のように、教育面に関わったのは彼の本意ではなく、行政面で活躍したいとの初志を持ち続けていたのである。さいわいにマイエルとグラスマンによる授業が軌道に乗り、前年末には志賀泰山がドイツ留学から帰国した。辞めても大きな支障は生じないとの判断があったと思われる。

中村には、大蔵省御用掛あるいは官林官有地取調委員会委員として、御料林創設の提案に始まり、編入地域の決定に関わるなど、すでに行政面での活動実績があった。当時、山林局では、新知識の理解力もないのに、年功序列で上に昇進した職員が幅を利かせ、農林学校出の新人は、厄介者と冷遇されていた。中村は、現場への転出を希望し、学校で育てた人材を引き連れ、合理的官林経営を實行したいと、提案するが容れられない。

こうした状況に対し志賀泰山は、信頼されている品川彌二郎に、中村を山林局長に就任させるよう懇請するが不調に終わる⁵²⁾。局内には中村の存在を煙たく思う勢力があり、ドイツ留学中の図書購入費使用につき、農商務大臣井上馨（1835-1915）へ讒訴する者があった。非難を受ける事由はなかったが、嫌気がさした中村は役人生活に見切りをつける。1890/M23年7月、第1回衆議院選挙に当選（長野県第六区）、同年9月に山林局を辞職、その後は政界で活躍することになる³³⁾。

1889/M22年11月、簡易科石川寅之丞ら20名が卒業する。簡易科は、のちに乙科、実科と改称するが、その最初の卒業生である。

農林学校出身教官と松野教授辞職勧告事件

東京農林学校時代から農科大学の発足当初にかけては、初期の卒業生が教官として、主として簡易科のちの乙科生徒の教育に当たった〔磯山談〕⁴⁷⁾。官林経営に必要な人材を早急に育成し、現地に派遣するためである。第1回（1886/M19年10月）卒業生から田町與三郎、中川柳次郎、磯山廣居、第3回（1888/M21年7月）卒業生から和田國次郎、柴田榮吉の計5名が教官として、数名ずつ数年間、学校に勤務した（表-6, 10）。教官への採用は、本人の希望、学業成績などによった。しかし江崎政忠のように、教官を希望したが果たせなかった例もみられる。山林局が、優秀な卒業生の全員を、学校に採られては困ると反対したという〔江崎談〕⁴⁷⁾。

最初に教官になったのは田町與三郎で1887/M20年12月のことである。和田國次郎が要請を受けて、山林局勤務から東京農林学校へ移ったのは1889/M22年5月であるが、先輩の田町よりも給与が高かった。やがて、待遇その他の問題から和田と先任教官らとの間に軋轢を生じる。ついには、多数の林学教官が結束して「和田を辞めさせなければ、自分達全員が辞める」と校長に申し入れる騒ぎになる。校長は二代目の高橋是清（1854-1936、財政家、政治家、のちに首相、蔵相）で、当時は特許局長と兼任であった。騒動は高橋の斡旋で一応収拾されるが、林学の管理責任者松野（1889/M22年4月5日 林科教務主任、同年12月18日 林学部部長）の力量が疑われることになる〔和田談〕⁴⁵⁾。

このことは後に、学生による「松野教授辞職勧告」事件へとつながる。この事件は性格上資料が少なく、詳細はわからない。多分、上記の和田に関わる騒動のあと、佐藤銀五郎らのクラスが中心になって勧告に至ったと思われる。経過は不明であるが、1890/M23年5月13日には、佐藤らのクラス全員が三代目校長前田正名（初代校長前田献吉の弟、農商務次官と兼任）から退学処分を受ける。当日の状況につき、佐藤は日記に以下のように記している「同級生一同二十八名 本日午前十一時半 校長室ニ招カレ校長前田正名氏 幹事片山延平氏 其他林学部教官及三部長列席ノ上 校長ハ同級生一同ニ向テ説諭シタル後 一人ヅツ別室ニ招キ 握手ノ礼ヲナシテ 退校辞令書ヲ附与シタリ」。しかし、同年6月11日付「復校辞令書」が全員に送付され、処分は解除される⁴²⁾。

翌6月12日に、東京農林学校は帝国大学農科大学となり、松野は非職を命じられる。この時点をもって、松野の学校における教育活動は終わったと考えられる。

学生たちが松野に辞職を迫った理由のひとつは、和田騒動への対応にも見られた管理能力の不足と思われる。このことは後年、和田が佐藤に対して「おそらく君等のクラスの退学問題は、僕が学校の教授に入ったのが、ひとつの原因と思う」と語っていることから推測される〔和田談⁴⁵⁾〕。ほかの理由としては資料を欠くが、講義内容など教育面に対する不満もあったと想像される。すでに述べたように中村彌六は、松野を「エーベルスワルドに於いて林学を学んだと称する人」と評したが、「豈それ然らむや、それ然り」調の講義は要領を得なかった。さらに、新たに開講したマイエルやグラスマンの講義と比較することで、不満は大きくなったと想像される。また、口頭を含め研究発表の少ないことも、批判される理由になったかも知れない。

川瀬善太郎、本多静六らのクラスでは、学力不十分な教官には難問を押しつけ、何人かを追放したという。そして、つぎの佐藤銀五郎らのクラスでは、松野を追出すことになる¹²⁾。こうした風潮は、つぎの白澤保美らのクラスにもあったという〔白澤談⁴⁶⁾〕。その後は学生数の激減で、少数の学生が一流の教官に囲まれ、懇切丁寧な授業を受ける時代に入る〔松本正巳談⁵⁸⁾〕。

東京農林学校の帝国大学への合併にともない、松野は農科大学教授の発令を受けるが、ほどなく非職となる。辞職勧告の影響であろう。

1890/M23年7月25日、川瀬善太郎ら18名が卒業する。すでに農科大学が発足していたが、林学部本（甲）科卒として、東京農林学校最後の卒業生となる。

帝国大学農科大学林学科

農科大学の発足

東京農林学校は農商務省の管轄であるが、文部省内には、帝国大学に合併して分科大学のひとつ、農科大学にしたいとの意見が以前からあった。文部大臣森 有禮（1847-89）も、学制統一の見地から賛成していた。とくに文部省専門学務局長の濱尾 新は、熱心な合併推進論者で、農

商務大臣との協議を進める [川瀬談]⁴⁵⁾。

しかし帝国大学評議会には、農学、林学、獣医学に対する学問的評価から、分科大学に加えることに反対する評議員が多かった。それらを抑え、濱尾は目的を達成する。すなわち、1890/M23年6月12日、東京農林学校を帝国大学に合併し、帝国大学農科大学が設置される。

同年9月10日、農科大学の規則が制定され、農学科第一部、同第二部（農芸化学）、林学科、獣医学科の構成となる。また簡易科（別科）は乙科と改称し、各学科の本科に対応する。表-9に林学科の学科課程をしめす。

表-9. 農科大学林学科課程 1890/M23年9月制定³⁶⁾

本科1年	森林数学、地質学及土壌学、気象学、森林植物学、森林動物学、森林測量法、森林植物学実験、森林動物学実験、実地演習、独逸語
2年	森林数学、森林物理学、森林土木学、造林学、森林設制学、森林副産物製造法、森林管理法、森林歴史、理財学、森林物理学実験、森林植物学実験、実地演習、独逸語
3年	財政学、森林設制学、森林利用学、森林法律学、森林統計学、林政学、森林保護論、実地演習、卒業論文
乙科1年	代数学、幾何学、三角術、物理学、化学、地質学、動物学、植物学、測量、図画、栽培実験
2年	物理学、土壌学、測量、農学通論、測樹学、造林学、森林利用学、森林設制学、林産物製造法、栽培実験、実地演習
3年	造林学、森林利用学、森林設制学、森林保護学、現行森林法規、測量、栽培実験、実地演習

なお、旧東京農林学校から農科大学へ移行する経過措置として、大学予科が設けられる。農林学校予科生は大学予科に移り、予科在学年数が通算4年間に達したのち、大学本科に進むと定められる。従来の子科の修業年限3年間に1年間延長したのは、高等中学校の修業年限との釣合いをとるためである。農林学校本科1年修了生は、ただちに大学本科に進み、在学2年間で卒業となる。

高橋琢也の反対意見と私立有餘學館

これよりさき高橋琢也は、林学を農科大学の一部にすることに疑問を感じ、意見書を森文部大臣に提出している⁵⁹⁾。前述のように高橋は、武井守正局長を補佐、ドイツの制度を参考に官林の官制を作成した人物である。しかし、官制は実状に合わず、責任を問われて辞職、翌年、東京農林学校教授の肩書きで復職した。

高橋の意見の要点は以下のとおりである。(1)林学は特殊な学問なので、農科大学から分離独立して高等森林学校とする。(2)学校の位置は、都会に設置して失敗したドイツの例があるので、東北地方と九州地方の森林地帯に、各1校とする。やむなく森林地帯でないばあいには、近くに演習林を設ける。(3)学校の目的は官林の管理経営者の養成が主なので、農商務省所管が適当で

あるが、文部省所管のばあいは山林局との連絡を密にする。

この意見書提出の時期は、たぶん高橋が復職した1888/M21年秋と思われる。森文相は、翌年2月11日、帝国憲法発布の日国粋主義者によって暗殺される。高橋の意見書は文部省で引継がれ、1894/M27年、井上 毅（1843-95）文部大臣から林学専門学校の設置場所につき質問を受けている。また高橋は、意見書に演習林の必要性をあげたことが、のちに千葉演習林の設置を容易にしたのではないかと述べている⁵⁹⁾。

1889/M22年6月、高橋は青森大林区署長に任ぜられ、山林局に居た東京農林学校卒の新人、有田正盛、江崎政忠、道家充之、内藤確介、森脇勝三、篠澤半五郎、山根龜吉らをともなって転出する。学校出の林業技術者を官林経営の現場に投入し、その活躍を意図したもので、中村彌六の考えに近い。

また、地元青森に「私立有餘學館」を開校して林業技術者の養成を図る。修業年限は2年間で、講師は道家充之らである。1894/M27年4月、第一回として10名ほどが卒業するが、講師陣の転出が相次ぎ、ほどなく閉校する。卒業生のひとり松野義次は、その後1900/M33年に林学実科を卒業する²³⁾。

なお高橋は、山林局の会議で志賀泰山と激論を交わすことが多かった⁵⁰⁾。また、のちには山林局長として、国会における森林法案の審議で、中村彌六と対決することになる⁶²⁾。

志賀泰山の教授就任と経歴（帝国大学農科大学教授に着任まで）

農科大学の開校とともに、東京大林区署長志賀泰山が、兼務のまま教授として林学科に迎えられ、以後十年間にわたり教育体制づくりに励むことになる。ここで、志賀の生立ちからの経歴を記述する^{18, 52)}（附表-2）。

志賀泰山は伊予宇和島藩の侍医、志賀天民の次男として、1854/安政元年8月、愛媛県宇和島市で生まれる。幼少から学問好きで神童と噂され、8歳のときに藩主から蘭学の修行を命じられ、二人扶持を受ける。

1871/M4年、大学南校に入学しドイツ語を修める。翌年、大学南校監事（文部12等出仕）に濱尾 新が就任、血気盛んな生徒達の良き相談相手となる。兄の志賀雷山（慶応義塾で英語を修め、農学関係英書を翻訳、のち静岡県立掛川中学校長、東京農林学校嘱託）が濱尾に英語を教えた関係もあり、このときから志賀泰山と濱尾の縁が始まる。また級友に中村彌六が居り、終生交際が続く。

前述のように、大学南校は数次の改称を経て1874/M7年に東京開成学校となる。志賀は独逸（鉦山）学部在籍していたが、1875/M8年7月に同部は廃止される。このあと退校したのか、化学部（鉦山学部を改称）へ進んだのかは明らかでない。

1877/M10年大阪師範学校、1878/M11年滋賀県大津師範学校に、理化学教師として務める。1882/M15年東京師範学校に移るが、この間、「物理階梯」、「化学最新」、「小學理學問答」、「小學

物理学」などの翻訳書を執筆している。

1883/M16年、中村彌六の誘いで東京山林学校助教となり、物理学、気象学を担当する。翌年には東京大学予備門、東京大学医学部でも、本務または兼務として教育にあたる。ドイツ語が達者であったので、ドイツの林学書を読んで森林管理の本を書き、また欧州の林業を視察した武井山林局長の復命書をまとめる。これらが縁になって、林学研究のためドイツへ留学するよう、農商務省から内命を受ける。

しかし志賀は、それまで物理学の研究を続けており、まったく専門の違う林学へ移ることは、迷いがあった。これに対して農商務次官品川彌二郎から、物理学者は北尾次郎をはじめ、山川健次郎、寺尾 壽、中村精男、菊地大麓、古市公威、田中館愛橘ら多数居るが、林学者は中村彌六だけなので、林学に転じることが国家のためになると説得される。そこで濱尾 新に相談したところ、日本の国情から林学を修めることが国益にかなうと、品川と同意見であった。

林学への転向を決心した志賀は、武井の復命書の作成で得た知識によって留学先をドイツ、ドレスデン近郊、ターラント（Tharandt）所在のザクセン王国高等森林学校に決める。1885/M18年9月、同地へ向け出発、校長ユーダイヒ（Johan Friedrich JUDEICH）のもとで林学を学ぶ。

ほぼ半年後、品川彌二郎がドイツ公使としてベルリンに赴任してくる。さっそく志賀は、ドイツの森林や土地利用の状況などを説明に訪問し、品川の関心を高める。1886/M19年秋、品川はターラントの高等森林学校を視察、ザクセンの王室を訪問する。その後も機会をみて志賀は、エーベルスワルドや、オーストリアの貴族所有林など、集約経営の森林を案内する。品川は公使を2年間ほど務めて帰国するが、以後、日本林業振興の熱心な推進者となる。

1886/M19年、文部省専門学務局長濱尾 新は、教育制度調査のため、欧州各国を巡る。同年6月、志賀はベルリンに来た濱尾を訪ね、ターラントの視察を勧める。同月30日の早朝から濱尾は、ユーダイヒ校長の懇切な案内で、校舎、附属森林植物園、隣接の研究・教育用国有林などを見聞する。この視察により濱尾は、林学教育の重要性と教育体制充実の必要性を認識する。

志賀が留学先で品川と濱尾を案内し、林業・林学の重要性につき啓蒙したことは、その後の彼の活動を援ける。すなわち、林業行政上の重要事項は品川彌二郎の、林学教育上の重要事項は濱尾 新の、援助を受けて解決することになる⁵²⁾。

1888/M21年8月に全学科を終了、11月末に帰国、12月、農商務省勤務になる。志賀は、自身の性格が行政方面に向かないと考えていた。そこで前述のように品川彌二郎に、山林局長候補として中村彌六を推薦するが、品川は中村を信用せず実現できなかった。翌1889/M22年9月、東京大林区署が設置されて初代署長に就任、施業案編成のための予備作業を進める。

なお、志賀とともにターラントの高等森林学校に留学した松本 収は、1889/M22年3月まで在学¹⁵⁾、帰国後、東京大林区署長、御料林名古屋支局長を務めた。

林学科の教育体制

1890/M23年9月、志賀は大林区署長と兼務で農科大学教授になる。松野 磧は林学科教授の籍にあったが、12月には非職になり、教育に関わる機会は無かったと思われる。したがって林学の専門教育は、ただ一人の教授の志賀と、二人の外人教師マイエルとグラスマンに委ねられ、助教授の田町與三郎、中川鉦次郎、和田國次郎らが補佐した（表-10）。

表-10. (東京) 帝国大学農科大学職員録 (林学関係)²⁴⁾

(東京) 帝国大学総長：1890-93/M23-26 加藤弘之, 1893-97/M26-30 濱尾 新, 1897-98/M30-31
外山正一, 1898-1901/M31-34 菊池大麓
農科大学学長：1890-1911/M23-44 松井直吉

身分 (期間)	氏名	担当科目 (その他)
教授 (非職, 1890-93/M23-26)	松野 磧	造林, 保護, 利用
教授 (1890-1907/M23-40)	北尾 次郎	物理, 気象, 森林物理
教授 (1890-93/M23-26) 講師 (M26-33)	志賀 泰山	設制, 森林数学 (林学第一講座担任)
助教授 (1890/M23) 教授 (M24-T10)	佐々木忠次郎	森林動物
助教授 (1890-96/M23-29) 教授 (M29-31)	松崎 藏之助	経済
助教授 (1890-1907/M23-40)	白井 光太郎	森林植物, 樹病
講師 (1890/M23) 助教授 (M24-42)	池野 成一郎	植物生理
傭外国人教師 (1890-95/M23-28)	オイスタフ・グラスマン	林学諸科
傭外国人教師 (1890-91/M23-24)	ハインリッヒ・マイエル	造林, 森林植物
助教授 (1890-91/M23-24)	和田 國次郎	設制, 森林数学
助教授 (1890-91/M23-24)	中川 鉦次郎	林学諸科
助教授 (1890-92/M23-25)	西 松二郎	地質, 土壤
助教授 (1890-92/M23-25)	田町 與三郎	測量, 製図など
助教授 (1890-93/M23-26) 講師 (M26-)	多々良 恕平	数学, 物理
助教授 (1890-1902/M23-35)	守屋 物四郎	森林化学, 林産製造
講師 (1891-93/M24-26)	松村 任三	植物, 森林植物 (理科大学教授)
助教授 (1891-94/M24-27)	磯山 廣居	林学諸科
助教授 (1891-95/M24-28)	柴田 榮吉	設制, 森林数学
講師 (1891-93/M24-26)	大森 俊次	測量, 数学
講師 (1891-93/M24-26)	松本 慶次郎	法学通論
講師 (1891-92/M24-25)	澤田 吾一	数学, 物理
助教授 (1892-00/M25-33) 教授 (M33-S2)	本多 静六	造林, 保護 (林学第二講座担任)
講師 (1892-97/M25-30)	井上 辰九郎	経済, 財政
講師 (1893-97/M26-30) 助教授 (M30-T6)	脇水 鐵五郎	地質, 土壤
助教授 (1894-1903/M27-36)	河合 鍾太郎	利用, 森林工学
教授 (1895-1924/M28-T13)	川瀬 善太郎	林政, 管理, 森林法律 (林学第三講座担任)
助教授 (1895-1907/M28-40)	右田 半四郎	經理, 林価算法, 較利
講師 (1897-99/M30-32) 助教授 (M32-44)	三村 鐘三郎	森林化学, 林産製造
講師 (1897-99/M30-32)	白澤 保美	保護
教授 (1898-1919/M31-T8)	和田垣 謙三	経済
助教授 (1899-1912/M32-45)	諸戸 北郎	理水, 砂防, 測量, 利用, 林道
講師 (1899-1901/M32-34)	堀田 正逸	保護, 測樹, 林価算法, 較利

志賀泰山講師辞任の1900/M33年までの発令を記載

1891/M24年3月、マイエルが帰国すると、さらに教育陣は手薄になる。同年7月、佐藤銀五郎ら26名が卒業する。東京山林学校を経た最後のクラスで、東京農林学校では松野教授退職勧告問題で、全員が退学処分を受けたクラスでもある。同年9月には、助教授の中川と和田が辞任し、替わって磯山廣居と柴田榮吉が着任する。

大学予科に1年間在学したのちに、1891/M24年秋、大学本科に進んだ右田半四郎らのクラス(1887/20年9月東京農林学校予科入学)は、志賀から森林数学(測樹学、林価算法、森林較利学)と森林設制学(のちの森林経理学)の、グラスマンから造林学、森林保護学、森林利用学、森林道路、森林法律、森林管理、森林歴史の講義を受ける。グラスマンの講義はドイツ語で行なわれたが、前年まで付けられた通訳が廃止されたため、十分に理解できなかった[右田談]⁴⁶⁾。

教育体制の整備

志賀は将来の林学科の教育体制として、森林国の日本は外人に頼らず、日本人の教官で構成された教育陣によるべきであると考え。さしあたり、森林設制学と森林数学の分野は志賀自身が、造林学の分野はドイツに留学中の本多静六が受持つとして、林政学の分野の担当者が居ないことが問題であった。

そこで志賀は、東京農林学校卒業生の中から優れた人材を選んで早急にドイツに留学させ、林政学の専門家を仕立てたいと考える。文部省専門学務局長濱尾 新の賛意を得たうえで、候補者として山林局勤務の川瀬善太郎を選び、その留学を大学評議会に諮る。評議会では、川瀬の所属が文部省ではなく農商務省であることが問題になり、農科大学長松井直吉をはじめとして、理科大学長菊池大麓らが強硬に反対する。しかし濱尾は、特例として了承を採りつけ、長岡半太郎(1865-1950、物理学専攻、のち大阪帝国大学初代総長)の留学予定を1年間遅らせて、1892/M25年3月からの川瀬の留学を実現させる。志賀は以前から松井学長と意見が合わなかったが、学長の頭越しに濱尾に依頼したことで、さらに両者の確執は深まる⁵²⁾。

1892/M25年5月、ミュンヘン大学で国家経済学の学位を受けた本多静六が帰国する。山林局に就職の予定であったが、志賀の計らいで同年6月農科大学助教授となる[本多談]⁵⁸⁾。本多は造林学を専門とするが、川瀬が帰国するまでは林政学の講義も行なうことになる。前年にグラスマンからドイツ語で、造林学講義を聞いた右田らは、内容を理解できなかったため、本多に頼んで造林学の補修講義を受ける[右田談]⁴⁶⁾。

同年9月、各学科で課程の改正があった(表-11)。林学本科では、農学大意、養魚論、林産製造学実験の増設、森林物理学実験、森林統計学の廃止などがあるが、その他は、科目名の変更(森林土木学→森林道路など)、学年間の入替え、時間数の変更である。林学乙科では、気象学、森林数学、林政学の増設、栽培実験の廃止があり、実地演習から測量実習、造林実習などが分離する。いずれも2年間の実施結果にもとづく、手直しと思われる。

表-11. 農科大学林学科課程 1892/M25年9月改正³⁶⁾

本科1年	気象学, 地質学及土壌学, 森林数学, 森林植物学, 森林動物学, 森林測量, 森林植物学実験, 森林動物学実験, 実地演習, 独逸語
2年	森林数学, 造林学, 森林物理学, 林産製造学, 森林道路, 森林利用学, 森林歴史, 森林保護論, 森林設制学, 理財学, 農学大意, 森林植物学実験, 森林動物学実験, 林産製造学実験, 実地演習, 独逸語
3年	森林管理法, 森林利用学, 森林設制学, 林政学, 森林法律学, 財政学, 養魚論, 実地演習, 卒業論文
乙科1年	代数学, 幾何学, 三角術, 物理学, 気象学, 化学, 動物学, 植物学, 鉱物学及地質学, 測量, 図画
2年	土壌学, 農学大意, 森林数学, 造林学, 林産製造学, 森林利用学, 森林設制学, 測量, 測量実習, 林産製造学実習, 実地演習
3年	造林学, 森林利用学, 森林設制学, 森林保護学, 林政学, 現行法規, 造林実習, 実地演習

なお翌1893/M26年9月には、本科の独逸語が廃止される。理由として、ドイツ語原書、外人教師への依存度の低下や、入学生の語学力の向上などが考えられる。このとき、農学本科でも独逸語が廃止されている。

この年9月8日、勅令93号により講座制度が確立する。翌9日、志賀泰山は農科大学教授を免じられ、同22日、講師の囑託を受ける。兼任教授のままでは、講座担任が認められなかったためであろうか。林学科は、林学第一講座（森林設制学→森林経理学関係、志賀講師担任）、同第二講座（造林学関係、本多助教担任）、同第三講座（林政学関係、1895/M28年まで担任欠）の3講座構成となる。

同年11月、松野 礪教授（非職）が林務官として転出する。

1895/M28年7月に川瀬善太郎がドイツ留学から帰国、同年8月に教授に就任し林学第三講座を担当する。これで志賀の考えた林学科の教育体制が一応整ったことになる。

この年3月には、助教授柴田榮吉が辞任している。東京農林学校卒業後、主として簡易科→乙科の教育を担当した教官5名の最後の一人である。また7月には、東京農林学校以来8年間近くも教壇にあったグラスマンが辞任する。

同年9月、学科課程が改正される（表-12）。1892/M25年の学科課程と比べ、本科で増設されたのは、最小二乗法及力学、植物生理学、林学通論、経済学、樹病学、法学通論、狩猟術などである。森林設制学が森林経理学に改称されたのが注目される。造林学の講義、実習の各学年への拡張は本多の、狩猟術の新設は川瀬の意向であろう。従来「実地演習」として一括されてきた林学関係の実習のうち、森林測量実習、造林学実習、森林道路実習が分離されるのは、このときからである。乙科についても似たような改正が行なわれた。

表-12. 農科大学林学科課程 1895/M28年9月改正³⁶⁾

本科1年	森林数学, 地質学及土壌学, 気象学, 森林物理学, 最小二乗法及力学, 森林植物学, 植物生理学, 森林動物学, 林学通論, 森林測量, 造林学, 経済学, 植物学実験, 動物学実験, 森林測量実習, 造林学実習, 実地演習
2年	森林数学, 樹病学, 森林化学, 森林利用学, 森林道路, 造林学, 森林保護学, 森林經理学, 森林管理, 法学通論, 森林法律学, 林政学, 財政学, 養魚論(随意), 農学大意(随意), 森林化学実験, 造林学実習, 森林道路実習
3年	森林利用学, 造林学, 森林經理学, 森林法律学, 林政学, 狩猟術(随意), 実地演習, 卒業論文
乙科1年	代数学, 幾何学, 三角術, 物理学, 気象学, 化学, 動物学, 植物学, 地質学及土壌学, 図画, 林学通論, 森林測量, 造林学, 森林測量実習, 造林学実習, 実地演習
2年	森林数学, 森林測量, 森林利用学, 林産製造学, 造林学, 森林保護学, 森林經理学, 林政学, 森林法律, 経済学及財政学, 農学大意, 森林測量実習, 林産製造学実習, 造林学実習, 実地演習
3年	森林利用学, 造林学, 森林經理学, 経済学及財政学, 林政学, 狩猟術, 造林学実習, 森林經理学実習, 実地演習

山林学校以来, 学科課程は数年おきに改正されたが, 1895/M28年改正の林学本科の課程は, その後1908/M41年まで大きな変更なく推移する。多くの試行錯誤を経て, ようやく林学教育の体系, 内容や範囲が明らかになってきたと考えられる。

演習林の設置

東京山林学校, 東京農林学校時代の学外での実地演習は, 主に官林で行なわれたが, 種々の不便があった。そこで実習をはじめ, 長期的な試験研究にも自由に利用できる演習林を設けたいとの希望が, 学校の創設時からあったが, 実現に向けての運動にはいたらなかった⁹⁾ [和田談]⁴⁵⁾。

農科大学の発足後も実地演習には, 官林が使用される(表-13)。志賀は, 水戸方面などの官林で測樹その他の実習を行い, 夜遅くまで内業を監督した⁷⁰⁾。しかし, 別の官庁が管理する森林の利用を続けることには不安があり, 演習林設立の要望が強くなる²⁴⁾。

1892/M25年12月, 本多は学生指導の旅行で房総方面を巡り, 木更津から鹿野山, 奥山官林を経て清澄にいたる。旅行には東京大林区署林務官補の八戸通雄が同行したが, その目的は清澄産モミ, ツガの材鑑採取にあった。12月26日, 浅間山天然林で175年生のモミと313年生のツガを伐倒, 測樹には右田半四郎らの学生が協力した²⁵⁾。清澄で時間をかけて浅間山や周辺の多様な林相を詳しく見分した本多は, 東京に比較的近い, この地が演習林に好適と確信する。

本多の意見に賛成した志賀は, 1893/M26年早々, 演習林の創設に向け行動を開始する。自身は, 農商務省との折衝に当たるとともに, 同年3月, 総長に就任する濱尾 新に, 学内および文部省への働きかけを要請する。濱尾は, ターラントの高等森林学校を視察した経験から, 演習林の必要性を十分に認識していた⁵²⁾。

交渉は順調に進み, 年内には内定に達したと思われる。翌1894/M27年1月8日付発行の大学一覧に, 林学科実習用として「安房國長狭郡清澄村ニ二百七十二町歩餘ノ林地アリ」との記載が,

表-13. (東京) 帝国大学農科大学時代の学外実習

年/月	指導教官	学級	内容	場所
1891/M24/07		本科1年	測量	秩父三峰山
1891/M24/夏	西, 白井		地質, 植物	秩父, 三波川
1891/M24	志賀, 内山	本科3年 乙科2年	林業見学	木曾, 京都竹林 栃木
1892/M25/12	本多	本科2年	林業見学, 測樹	鹿野山, 清澄山
1893/M26?		乙科	測量, 設制	清澄官林
1894/M27/07	志賀, 本多	本科, 乙科	林業見学	青森, 秋田, 山形
1894/M27/12	志賀, 本多, 河合	本科, 乙科	現地見分など	清澄演習林*
1895/M28/04	本多	本科2, 乙科2年	造林	清澄演習林*
1895/M28/07	志賀, 本多, 河合, 脇水, 白井	本科, 乙科, 40名余	地質, 植物, 見学	富士, 天竜, 木曾
1896/M29/春	本多	本科2, 乙科2年	造林	清澄演習林*
1896/M29/11	河合	本科, 乙科	伐採作業見学	茨孤山
1896/M29/12	志賀, 右田	本2, 3, 乙科2年	林業見学, 測樹	水戸笠原官林
1897/M30/春	本多	本科2, 乙科2年	造林	清澄演習林*
1897/M30/07	本多	本科3年	林業見学	岩手, 秋田, 青森
1897/M30/07	右田	乙科3年	林業見学	岩手, 秋田
1897/M30/11	本多	本科, 乙科	林業見学	筑波山
1898/M31/春	本多	本科2, 乙科2年	造林	千葉演習林
1898/M31/07	川瀬	本科, 乙科	林業見学	木曾
1899/M32/春	本多	本科2, 乙科2年	造林	千葉演習林
1899/M32/夏	本多	本科, 乙科	林業見学	関西
1900/M33/春	本多	本科2, 実科2年	造林	千葉演習林
1900/M33/03	諸戸	本科2, 実科2年	道路, 測量	千葉演習林

志賀泰山講師辞任の1900/M33年4月までを記載(主に「山林」雑録による), *正式には清澄山林, 清澄演習林は通称

すでにある³⁸⁾。同年11月29日付「千葉縣長狹郡清澄文部省用地-實測面積參百參拾六町四反壹畝壹歩-農科大學林學實習用トシテ使用スヘシ」との文部大臣達により, 清澄山林(演習林)が正式に発足する。さっそく12月から翌年1月にかけて志賀, 本多らは学生, 生徒とともに清澄を訪れ, 念願の演習林を見分して回る。同年春からは本多が, 実習をかねた造林を開始する。

清澄演習林は面積333.6haで, 一施業区には狭すぎるため, 拡張が図られる。1897/M30年12月25日, 奥山官林など1,821.7haが編入され, 合計面積2,155.3haと現在の千葉演習林の規模に近づく。実習だけでなく, 経営を含めた各種の試験研究が可能となる。濱尾は拡張にも尽力し, 同年清澄に実地見分に訪れ, 非常に満足したという⁵²⁾。

この年6月には京都帝国大学が創設され, 帝国大学は東京帝国大学と改称する。

翌1898/M31年7月, 東京帝国大学官制に演習林の條項が追加される。演習林が大学の一組織となり, 演習林長に川瀬善太郎が就任する。以来整備が進み, 造林以外の実習にも, 千葉演習林が利用されるようになる。

卒業生の処遇改善

前述のように初期の農林学校卒業生は、山林局で厄介者扱いにされていた。1889/M22年2月に山林局へ移った中村彌六は、この状況を打開しようとするが果たせない。同年6月、高橋琢也は多数の卒業生を連れて青森大林区署へ転出、彼らの知識を官林経営の現場に生かそうと試みる。同年9月、志賀泰山も東京大林区署長として、卒業生の活用に努める。こうして林学出身者は技術官として、しだいに山林局で活躍の場を得るが、役人としての処遇は、この時期、まだ不透明な状況にあった。

明治政府は上級官吏の素養識見として法律を重視する方針を決め、1887/M20年7月「文官試験試験補および見習規則」を施行した。これにより林学を修めた技術官は、法科大学出身の行政官に使われる建前になり、山林局の課長や大林区署長には、容易に任命されないとの見通しになる。

卒業後の就職や処遇の状況は、在学生にとって重要な関心事である。新島善直は1888/M21年9月、東京農林学校林学予科に入学したが、林学士として山林局へ就職しても小林区署長（判任官）どまりで、高等官になれる見込みは少ないとの情報が流れる。将来への期待が外れて転校する学生が多く、20名以上の入学者のうち残ったのは11名であった³⁴⁾。

こうした林業技術官に、高等官へ昇進できる途を開いたのが、志賀泰山の才幹と努力で、陸奥宗光（1844-97）が農商務大臣の時代のことである⁶²⁾。陸奥は紀州藩の出身で、幕末には坂本龍馬の海援隊に加わり活躍、木戸孝允、伊藤博文らと交友関係があった。維新後は地租改正局長などを務めるが、西南戦争のさいの土佐立志社事件に連座、禁固5年の刑を受け投獄される。出獄後、伊藤博文の勧めもあってヨーロッパへ留学、帰国後外務省へ入り、1888/M21年アメリカ駐在公使となる。その後、農商務大臣を経て、第二次伊藤内閣で外務大臣を務め、1892/M25年の日英通商航海条約締結による治外法権の撤廃や、1895/M28年の下関条約による日清講和などに手腕を振るう。頭の切れが良く「カミソリ大臣」の異名があった。

1890/M23年5月、山県有朋（1838-1922）の懇請で陸奥宗光が農商務大臣になったとき、志賀は東京大林区署長であった。当時の大林区署と署長官舎は、西ヶ原の東京山林学校跡に所在し、陸奥の別邸に隣接していた。あるとき志賀は、農商務省に呼ばれ、大臣と応対するが、そのさいの率直で、さっぱりした態度が陸奥に好感を与える。これが縁となり、大臣別邸に招かれて歓談し、意気投合するまでになる。

当時、志賀らは山林局で、施業案編成計画の作成を終えたが、その実行には専門教育を修めた林学士が、各部署の責任者として指揮をとる必要があった。陸奥の知遇を得た志賀は、さっそく林業技術官登用の問題を話題にする。志賀は、軍艦を動かすのは海軍軍人で、素人の法学士にはできない。同様に林務のことは林学を修めた者が行なうべきであると主張する。陸奥は趣旨に賛同し、適任者の推薦を求めたので、有田正盛（東京農林学校第1回卒業、農商務属兼林務官補、山林局、東京大林区署兼務）を推す⁵²⁾。ほどなく陸奥は、志賀が不在中の大林区署を訪ね、有田

に面接，人物に満足する。

1890/M23年11月，有田は本省で大臣から農商務技師（高等官）広島大林区署長の辞令を受け³⁾。これを契機に，農林学校第1回卒業の杉原龜三郎，永田正吉，松井武節，第2回卒業の内藤確介，村田重治らが，山林局課長や大林区署長に，続々と登用される。こうして林業技術官体制の基礎が創られるとともに，農科大学林学科在学生の向学心をも高めた。

「文官試験試補および見習規則」は法科卒業生中心の官僚体制を意図したもので，伊藤博文の考えにもとづく。そうした流れに沿わない林業技術官体制の立ち上げは，実力者の陸奥宗光ゆえに可能であった。陸奥を動かした志賀について，手束は「政治家の懐に入って，その力を公けのために活用する才能に優れていた」と評している⁶²⁾。

林学科入学志望者の勧誘

農科大学の一学科として林学科の整備は年ごとに進んだが，本科の入学志望者は年に5名前後の状況が続く。原因は，世間一般が林学の存在や内容につき，知らないためと考えられた。志賀は濱尾 新に相談のうえ，1893/M26年ごろから各地の高等（中）学校を回って，林学について講演した。そのさい配布したパンフレット「本邦ノ森林及ビ林學」には，森林の効用や日本の森林・林業の状況のほか，国有林の管理に今後必要な林学科卒業生の人数などが，具体的に記載されている⁴⁹⁾。1901/M34年本科卒の松本正巳は，第二高等学校（旧制，仙台）在学中に級友の國司道輔と，志賀の講演を聞き，林学に一層の興味を感じて，ともに入学したという [松本談]⁵⁸⁾。

1897/M30年6月，農商務省および林区署の官制改正が行なわれ，多数の林務官を必要とする見込みになる。このため山林局では，農科大学林学科を農商務省の所管に移し，人材育成の効率化を図ってはとの意見が，一部に出たという。当時局長であった高橋琢也あたりの考えであろうか。しかし，学術進歩のためには，帝国大学に置くべきであるとの考えが大勢を占める。なお，1896/M29年7月までの林学本科卒業生累計は，農林学校時代を含め104名で，うち死亡8名，のこり96名の就職状況は，山林局および林区署59，北海道・台湾・県庁林務関係13，御料局7，帝大5，大学院3，民間9名である [山林174]。当時の農科大学林学科の主要な役割が，林務官の養成にあったことを示す。

志賀による勧誘活動や，林務官の需要増にもかかわらず，林学本科卒業生数は年間0～9名の状況が続く。毎年の卒業生数が10名を超え20名に近づくのは，1905/M38年以降のことである。

志賀泰山講師の辞任

1898/M31年5月に乙科が廃止され，実科が新設される。教育水準を高め，中堅技術者の養成を図ることを目標にした。

1899/M32年3月，文部省から中村彌六，志賀泰山，本多静六，川瀬善太郎，河合鍾太郎の5名へ，わが国で最初の林学博士号が授与される。

1900/M33年3月末，志賀は農商務省から欧州各国の林業視察を命じられる。同年4月，講師

辞任の手続きを終え、教育界を去る。志賀の出発を実習先の清澄で知った本科2年生の市島直治は「茫然自失、明鏡洪範に離るる心地」と実習指導の諸戸北郎助教授に訴えている¹⁴⁾。

志賀の辞任をもって林学教育事始めの時代は終わる。その後を引き継ぐのが本多静六、川瀬善太郎、河合鍾太郎、右田半四郎、諸戸北郎らである。彼らは、いずれも定年まで大学に在職、林学教育の向上に努める⁶⁶⁾。なお、林学教育機関全般の発展については、黎明期を含めて若干の文献がある^{17, 24, 41, 54など}。

松野 磧・中村彌六・志賀泰山

教育に関わった時期、期間、年齢

これまで松野 磧、中村彌六、志賀泰山の教育活動を、ほぼ時代順に記述した。この三人を白澤保美は「我等林学界初期の三元老」⁵⁷⁾と称したが、三人が林学の専門教育の教壇に立った期間は意外に短く、しかも比較的若い年代のことである。関係した時期、期間、年齢を列記すると、松野 磧が1882/M15年12月－1890/M23年6月、7年7ヵ月、35歳－43歳、中村彌六が1883/M16年10月－1889/M22年1月、5年4ヵ月、28歳－34歳、志賀泰山が1890/M23年9月－1900/M33年3月、9年7ヵ月、36歳－45歳、となる。

表-14に、これまでの記述に登場した主な人物の生年、出身地などをまとめる。三人が相手とした上司の多くも、同じく若い。たとえば、松野についてみると、樹木試験場設立に尽力した品川、山林学校設立に尽力した西郷とも、わずか4歳の年長である。松野を評価しなかった櫻井も、同じく4歳の年長に過ぎない。

教官が若いので、学生との年齢差は小さい。山林学校の入学資格は満18歳以上25歳以下であるが、開校時の学生の多くは1864/元治元年－1865/慶應元年生まれの18－19歳であった。松野とは17年ほどの年齢差があるが、中村とは10年ほどに過ぎない。村田重治（1861/文久元年生、1887/M20年卒）、川瀬善太郎（1862/文久2年生、1890/M23年卒）ら、年長の学生も居た。前述のように川瀬は、幹事の奥田と口論したが、年齢差は2歳に過ぎず、無理からぬと思われる。

このように、黎明期の林学教育に関わった人々は若かった。明治維新から間もない変革期、若い力が重用された時代の特徴である。

教育活動の総括とその後

三人ともドイツ語の修得が、ドイツで林学を学ぶ契機となる。得た知識をもとに帰国後、林学教育に関わるが、のちに教育界から離れる。その理由は三人三様であるが、中村、志賀と松野との間には大きな違いが在る。すなわち、前二者が、宿志を果たすべく転換したのに対して、後者は諸事情から、やむなく教育界を去ったように見える。

ここでは各人の教育活動の評価と、その後の活動につき述べる。なお松野については、多少くわしく触れる。

表-14. 主な登場人物の経歴など（生年順）

氏名	生年	出身地	学歴, 職歴など	没年
大久保利通	1830	鹿児島	明治維新の指導的政治家, 1871-73欧米視察, 内務卿	1878
杉浦 讓	1835	甲 府	外国奉行所幕臣, 渡欧, 維新後, 駒通権正, 地理局長	1877
岩村 道俊	1840	宿 毛	北海道長官, 農商務相, 御料局長, 宮中顧問官	1915
武井 守正	1842	姫 路	山林局長, 鳥取, 石川県知事, 貴族院議員	1926
西郷 従道	1843	鹿児島	1869渡欧(兵制研究), 農商務相, 海相	1902
櫻井 勉	1843	出 石	地理局長, 山林局長, 神社局長, 衆議院議員	1931
品川彌二郎	1843	萩	1870渡欧(農政研究), 山林局長, 農商務次官, 内相	1900
青木 周藏	1844	山 口	独留学, 駐独, 駐英公使, 外相, 枢密顧問官	1914
陸奥 宗光	1844	和歌山	1877下獄, 1883渡欧, 駐米公使, 農商務相, 外相	1897
緒方 道平	1846	岡 山	ウィーン博事務官, 地理局, 山林局, 福岡農工銀行頭取	1925
松野 礪	1847	美 弥	1870-75独留学, 山林学校長, 山・農林学校教授, 林務官	1908
森 有禮	1847	鹿児島	1865渡英, 1867渡米, 1870-73渡米(教育事情), 文相	1889
高橋 琢也	1847	広 島	山林局長, 貴族院議員, 東京医専創立者	1935
濱尾 新	1849	豊 岡	1873-74米留学, 1885渡欧, 東大総長, 文相, 貴族院議員	1925
北尾 次郎	1853	松 江	大学東校, 1870-83独留学(理学), 山・農林・東大教授, 理博	1907
松野クララ	1853	ベルリン	松野 礪夫人, 1876米日結婚, 幼稚園教育導入, 1913帰国	1931
ハインヒ・マイエル	1854	バイエルン	1878ミュンヘン大卒, 1888-91在日, ミュンヘン大教授	1911
中村 彌六	1854	高 遠	開成校, 1879-82独留学, 山・農林学校教授, 衆議院議員, 林博	1929
志賀 泰山	1854	宇和島	開成校, 1885-88独留学, 林務官, 東大教授, 林博	1934
杉浦 重剛	1855	膳 所	開成校, 英留学(化学), 教育家, 憂国警世の国士	1924
松井 直吉	1857	大 垣	大学南校, 1875-80米留学(鉱山学), 三高, 農科大学長, 理博	1911
奥田 義人	1860	鳥 取	1884法卒, 農商務次官, 文相, 法相, 東京市長, 法博	1917
村田 重治	1861	金 澤	1887林卒, 林務官(大林区署長, 山林局課長), 林博	1942
川瀬善太郎	1862	和歌山	1890林卒, 1892-95独留学, 東大教授, 演習林長, 林博	1932
道家 充之	1863	広 島	1887林卒, 林務官(大林区署長), 韓国林業顧問, 民間会社	?
有田 正盛	1864	都 城	1886林卒, 林務官, 台湾総督府技師, 野幌林試場長	?
江崎 政忠	1865	松 本	1886林卒, 林務官, 御料局技師, 鴻池銀行監事, 会社社長	?
河合鍾太郎	1865	名古屋	1890林卒, 1899-03独留学, 東大教授, 林博	1931
永田 正吉	1865	福 井	1886林卒, 林務官(大林区署長), 台湾総督府技師	?
本多 静六	1866	埼 玉	1890林卒, 1890-92独留学, 東大教授, 林博	1952
和田國次郎	1866	福 岡	1888林卒, 東大助教授, 林務官, 御料局技師, 林博	1941
八戸 道雄	1867	佐 賀	1892林卒, 林務官, 台湾総督府技師, 住友別子, 東大講師	?
佐藤銀五郎	1868	桑 名	1892林卒, 林務官(大林区署長, 局課長), 東大講師, 林博	1945
白澤 保美	1868	松 本	1894林卒, 林試場長, 東大講師, 貴族院議員, 林博	1947
右田半四郎	1869	熊 本	1894林卒, 1903-06独留学, 東大教授, 演習林長, 林博	1951
新島 善直	1871	東 京	1896林卒, 1905-08独留学, 北大教授, 林博	1943

村田重治以下は東京農林学校または帝国大学農科大学林学科卒業生

松野 礪:

功績の第一は、東京山林学校を開校したことにある。森林に対する理解が不十分な時代に、要路に林学教育の重要性を認めさせることは容易でなかった。交渉が苦手な性格なのに、開校を実現できたのは、強固な意志と粘り強い努力による。

功績の第二は、中村彌六を教授に招致し、教育活動の主角を譲ったことにある。中村は留学で得た知識を、山林局で行政面に生かしたいと強く希望するが、派閥の関係で叶えられない。松野の働きかけの詳細は明らかでないが、中村は一転して山林学校で活躍することになる。

開校翌年に中村が着任すると、山林学校の雰囲気は活発化する。中村は留学前に、教員が勤まるほどのドイツ語の能力を備え、西欧の基礎学の素養があり、ドイツの林学書も読んでいた。ゼロに近い状態で留学した松野との大きな差である。中村のドイツ林学についての学識は、広く深く新しく、その講義は学生を魅了する。それは松野の期待したところで、専門科目の多くを任せることになる。

いっぽう中村は、松野が担当する造林や保護の講義内容にまで不安を感じており、そのことは学生にも徐々に伝わったと思われる。山林学校時代の講義や実習につき、当時の学生達が半世紀後に回顧している⁴⁵⁾。松野については、開校翌春の植樹造林実習が話題になっているが、その後は中村に関わることが主になる。学生に感銘を与えた造林実習が、1回限りで継続されなかったのは不思議である。

和田國次郎は農林学校へ移行時の試験で上のクラスに編入され、一人だけ松野の造林の授業を受けていなかった。ある教授（中村？）から要領を得ない講義だから、ノートを借りて写せとめられる。いざ試験になると松野は、出題採点が面倒だから抽選で60~100点にすると宣言する。和田は、自分は勉強したのに抽選のために60点、知識がないのに100点を得た学生が居たと、当時の不満を語っている [和田談]⁴⁵⁾。

のちに、和田は農林学校教授に就任し、演習林を東京近郊に設置するよう進言するが、松野は乗り気にならなかった [和田談]⁴⁵⁾。松野は管理や交渉が苦手で、人と争うことを好まず、校長あるいは林学責任者としての職務の一部まで、中村に任せたように思われる。松野の教育活動への姿勢は、中村の登場とともに急速に消極的になったように感じられる。

しかし、中村が1889/M22年2月に農林学校を去ると、すべての責任が松野にふりかかる。同年5月、教授に着任した和田國次郎が起こした先任教官連との軋轢を、松野は収拾できず、やがて学生による「松野教授辞職勧告」事件の一因になる。翌1890/M23年5月13日、勧告を行なった佐藤銀五郎らのクラス全員が退学処分を受ける。しかし、東京農林学校の官制が廃止される同年6月11日に全員の復学が認められる。翌12日には農科大学が発足、松野は教授に任命されるが同年末には非職となる。農科大学教授の発令は、おそらく身分保障のためで、松野の主要な教育活動は東京農林学校とともに終わったと考えられる。

松野は非職のまま1893/M26年11月まで農科大学に在籍、俸給は従前どおりとされる。この時期の動静は、あまり明らかでない。1892/M25年7月、佐藤銀五郎らのクラスは卒業するが、松野は卒業写真に、松井直吉学長、中村彌六、志賀泰山、グラスマンらと写っている⁴⁸⁾。また学外で行なった林制に関する講演のさいに、1890/M23年12月に非職になったと自ら語っている²²⁾。

松野の処遇については、おそらく志賀が、濱尾 新や品川彌二郎の了解のもとに種々尽力したと想像される。1893/M26年11月、松野は林務官として東京大林区署へ転出、当時の署長は志賀である。翌1894/M27年4月に長野大林区署長となるが、前任の永田正吉は山林学校第1回入学の教え子である。1896/M29年2月には、志賀の後任として東京大林区署長に転任する。この時期、足尾の鉍毒地復旧事業が始まるが、松野は細事に干渉せず、教え子たちは学生気分、大いに仕事を進めたという〔奥田貞衛談〕⁴⁶⁾。

1897/M30年9月に山林局へ移る。1899/M32年、国有林野特別経営事業が始まり多数の技術員が必要になる。その養成のための林業講習が、1900/M33年から1904/M37年までの期間、林業講習所で毎年行われ、修了者は約380名に達した⁵⁶⁾。林業講習所は目黒試験苗圃(のちの林業試験所)に設置され、所長は松野であった〔山林224〕。

1901/M34年9月には、和歌山県で物産共進会、京摂区実業大会があり、松野は林産物審査官として参加、岩手大林区署、林野整理局技手宮崎精允(1889/M22年簡易科卒)が随行した。現地では審査委員長を選出をめぐり関係各局が争うが、松野は初めから譲る気であったので、宮崎は気楽に過ごせた。宴席では、西郷従道や板垣退助(1837-1919、政治家、立憲自由党総理、1900/M33年、政友会成立後引退)に「之は私が教へた學校出の者で、是等が追々山林のことをやって呉れるのです」と紹介、宮崎を感激させる。閉会后、宮崎は大阪で狂言芝居見物に誘うが、後々まで面白かったと松野から感謝される〔宮崎談〕⁴⁶⁾。

同年11月9日、松野の顕彰を目的とする「林學創始二十年紀念會」が上野精養軒で開かれる。林学士会(山林学校、農林学校本科、林学本科卒業生)と林友会(簡易科、乙科、実科卒業生)の合同主催で、銀製花瓶一対が記念品として贈られる。松野は「自分一人の力ではないのに心苦しい」と挨拶する〔山林233〕。

1905/M38年11月、松野は山林局林業試験所初代所長に就任、1908/M41年5月14日、満61歳で死去するまで務める。林業試験所の沿革は、1878/M11年、松野が学校設立の足場として西ヶ原に創設した樹木試験場に始まる。東京山林学校の発足とともに試験場は廃止され、試験事業は学校で扱われるようになる。1886/M19年、山林学校が廃止され、駒場に東京農林学校が設立されると、9.96町歩の学校跡地(山林局用地)には樹木試験地が残される。1890/M23年、農科大学が発足すると、試験事業は東京大林区署に委託される。同年、農事試験場の西ヶ原設置が決まり、試験地面積は2.23町歩に減少する。

1899/M32年、国有林野特別経営事業の開始とともに、林業試験事業の拡張も図られる。翌1900/M33年6月、林野整理局は荏原郡目黒村の民有地14.62町歩を購入して「目黒試験苗圃」と名づけ、西ヶ原で進行中の試験事業を継承し、樹木を移す。移転および移転後の試験には、山林局勤務で、のちに林業試験場長を長く務める白澤保美が関わる。同年10月林野整理局が廃止され、試験苗圃は山林局林業課所管となる。1905/M38年、試験苗圃は「山林局林業試験所」と改称、

林業課から分離，山林局の一課相当の存在になる⁵⁵⁾。

以上の経緯から，松野の最後の職が林業試験所長であったことに因縁を感じる。しかし，松野自身の感慨はわからない。松野は，自身の経歴を二度口述しているが，いずれも東京山林学校時代で終わっている^{9, 35)}。それ以降は，本意ではない余生とでも考えていたのか，ほとんど触れていない。

松野 磧の夫人は，留学時代に婚約したドイツ人Clara Louise ZITELMANN（1853年生）で，1876/M9年8月に来日，同年12月に結婚して松野クララ（久良々）となる。クララはドイツでフレーベル式幼児教育法を修得，ピアノ演奏も学んでいた。結婚の前後から東京女子師範学校（現在，お茶の水女子大）で，日本初の幼稚園での幼児教育に着手，ピアノ伴奏つきの唱歌なども導入する。のち宮内省の雅楽奏者にピアノを教え，またピアノ教師として，文部省体操伝習所や女子学習院に務める^{15, 20)}。なお体操伝習所には，志賀泰山も理化学教師として一時期，籍を置いている。当時の教育界の規模の狭さを感じさせる。

クララの対外的な活動，とくに幼稚園教育での先駆的な役割は評価されている。日本語の不自由なクララのために，松野が同行し，講演の通訳などを務めることもあった。今日，世間一般には，松野 磧よりもクララのほうが有名なようである。

松野夫妻の子は，結婚翌年に誕生の女子Frida Fumi（フリーダ 文）のみである。のち，フリーダはドイツ人貿易商Richard Nikolaus OHLYと結婚する。松野には，養子を迎えて家を継がせる意志は無く，以下のように述べている。「余には林學なる子がある。是が余の志を繼いで呉れるから，松野の家名は永久に絶えることはなからうと思へば，愉悦怡樂の極みである」³⁵⁾。晩年に，一生を省みての感慨である。

中村彌六：^{33, 40)}

功績の第一は，東京山林学校の充実にある。ドイツで得た最新の学識にもとづく林学の講義，学外実習の恒常化，一般科目教育陣の刷新などで，教育レベルの向上を図る。その結果，駒場農学校との実質的な合併に当り，対等を維持できたと考えられる。

功績の第二は，ドイツ人教師の招聘とドイツへの留学生派遣を，裏方として努力し，実現させたことにある。前者によって来日したマイエルとグラスマンは，東京農林学校から農科大学初期における林学教育に重要な役割を果たす。また後者によってドイツで林学を修めた志賀泰山は，農科大学林学科の教育体制の基礎を創る。

しかし，中村にとって教育界に身をおくことは，本来の意志ではない。行政面での活躍を夢見てドイツから帰国したが，派閥の関係で叶えられないでいた。1889/M22年2月，山林局へ移り初志を遂げようとするが，道は開けない。ついに官界での活躍をあきらめ，政界に転じる。

政界では衆議院議員として，明治年代末まで活躍する。1890/M23年の第1回から1908/M41年の第10回選挙まで連続して当選し，林政，砂防に関する衆議院の言論を主導する。同志の先頭に

立って一步も引かぬ構えの論陣を張り「背水將軍」と評された。背水は中村の号である。そのほか、旧来の商習慣打破を目的とする東京木材株式会社の設立、フィリッピン独立運動支援の布引丸事件への関与など、活動は多彩である。

中村は性格的に、命令に制約されて動く、教官や官僚には向いていない。自らの意志で自由に、ときには派手に行動できる政治家になったことで、その本領を發揮できたと言えよう。

大正年代に入り第一線を退くが、金銭には恬淡であったので、政治活動などによる負債が多く、たちまち債鬼に苦しめられることになる。負債のなかには前述の、私立農林学校予備校時代のものもあった。

中村と志賀の交友は生涯続く。同年生まれであったので、還暦（1914/T3年10月）[山林385]や古希（1923/T12年4月）³³⁾には、門下生が集い合同で祝った。

1929/S4年7月7日、門下生、知己が贈った国府津の隠宅で死去、満74歳であった。その数ヵ月後、長年にわたり家計を支えてきた幸子夫人も死去する。

志賀泰山：^{18, 50-52)}

功績は、松野 磧が創り中村彌六が発展させた、東京山林学校→東京農林学校を農科大学教授として引継ぎ、林学科の教育体制を確立したことにある。すなわち、ドイツで林学を修めた本多静六、川瀬善太郎を加えることで教育陣を充実し、千葉演習林の創設などにより教育施設の整備にも努める。林学解説のパンフレット持参で地方高校を回って入学希望者を募り、また卒業生の待遇を改善するなど、入学前、卒業後までを視野に入れて、優秀な人材の育成を図る。

農科大学には、教授として1893/M26年まで、その後は講師として1900/M33年まで務めるが、大半の期間の本務は林務官であった。林務官としては東京大林区署長を3回も務める。第一回は大林区署が創設された1889/M22年9月から1891/M24年3月に松本 収と交替、第二回は1892/M25年1月から1896/M29年2月に松野 磧と交替、第三回は1897/M30年9月から1900/M33年4月までである。それ以外の大半は山林局で課長を務める。

なお1896/M29年志賀は、松野との交替を機に林務官を辞任し、一時期、官界を離れる。同年2月25日、高橋琢也山林局長らによる送別の宴が、神田金清楼で開かれる。席上、川瀬善太郎は、志賀が教育活動に専念できること、および、松野が志賀の方針を継承することへの期待を述べている [山林159]。志賀は教育のかたわら、かねてから興味をもってきた木材防腐関係の実験を行なう¹⁸⁾。

しかし翌1897/M30年には、早くも東京大林区署長として復職し、松野と交替する。ときは、わが国の林野行政が揺籃期から国有林野特別経営時代へと移る時期である。志賀は、国有林経営の基礎三法といわれる「官有林野実況調査内規」、「官有林野境界踏査内規」および「国有林施業案編成心得及製図式」の立案、制定に努力する。

また実地にあつては、実績さえあがれば細かいことは眼中になかった [奥田談]⁴⁶⁾。負けず嫌

いで、1899/M32年に特別経営事業の無立木地造林が始まると、準備が整っていないのに部下を督励する。茨城県下で2千数百町歩の造林を強行するが、のちに立派に成林したという〔武井鈴男談〕⁴⁶⁾。

1900/M33年4月17日付、農科大学講師の辞任が認められ、志賀は教育界を去る。このころ農商務省の命で、林業視察に欧州へ向かう。出張先では一般林業のほかに、若いときから研究してきた木材の防腐、耐火処理につき調査する。翌1901/M34年帰国、山林局業務課長に就任する。そのかわり、鉄道枕木などの防腐処理をおこなう日本防腐木材株式会社の技術指導を行なう。1903/M36年、満49歳で退官する。かねてから五十歳までに、一切の官職を去ると決めていた人生計画の実行である。

その後は、木材の防腐、耐火処理の研究に専念し、多くの特許を取得する。また1907/M40年には、東洋木材防腐株式会社の設立に関わり、技師長として事業の発展を図る。東京開成学校で物理学を専攻した志賀にとって、防腐、耐火処理の研究は、無上の楽しみであった。高齢になっても、体調の良いときは、自邸内の実験室に籠もったという。1934/S9年2月5日死去、満79歳であった。

千葉演習林との関係

松野 礪：

松野は、東京農林学校時代に和田國次郎から演習林の設立を勧められるが、乗り気にならなかった〔和田談〕⁴⁵⁾。しかし後年、八戸道雄に述べた山林大学校構想には、伊豆天城山に演習林を設ける考えがあった⁹⁾。

八戸は1892/M25年、東京大林区署林務官補として千葉演習林創設の契機になった、本多静六の房総旅行に同行している²⁵⁾。松野は八戸から千葉（清澄）演習林の状況を聴いたと思われる。しかし松野が、千葉演習林を訪れたとの記録は見あたらない。

中村彌六：

中村は、官林を利用して熱心に学生の実習指導を行なった。しかし、学校所属の演習林の必要性について、どのように考えていたのかは定かでない。

志賀泰山：

志賀は、清澄周辺に演習林を設置したいとの本多静六の希望に応え、直ちに官林の移管交渉に動く。演習林の必要性を理解する濱尾 新総長の協力をえて、目的は短期間で達成される。

志賀は、初めから松井直吉学長と気心が合わなかった。川瀬善太郎の留学を濱尾の力を借りて強行したことで、両者の確執は深まる。千葉演習林の設置も、おおかたは学長の頭越しに決まり、これが「経費が無いから大きな山や原野をもらっても困る」という農科大学内の冷やかな空気、一因になったのかも知れない。

1897/M30年の千葉演習林拡張も、志賀が濱尾の協力のもと、同じ手法で進める。翌年、東京

帝国大学官制に、演習林の條項が追加される。農場に比べて20年以上も早い、組織としての出発である。志賀の努力によって、良くも悪くも、その後の演習林の方向が決まる。官制にもとづく演習林長には川瀬善太郎が就任、地方演習林の増設を続けることになる。

志賀は、1894/M27年12月から翌年1月にかけて、教官、学生、生徒とともに、発足直後の千葉演習林を見分した。また、拡張が確定した1897/M30年には、濱尾を案内した。

濱尾 新：

濱尾は、上記のように千葉演習林の創設、拡張に大きな役割を果たした。川瀬の要請で、明治年代末にも再拡張に努力するが、これは実現できなかった^{16, 37, 62)}。

濱尾は千葉演習林に、少なくとも2回、1897/M30年と1908/M41年に訪れている。1908/M41年の視察は5月17日から21日までで、天津に2泊、清澄に1泊、郷台に1泊を予定している³⁷⁾。「はじめに」で述べた「濱尾 新総長による植栽樹」は、このときの記念植樹と思われる。しかし、その所在は確認されておらず、樹種、植栽場所、成育状況、消失の事情などは、現在のところ不明である。

松野先生記念碑と松野記念林

松野先生記念碑と松野記念林は、千葉演習林の南端西側に位置する45林班の、天津から清澄にいたる県道沿いに所在する(図-1)。

1910/M43年の建立、設定で、百年に近い歴史がある。しかし、これらの記念物について記載した演習林の印刷物は、意外に少ない。千葉演習林(以後、適宜、千演と省略する)の古い時代の「概要」や「視察案内」に、「松野記念林」の文字が散見される程度である。

また建立、設定に関する内部資料も、ほとんど存在しない。当時は演習林本部の強い権限、具体的には川瀬演習林長の一存で、ほとんどの案件が処理された時代である。松野 礎の記念事業関係も例外ではなく、千演は演習林長の意向に従って、受入れ作業を進めただけと思われる。

記念事業の概要は、山林誌339号の広告によって、ほぼ把握できる。しかし、記念物の設定場所が千演になった理由や、千演のなかの現在

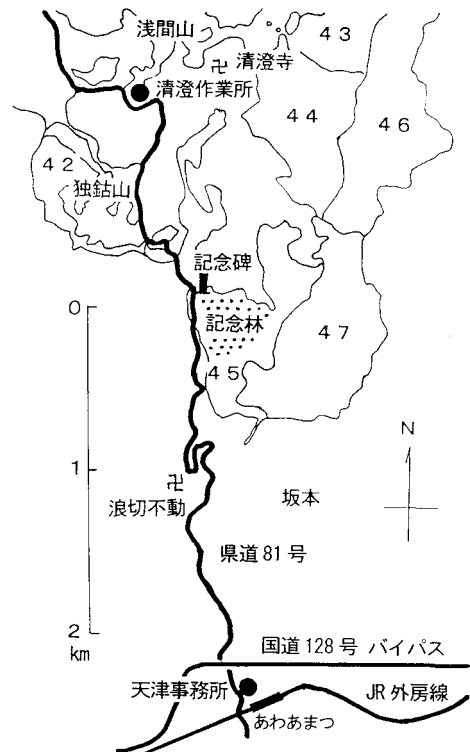


図-1. 松野先生記念碑、記念林の所在地

地が選ばれた経緯は明らかでない。また、記念林の設定経過には、明確でない部分がある。

以下に事業の全体を記述し、疑問点については想像を交えた説明を試みる。ついで、これまでの記念碑、記念林の扱いと見学者、視察者の来訪状況について述べ、今後の維持管理の参考とする。

記念事業の概要

1908/M41年5月14日に松野が死去、ほどなく功績記念事業の醸金が開始された。発起人総代の氏名と卒業年次を以下にあげる：江崎政忠（明治19年東京農林学校林学本科卒）、村田重治（明治20年同左卒）、松波秀實（明治21年同左卒）、石川寅之丞（明治22年東京農林学校林学簡易科卒）、川瀬善太郎（明治23年東京農林学校林学甲科卒）、白澤保美（明治27年帝国大学農科大学林学本科卒）。

翌1909/M42年7月までに2千余円が集まった。同月7日に発起人総会が開かれ、醸金の使い道などが検討される。その結果、大半を記念碑建立と記念林用の土地購入費用に当てること、場所は千葉演習林清澄管内とすることが決まる。ほかの提案の有無などは不明である。

1910/M43年9月、記念碑の建立および記念林の設定が終了する（附表－3）。

設置場所の選定

記念碑だけの建立ならば、松野と縁が深い西ヶ原の東京山林学校跡や、駒場の農科大学構内も考えられる。しかし、記念碑と記念林を同じ所に設置するには、ある広さが必要になる。しかも、比較的訪れやすい場所となると、候補地は限られてくる。

ほかの提案の有無は不明であるが、場所は清澄演習林（千葉演習林のうち、発足時の1894/M27年に移管された清澄地区の通称）に決まる。松野と直接の縁は無いが、ここは当時、後進の学徒が必ず実習に訪れる演習林であった。林学教育事始めの松野の顕彰に、ふさわしい場所として賛成多数であったと想像される。発起人総代のひとり川瀬善太郎は、演習林長として千演を積極的に主張したと思われる。

記念碑を清澄地区の何処に建立するかは、来演者に便利で、目立ちやすく、できれば記念林にも近いなどの条件があったと考えられる。記念碑は、「切通」の外国樹種見本林入口の小高い丘に建つが、この地は天津からの急な登り道がようやく終り、演習林の区域に入って間もない、千演の玄関口ともいえる場所である。そこにはすでに、林学本科学生三輪治三郎の追悼碑があった。三輪は1898/M31年の卒業を目前に病死、碑は1899/M32年に建てられた³⁷⁾。この場所は誰もが認める、交通に便利で目立つ場所のひとつである。

記念碑建立時の写真〔山林339〕によると、周囲の樹木が未だ若く、道路から記念碑が遠望できる。当時の「切通」には茶店があり（現在も民有の小面積跡地が残る）、天津からの来演者は、ときには休憩して、碑を訪れたと思われる。

記念林地の購入については、1909/M42年7月の発起人総会の決定を受けて、川瀬演習林長が

千葉演習林主任（現在の千演林長）川原勘次郎へ、「適当な民有地」を探すよう指令した。この指令書は、千演保存の往復文書綴に見当たらないので「適当」の内容は明らかでない。清澄地区には、演習林と境界が入り組んだ民有林地が多く、購入可能と予想したと考えられる。翌1910/M43年5月、川瀬から千演へ、候補地の有無につき、返事の督促があった。千演からの返信は保存されていないが、「無し」の回答と思われる。そこで、清澄演習林の一部を区画して記念林とすることになる。

記念林は、記念碑に相対する南沢スギ林であるが、その範囲や面積を明示した文書は見当たらない。当時の千演主任川原勘次郎は、1913/T2年に菌部一郎と交替する。菌部は右田半四郎に協力して「第三次経営案（1915-1924）」を編成するが、同案に記念林に関する記述はない。

記念事業報告〔山林339〕には、記念碑の建立場所として「松野記念林に隣接せる切通」とあり、記念林が南沢に所在することを示唆している。1913/T2年の大学一覧には「清澄山林字切通南澤ノ一部ニ故松野 磯氏記念林ヲ設定セリ」とあり、場所が特定される。このころ千演主任菌部は、来演者の視察コースを設定する。視察の一項目に「切通（松野先生記念碑、松野記念林俯瞰）」があり、明確ではないが記念林の主体は、南沢スギ林であると理解される（附表-3）。

南沢スギ林（松野記念林）

記念林内には、1916/T5年に4箇所の森林試験測定地が、1919/T8年に1箇所の間伐試験地（強度）が置かれる。その後、「切通南澤松野記念林内 杉間伐試験地」〔東京大学農学部附属清澄演習林概要1922〕、「松野記念林ノ全景（字南澤）」〔同上内 生長試験地第一號（明治二十八年植栽）〕〔千葉縣演習林概要1933〕、「南澤，杉造林地（松野先生記念林）45K，16.65ha」〔千葉縣演習林視察案内1940〕など、印刷物に記念林の表題が見られる。しかし内容は、いずれも南沢スギ林や測定地、試験地の説明で、記念林の由来などには触れていない。

南沢スギ林は、1895/M28年から3年間にわたり、本多の陣頭指揮で造林された。苗木の衰弱による枯死などで苦勞が多く¹⁰⁾、「本多静六の総領息子」の通称があり、演習林としての最初の造林地である。1908/M41年3月の造林実習で間伐されているので³⁶⁾、記念林の設定時には閉鎖していたと思われる。

記念事業報告〔山林339〕では、土地を購入しなかったことには、全く触れていない。「清澄演習林の一部を松野記念林に選定」との語句はあるが、うっかりすると、記念林の林地は、醸金によって買入れたと理解されそうな構成である。なお大学一覧でも、この点については、あいまいな表現になっている（附表-3）。

記念林の面積を、かりに視察案内（1940）の16.65haとすると、地価と寄附金額の関係は、当時の周辺地価から見て、ほぼ妥当である。この時代の千演による民有林地の購入例として、1910/M43年の坂本前谷（林道用地）1.83ha，178円40銭（97.5円/ha），1911/M44年の坂本前谷（林道用地）0.65ha，62円（95.4円/ha），同年の四方木西原（23林班）3.15ha，302円6銭（95.9円

/ha) があげられる。記念林16.65haを1,500円で購入したとすれば90.1円/haとなり、実際の地価と符合している。

記念碑, 記念林の見学者, 視察者

1922/T11年4月, 大日本山林会第32回大会が千葉市で開催され, 大会後の視察旅行で250名ほどの会員が千演を訪れる。川瀬善太郎は山林会会長として案内役に加わる。視察者用に「東京大学農学部附属清澄演習林概要」が編集され, 「切通南澤松野記念林内 杉間伐試験地」が視察項目のひとつになる。記念事業は山林会の主催であったので, 醸金に応じた視察者も多かったと思われる。記念碑前で撮影した視察団の写真がある〔山林478〕。

千葉演習林では毎年春に造林学現地実習が行なわれる。大正年代末の本多静六指導の実習記録には, 七曲の外国樹種見本林見学の折に, 学生, 生徒が「記念碑」に詣でたとある。いっぽう南沢のスギ林については, 造林時の苦労や, 立木の経済価値などが詳細に説明されている。しかし, この林が「記念林」に指定されていることに, なぜか本多は一言も触れていない¹⁰⁾。

昭和年代前半の中村賢太郎指導の造林学現地実習では, 「記念碑」まえて松野 礪の業績の解説があったが, 「記念林」の説明はなかった。その後は実習内容が変わり, 学生が「記念碑」を訪れる機会は少なくなる³⁶⁾。

1943/S18年4月, 千演で演習林創設五十周年記念式典が開かれた。そのおり記念碑を訪れた白澤保美(元農林省林業試験場長)は, 以下の漢詩を「梓西學人」として遺している^{37, 60)}。白澤は1887/M20年の東京農林学校入学なので, 松野の講義は受けていないと思われる。しかし後年, 山林局林業試験所長時代の松野とは関わりが深く, 川瀬とともに記念碑建立の発起人代表を務めている。

詣松野先生記念碑

外來樹木萬重中 碑字長留勸學功
石默蒼苔林愈茂 先生遺業與年崇

(參列清澄演習林創設五十年祝賀式述所感其三)

展清澄演習林内松野先生記念碑

記念林頭記念碑 星霜幾歲石芳滋
人稀唯有鳴松籟 先覺功名千歲垂

今後の維持管理

記念碑：

堅牢に造られた御影石の礎石に据えられた, 高さ3.15m幅1.2mの仙台石(石巻産, 灰黒色粘板岩)の碑は, 百年近い風雨に曝されてきたが, ほとんど損なわれていない。碑面の平滑さは, 多少失われたように感じられるが, 刻まれた碑文は容易に読み取れる。

建設当初は、南沢スギ林や外国樹種見本林の樹木が若く、遠くから碑を眺めながら清澄へ向う道を登ることができた。その後、周辺の林木の成長にともない、碑は目立たなくなり、車だと存在に気づく間もなく、通過してしまうことも多かった。

しかし1993/H5年に南沢スギ林の北側部分が、演習林創設百周年記念造林のために伐採されて周囲が開け、碑はふたたび道路（県道81号 市原・天津小湊線）から、容易に眺められるようになった。

記念林：

すでに述べたように、記念林林地の範囲や面積を明示した資料は見当たらない。視察案内(1940)の「南澤、杉造林地（松野先生記念林）45K、16.65ha」が、いちおうの目安であろう。1948/S23年と49/S24年の台風被害で南沢スギ林は14.31haに減り、被害跡地にはサンプスが再造林された〔視察案内1958〕（附表－3）。その後1993/H5年、上記のように北側部分が伐採され、跡地1.14haにスギが再造林された。

現在、かつての「南澤、杉造林地（松野先生記念林）」は、スギ老齢林（演習林最初の造林地）、台風被害跡地林、スギ幼齢林（百周年記念造林）で構成されている。なお、台風被害跡地のサンプスギ林は所在を特定できず、調査が必要である。また、森林試験測定地と間伐試験地は、すべて廃止された。

今後は、記念林としての育成計画の必要性や、記念林地の区画の確定などの検討が望まれる。記念林付近では、長年にわたり県道の改良工事が進んでおり、ヘアピンカーブの浪切不動付近には、ループ橋の建設が予定されている。実現すれば、道路から記念碑、記念林方向の眺望が変わる可能性がある。長期的には、そうしたことへの配慮も求められよう。

おわりに

種々の記念物、なかでも個人を顕彰する記念物については、いろいろな考え方があがる。個人の業績には、功罪の両面があり、その評価は人や時代により変わるからである。それゆえ、個人顕彰の記念物の設定には、否定的な立場をとる人も少なくない。

本郷キャンパスの安田講堂わきに「濱尾 新総長のブロンズ像」が在る。東大紛争のおり、像の一部が壊される事件があった。東大解体が叫ばれた時代、濱尾を顕彰する像は、大学がもつ負の遺産の象徴とでも考えられたのであろう。

上記は極端な例であるが、記念物の新設にあたっては、将来を考えての周到な検討が重要である。また、すでにある記念物の継承には、十分な資料の用意が欠かせない。個人を顕彰する記念物では、本人の経歴、業績と諸角度からの評価、客観的な人物像、記念物が設けられた経緯などの資料が求められる。

「松野先生記念碑」と「松野記念林」には、林学教育の黎明期に関わった人々の想いがこめら

れている。個人の顕彰を目的にしているが、林学教育の始まりを回顧する記念物でもある。この資料は、そうした立場から今後の維持管理に、役立つことを願ってまとめた。

元東京大学大学院教授（農学生命科学研究科附属演習林）大橋邦夫氏から、用字、用語、年度の誤りや、文献（15）の存在などにつき、ご教示をいただきました。あつくお礼をもうしあげます。なお未だ、文献の探索や資料の推考が不十分なため、欠落や誤りが多いと思います。お気付きの点につき、ご指摘のほどをお願いいたします。

引用文献

- (1) 安藤圓秀（1964）農学事始め－駒場雑話－，300pp. 東京大学出版会，東京.
- (2) 安藤圓秀 編（1966）駒場農学校等史料，1168pp. 東京大学出版会，東京.
- (3) 有田正盛（1931）山林學校から臺灣在職まで，明治林業逸史續編⁶⁾，291-298.
- (4) 大日本山林會 編（1906）本邦維新以降明治三十八年末に至る森林歴史の概要，山林281：1-49.
- (5) 大日本山林會 編（1931）明治林業逸史，884pp. 大日本山林會，東京.
- (6) 大日本山林會 編（1931）明治林業逸史續編，516+27pp. 大日本山林會，東京.
- (7) 道家充之（1931）明治廿一二年頃の大林区署，明治林業逸史續編⁶⁾，299-304.
- (8) 江崎政忠（1931）東京山林學校の思出，明治林業逸史續編⁶⁾，281-290.
- (9) 八戸道雄（1896）明治林業の発端（松野 礪先生の談話に據る），山林157：14-31.
- (10) 本多静六（1926）清澄演習林本多教授指導造林實習日記，148pp. 東京帝國大學農學部附属演習林，東京.
- (11) 本多静六（1931）我國造林學の過去と將來，山林582：62-68.
- (12) 本多静六（2006）本多静六自伝 体験八十五年，269pp. 実業之日本社，東京.（1952年講談社出版「本多静六体験八十五年」の改題，再編集版，本多健一監修）
- (13) 本郷高德（1911）ハインリッヒ，マイアー先生，山林348：1-3.
- (14) 市島豊山（賀田直治）（1900）清澄山春季演習日記，山林210：31-43.
- (15) 飯塚 寛（1999）松野 礪と志賀泰山，森林計画誌32：43-50.
- (16) 上山満之進（1931）山林局時代の思出，明治林業逸史續編⁶⁾，347-361.
- (17) 片山茂樹（1953）我國林業教育の發展過程と諸問題，林業経済55：21-29，56：25-35.
- (18) 片山茂樹（1962）志賀泰山先生，林業先人伝³⁹⁾，75-136.
- (19) 川瀬善太郎（1931）駒場農林學校の運動部，明治林業逸史續編⁶⁾，305-307.
- (20) 小林富士雄（2004）松野 礪とクララ夫人－曾孫ニコラウス氏の来日を機に－，林業技術748：32-35.

- (21) 窪田円平 (1962) 村田重治先生, 林業先人伝³⁹⁾, 137-185.
- (22) 松野 磧 (1892) 林制一斑 (講話記録), 31pp. + 36pp. 東京 (明治25年5月, 10月), 国会図書館, 近代デジタルライブラリー.
- (23) 松野義次 (1931) 朝鮮記念植樹の由來外一, 明治林業逸史續編⁶⁾, 497-499.
- (24) 右田半四郎 (1931) 中央に於ける林業教育機關の沿革, 明治林業逸史⁵⁾, 232-265.
- (25) 右田半四郎 (1931) 古記の拾遺と思ひ出, 明治林業逸史續編⁶⁾, 450-470.
- (26) 三村鐘三郎 (1931) 北尾先生の講義と川瀬先生の獵, 明治林業逸史續編⁶⁾, 371-374.
- (27) 嶺 一三 (1994) 演習林の思い出, 演習林 (東大) 32 : 165-192.
- (28) 宮崎精允 (1930) 博士の逸話, 中村彌六林業回顧録³³⁾ 附録, 9-39.
- (29) 村田重治 (1908) 故松野 磧先生略傳, 山林307 : 1-12.
- (30) 村田重治 (1931) 二三の回顧, 明治林業逸史續編⁶⁾, 308-314.
- (31) 長池敏弘 (1975) 松野 磧と緒方道平, 林業經濟324 : 16-25, 325 : 11-17.
- (32) 長池敏弘 (1977) ハイネリッヒ・マイルの日本山林巡回とその影響について, 林業經濟340 : 8-22.
- (33) 中村彌六 口述 (1930) 林業回顧録 (吉田義季筆記), 221pp. 大日本山林會, 東京.
- (34) 中島廣吉 (1962) 新島善直先生, 林業先人伝³⁹⁾, 577-605.
- (35) 成川房幸 (1931) 故松野 磧先生の譚, 明治林業逸史續編⁶⁾, 435-444.
- (36) 根岸賢一郎・鈴木 誠・斯波義宏 (1991) 千葉演習林沿革史資料(3), 東京大学農学部林学科学生の造林学現地実習の変遷, 演習林 (東大) 28 : 13-57.
- (37) 根岸賢一郎 (1997) 千葉演習林沿革史資料 (番外メモ), 往復文書綴に垣間見る千葉演習林の昔, 演習林 (東大) 36 : 1-342.
- (38) 根岸賢一郎・八木喜徳郎・丹下 健 (2003) 駒場苗圃, 代々木演習林, 田無苗圃 - 演習林田無試験地沿革史補遺 -, 演習林 (東大) 42 : 183-207.
- (39) 日本林業技術協会 編 (1962) 林業先人伝, 605pp. 日林協, 東京.
- (40) 小口義勝 (1962) 中村弥六先生, 林業先人伝³⁹⁾, 35-74.
- (41) 奥山洋一郎 (1997) 戦前期におけるわが国林学高等教育の展開, 筑波大学研究センター研究紀要, 大学研究16号.
- (42) 太田勇治郎 (1962) 佐藤銀五郎先生, 林業先人伝³⁹⁾, 465-500.
- (43) 櫻井 勉 (1931) 内務省山林局創始の前後, 明治林業逸史⁵⁾, 1-3.
- (44) 佐藤銀五郎 訳 (1891) マイエル氏留別の演説, 山林103 : 50-63.
- (45) 佐藤銀五郎 司会 (1931) 林業回顧座談會 (第一回), 山林學校時代より明治二十五年頃まで, 明治林業逸史續編⁶⁾, 1-69.
- (46) 佐藤銀五郎 司会 (1931) 林業回顧座談會 (第二回), 明治二十五年頃より明治三十年頃

- まで, 明治林業逸史續編⁶⁾, 70-137.
- (47) 佐藤振五郎 司会 (1931) 林業回顧座談會 (第四回), 明治時代を通じて, 明治林業逸史續編⁶⁾, 193-232.
- (48) 佐藤振五郎 (1931) 駒場運動會に於ける假装行列の起源, 明治林業逸史續編⁶⁾, 314-319.
- (49) 志賀泰山 (1894) 本邦ノ森林及ビ林學, 32pp. (非売品), 国会図書館, 近代デジタルライブラリー (山林137に再録).
- (50) 志賀泰山 (1931) 國有林施業案編成の創始, 明治林業逸史⁵⁾, 82-86.
- (51) 志賀泰山 (1931) 耐火木材, 明治林業逸史⁵⁾, 643-647.
- (52) 志賀泰山 (1931) 林業教育と林業勧誘, 明治林業逸史續編⁶⁾, 262-280.
- (53) 島田錦藏 (1962) 川瀬善太郎先生, 林業先人伝³⁹⁾, 415-463.
- (54) 塩谷 勉 (1986) 林学教育の始まり, 林業経済451: 1-6.
- (55) 白澤保美 (1931) 林業試験, 明治林業逸史⁵⁾, 217-225.
- (56) 白澤保美 (1931) 林業講習, 明治林業逸史⁵⁾, 288-292.
- (57) 白澤保美 (1936) 我邦林學及林業の過去と將來, 九州帝國大學農學部開學十五周年講演集, 244-263.
- (58) 藪部一郎 司会 (1935) 駒場を語る座談會, 山林632: 66-81.
- (59) 高橋琢也 (1931) 官林處分問題及林業教育機關, 明治林業逸史續編⁶⁾, 238-262.
- (60) 田中波慈女 (1962) 松野 礪先生, 林業先人伝³⁹⁾, 1-33.
- (61) 田中 壤 (1887) マイエル氏の山林説を讀む, 山林59: 649-655.
- (62) 手束平三郎 (1979-81) 物語林政史, 林業技術442-477号. (続編を加えた単行本 (1987) 森のきた道, 347pp. 日林協, 東京.)
- (63) 東京大学学務課 (1971?) 東京大学一覽, 自昭和44年度至昭和45年度, 850pp.
- (64) 東京大学百年史編集委員会 (1984) 東京大学百年史, 通史1, 1094pp. 東京大学出版会, 東京.
- (65) 東京大学百年史編集委員会 (1986) 東京大学百年史, 資料3, 961pp. 東京大学出版会, 東京.
- (66) 東京大学百年史編集委員会 (1987) 東京大学百年史, 部局史2, 1188pp. 東京大学出版会, 東京.
- (67) 東京帝國大學 (1932) 東京帝國大學五十年史, 上冊, 1429pp.
- (68) 筒井迪夫 (1997) 松野先生の碑(1), 同(2), 林業技術666: 43, 同668: 41.
- (69) 和田國次郎 (1931) 前世紀の話, 明治林業逸史續編⁶⁾, 480-493.
- (70) 和田義正 (1931) 諸先生の逸話, 明治林業逸史續編⁶⁾, 476-480.

文献（60）：松野の農科大学在職期間と松野記念林の区域の記述に誤りがある。

「明治33年（1900）先生が農科大学教授の職をやめた後は」の明治33年は、23年の誤記、多分、文献（11）の「明治33年、松野氏教授を辞するや」（明治23年の誤植）からの引用と思われる。「清澄山東京大学演習林の外国樹種植栽地一帯を松野記念林とし」と外国樹種見本林を含めているのは、1913/T 2年に林学本科卒業後、しばらく大学に在籍した田中の記憶違いであろうか。

文献（68）：上記、文献（60）の田中の誤りを根拠にした、想像による記述が多い。

文献名「山林」は、大日本山林會報告1-132（1882-1893）、大日本山林會報133-546（1894-1928）、山林547-（1928-）をしめす。

なお、「山林」雑録からの引用は、本文中に〔山林号数〕として表示した。

附表－1. 樹木試験場・東京山林学校・東京農林学校・帝国大学農科大学林学科
関係年表・資料（1877/明治10年～1900/明治33年）
－樹木試験場の設置から志賀泰山農科大学講師の辞任まで－

年/月/日	事項・資料 [出典]
1877/12/25 (M10)	内務卿大久保利通から樹木試験場設置の必要を太政大臣三條實美に上申：「樹木試験場の儀ニ付伺 林政之事業追々進歩スルニ際シ 今般當省地理局ニ於テ樹木試験場ヲ設ケ 各種之樹苗等ヲ栽植培養シ 其樹藝之得失 生長之度 風土之適否等ヲ参考シ 其効驗ノ如キハ檢究之上 各地方ヘ公告シ 漸次官民森林改良之基ヲ相立度 因テ府下第九大區三小區豊島郡西ヶ原村ニ於テ 別紙圖面之箇所 此民有反別三町一畝廿三歩 此代金千四百六拾五圓拾三錢九厘ヲ以テ買上 並該地續キ員外官林反別一反一畝十七歩トモ合 反別三町一反三畝十歩 當省地理局用地トシテ御引渡シ相成度 尤右費用ハ當省定額金之内ヲ以テ支辨可致候條 至急御裁可有之度此段相伺候也」[右田] ²⁵⁾ 。
12/27	松野 礪提案に係る「樹木試験場」の設置を裁可、東京府下北豊島郡西ヶ原村に置く。
1878/03	樹木試験場事業開始（民有地とも3町1反歩）。
1879/05/15 (M12) 05/20 －	内務省に山林局を新設（山林課が昇格）、本課に試験場掛を置く。 松野 礪が山林局本課林制掛兼試験場掛となる。 民有地5町4反歩買上げ。
1881/04/07 (M14) 06/15	農商務省を設置、山林局をその所轄とする。 農商工諸学校の管轄権限をめぐって、農商務省と文部省の間に対立を生じる。 (1882/M15/04/26 駒場農学校と商船学校以外の実業学校は、文部省所管となる)。
06/25	山林局に学務課を置く、山林学術試験及び著書翻訳などに関する事務を掌理。
07/08	松野 礪が山林局学務課長となる。
07/21	学務課事務條項の第一に、山林学校に関することが掲げられる。
08/02	東京大学では各学部の本科の生徒に限って「学生」と称することになる。
09	山林学校建築予定地の見積、縄張など。
1882/01 (M15) 03 07/07	山林局樹木試験報告発刊。 山林局学務課事務を西ヶ原樹木試験場内で取扱う。 農商務省「山林学校」の設置を太政大臣に上申（10/25裁可）。 上申書：「顧ミルニ歐洲諸國ノ如キハ 夙ニ山林學校ノ設ケアリテ 學術經驗并行ハレ 遂ニ今日ノ進歩ヲ馴致セリ 豈ニ企望セサランヤ 夫レ我國地勢ノ山林ニ富ミ而モ天賦ナル運輸ノ便アリ 焉ソ斯學ヲ講シ 斯術ヲ經驗シ 大ニ山林ノ富源ヲ鞏固ナラシメスンハ非ス 夫然我國古來ノ經驗 甚タ乏シキニ非ス 其最缺典ナル處ノモノハ 學術ノ一點ノミ 是レ實ニ山林學校ノ目下必用トスル所以ナリ」[東大百年史、通史1]。 上記上申書に添付：山林学校概則（全30条、第一章 編成、第二章 入学及諸書式、第三章 退学、第四章 官費及私費、第五章 生徒試験、第六章 学年及休業、第七章 授業、第八章 生徒給養）、山林学校第二則（校長、幹事、教員）、山林学校第三則（入学、退学、試験及証書、生徒心得、寄宿舎規則）詳細は「山林10、11」。
11/11	松野 礪が「山林学校」校長となる。
11/21	山林学校を府下北豊島郡西ヶ原村に設置し、山林局の管理に属し、農商務省「東京山林学校」と称す、同時に西ヶ原樹木試験場および山林局学務課を廃し、その事務を同学校に属す。
12/01	東京山林学校、豊島郡西ヶ原村の西ヶ原樹木試験場内に開校、学科を11に分ち、修業年限3年間、入学資格は普通中学を卒業し、満18歳以上25歳以下とする、49名入学許可、校長 松野 礪、同日開校式を挙行。 松野 礪校長挨拶：「夫レ山林ノ業ハ國家經濟上ノ急務ナルヲ以テ進ンテ改良ヲ企圖スト雖モ 我邦古來學術ノ未タ完全ナラサルヲ以テ 茲ニ東京山林學校ヲ設置セラレタリ 因テ之ヲ廣告シ篤志者ノ募集ニ應スルモノ凡ソ百有餘名 然リ而テ試験合格の者四十九名ニ及ヘリ 其姓名録ヲ具シ謹ンテ之ヲ閣下ニ呈ス」(入学生全員の氏名は資料見付からず不詳)。

年/月/日	事項・資料 [出典]
1882/12/01 (M15) (続き)	<p>農商務卿 西郷従道訓諭：「我邦氣候地質最モ植物ニ適應シ 山林ハ富國ノ基礎タル 復タ論ヲ俟タス 世人繁殖ニ黽勉スト雖トモ 未タ改良ノ効ヲ奏スルニ至ラサルモノハ 學術講究ノ關クルニ由レリ 今東京山林學校ヲ設置シ 以テ學術ト實業トヲ併セ 講セシメントス 他年其人ヲ育成シ其實効ヲ奏スルカ如キハ 責校長ニ在リ 學徒モ亦其意ヲ體シ 其業ヲ研究シテ怠ルコト勿ク 以テ國家ノ裨益ヲ期セヨ」。</p> <p>生徒総代 中川鉦次郎答辞：「夫レ山林繁殖ノ事業 我邦古來其方法ナキニ非スト 雖トモ 未タ純然タル學術ノ備具ナラサルヲ以テ 茲ニ東京山林學校ヲ新設セラレ 學術實業ノ並ヒ隆盛ナランコトヲ要セラル 鉦次郎等夙ニ學志ヲ山林二期セシヲ以テ 募集ニ應シ 試験合格ヲ以テ幸ニ學徒ニ取用セラルルコトヲ得タリ 將來勉業怠ルコトナク以テ是盛學ニ報ユル所アラントス 誠惶頓首」。</p> <p>東京商船學校 中村六三郎校長祝辞：「維時明治十五年十二月一日 東京山林學校開校ノ盛典ニ班スルノ榮ヲ得タリ 恭惟ルニ凡ソ全球ノ文明ノ進度ハ 人智ノ開否ト工藝殖産ノ精粗ニ淵源セラル得ス 我邦輒近人智漸ク開達シ 文物日ニ煥シニ工藝月ニ獎ミ 其精微ヲ索メ其蘊奧ヲ探ルニ至ルト雖トモ 獨リ樹藝ノ滋殖ヲ謀リ殷阜ノ基礎ヲ鞏フスルノ道ニ至テハ 未タ専ラニ之レヲ講究スルノ舉アルヲ聞カス 實ニ千古ノ遺憾ト言ハサルヲ得ス 今ヤ官家茲ニ見ルアリ 本校ヲ設ケテ以テ其學ヲ講明シ 森林ノ栽培保持其宜シキヲ得セシメ 以テ富源ヲ永遠二期シ 以テ長利ヲ百世ニ圖ラル 寔ニ邦國民人ノ福祉ニアラスヤ 夫レ如此シハ則チ百貨以テ用ヲ是ニ資リ 船艦以テ材ヲ是ニ仰クヲ得ヘシ 然リ而シテ有司亦鞠躬勵精能ク其任ニ當リ 生員又専ラ其學ヲ琢磨セラルルヲ以テ 將來本校ノ事業倍々旺盛ニ赴クヘキハ信シテ疑ヲ容レサル處ナリ 因テ燕辭ヲ陳シ以テ祝詞ニ代ユ」。</p> <p>恩田啓吾祝辞：「夫レ山林ノ人生ニ於ケル日トシテ缺ク可ラサルハ 猶五穀ノ食ニ於ケル布帛ノ衣ニ於ケルカ如シ 五穀布帛ハ人皆攷々之ヲ爲ルヲ知ル 獨山林ニ至テハ其學ヲ講スル者アラス 本邦古來樹木ニ置シカラス 惟伐採スルヲ知テ栽培スルヲ知ラサルニ至ル 是レ山林ニ富メル所以ナリ 然レトモ限リアル供給ヲ以テ限リナキ需用ニ充ツ 培植伐採其宜キヲ得ルニ非サレハ 將タ焉ソ能ク永世ニ保持シテ之ヲ充足スルヲ得ンヤ 況ヤ輒近多需濫伐昔時ノ比ニ在サルヲヤ 於是政府山林學ヲ興スヲ謀リ 地ヲ西ヶ原ニトシ一營ヲ創立シ 生徒ヲ募リ其術ヲ講究シ 以テ大ニ其業ヲ擴張セントス 所謂本立道生ルニ幾シ 切ニ希フ生徒諸君篤ク之ヲ體認シ 奮進切磋其學ヲ成就シテ 以テ衆庶ニ率先シ五穀布帛ト同ク 須臾モ忽ニス可ラサルヲ知ラシムルアラントコトヲ 現今全國官私ノ山林大凡一千萬町歩アリ 斯富ヲ以テ他日果シテ栽培改良ノ功ヲ奏シ一般鬱葱ノ觀ヲ呈スルトキハ喬木良材何ヲ求メテ得サランヤ 則齊々國家ノ洪益生民ノ幸福ノミナラス剩材ヲ以テ海外諸國ノ需求ニ應スルモ亦難キニ非サルヘシ 諸君其レ勉メヨ 嗚呼此舉本邦創始ノ一大美事 政府ノ爲ニ賀セサル可カラス 諸君ノ爲ニ告ケサル可カラス」[山林12]。</p>
1883/04/01 (M16) 09/17	<p>東京山林學校在籍生徒氏名(40名)：秋山謙藏、有田正盛、磯山廣居、江崎政忠、片山吉成、櫻井尚次郎、杉原龜三郎、田町與三郎、中川鉦次郎(守格)、永田正吉、船田義行、本間誠二郎、松井武節、(以上13名、M19卒)；伊藤重助(介)、北村誠太郎、小寺千吉(定職)(以上3名、M20卒)；有馬駿甫、岡本辰次郎、桂元剛、菊地喜太郎、菊池爲市郎、後藤喬三郎、佐々木常之助、佐々木良二、佐藤重三、高塚菊太郎、高塚幸至、土田友吉、長井於菟四郎、鯉江源太郎(のち海軍大主計)、日野吉甫、藤崎梅太郎、丸尾頼之、三島善吉、箕作大助、三宅元吉、諸田俊一郎、山形丹三、安井銳二郎、渡邊濟、(以上24名、中退)。</p> <p>前期1年修業証書授与式、38名修業、校長 松野 磯、助教 安本徳寛、生徒総代 中川鉦次郎、監事 山田嘉猷の挨拶、優等生の表彰、安本助教は入学後1年間の退学者が10名で、他の諸学校に比べて少ないのは、生徒の確乎とした勉学精神によると褒める。</p>

年/月/日	事項・資料〔出典〕
1883/09/17 (M16) (続き)	<p>安本助教訓示：「官此日ヲトシ修業證書授與ノ式ヲ行ハル 余此美舉ニ列スルノ榮ヲ得タルノ餘リ一言以テ學生諸子ヘ述ヘントス 抑モ此饗タルヤ設立ノ日尚淺キカ故ニ校則以テ盈チタリト云ヒ難ク 器械以テ備リタリト期シ難シ 教官諸員ノ講義懇到ナルモ隔靴ノ感ナキ能ハス 是レ學生諸子ノ爲メニ大ナル不幸ト言ハサルヲ得ス 然ルニ諸子ハ敢テ此點ヲ念トセス 此ニ列スル諸子ニシテ未タ些ノ校則ヲ犯セシコトアルヲ聞カス 未ターノ器械ヲ毀チシコトアルヲ見ス 又諸官ニ對シ不敬ノ舉動アルヲ認メス 是レ諸子ノ爲メニ大ニ嘉ミスヘキノミナラス 校長教官等ノ實ニ満足スル所タリ然シテ設費以來入學諸生即チ此ニ列スル諸子ハ 實ニ後來望ミヲ屬スルノ人ト言ハサルヲ得ス 其精心ノ確乎タル恰モ金石ノ如シ 此ニ列スル諸子ハ實ニ三十八名ニシテ曾テ一同入學セシモノ四十八名中疾病事故ニ由リ退學セシモノ僅々十名ニ過キス 之ヲ他ノ諸學校ニ徴スルニ其在學者退學者トノ比較全ク反對ニ居レリ 是レ諸子精神ノ確乎タルニアラスシテ何ソヤ 其勉強力ノ盛ナル恰モ潮水ノ如シ 此ニ列スル諸子ハ實ニ他ノ學校ニ比ナキ夥多ノ學課ヲ帶ヒ 混々倦ナク常ニ以テ競争ノ心ヲ失セス 浸潤トシテ進取ノ氣象面ニ現セリ 加之此一大試験ニ一ノ落第セシモノナシ 其平常ノトキト雖トモ 早起晩臥滅燈ノ析ヲ聽カサレハ 嘗テ寢ニ就キシモノアルヲ聞カス 是諸子勉強力ノ盛ナルニアラスシテ何ソヤ 其品行ノ端正ナル恰モ直木ノ如シ 此ニ列スル諸子ハ能ク自ラ戒慎シテ修學ノ外 他ノ念慮アルヲ聞カス 是レ諸子品行ノ端正ナルニアラスシテ何ソヤ 是當タ校長諸官ノ教誨ノ宜キノミナラス 實ニ學生諸子ノ卓越セル精神ヨリ發スル美光ト謂ハサルヲ得ス 將來尚ホ此心ヲ以テ益勵勉シ 他日全科ノ業ヲ卒ヘ汎ク其利用ヲ施スニ於テハ 國家ノ爲メニ益ヲ與フルヤ期シテ待ツヘキナリ」〔山林21〕。</p>
09 10/20	<p>東京山林学校入学生氏名（9月募集入試合格者，42名）：梅村重治，白河太郎，道家喜代三（充之），内藤確介，松下孝（幸）三郎，村田重治，森 壬五郎，柳田六郎（以上8名，M20卒）；小西成章，篠澤半五郎，白戸（松波）秀實，志和智（知）榮介，星野政敏，森田利虎，山根龜吉（以上7名，M21卒）；鈴木 馨（力衛）（M25卒）；青木富吉，有村甲子彦，飯塚駿一郎，大迫萬次郎，笠間 清，小船鋭吉，白川準次郎，鈴木金三郎，關 龜麻呂（簡易科M22卒），多賀讓吉，田中鏡太郎，千葉爲治，戸田仙太郎，永井道直，原 清治，星野丹三，細谷十太郎，本間小左衛門，眞島武市，村上太郎，森 房次郎，山口貞雄，吉田慶次郎，吉田守一，若井 覺，和智虎太，（以上26名，中退）。</p> <p>中村彌六が東京山林学校教授となる（農商務権少書記官と兼務）。</p>
1884/02 (M17) 04/24 08 09/04 11	<p>東京山林学校入学生氏名（2月入学，24名）：大岡（森脇）勝三，但木橋二，堀田英治（以上3名，M21卒）；折原（本多）静六，中山斧吉，長倉純一郎（以上3名，M23卒）；風間源吉（吾）（M25卒）；石渡宗一，奥村六次郎，小倉哲也，大谷直枝，小野郁藏（三）（のち山林局村田重治のもとで特別経営の経費算定），小林福之助，酒井知理，佐々木米三郎，内藤 朝，西脇鐵次郎，伴 秀次郎，秀島英五郎（のち三菱秘書長），牧野昇治，松下友吉，山岡富之助，吉田乙熊，渡部 正（以上17名，中退）。</p> <p>東京山林学校校則（全29条）を制定，修業年限を5年間に延長 〔山林28〕。</p> <p>東京山林学校細則（全15条）を制定 〔山林33〕。</p> <p>東京山林学校入学生氏名（9月入学，20名）：奥村浅次郎，柴田榮吉，田中歡次郎（喜代次）（以上3名，M21卒）；河合銚太郎，川瀬善太郎，清原道次，野尻貞一，宮島多喜郎（以上5名，M23卒）；江口浩氣，尾野實信（のち陸軍大将），小野三五八，海津龜壽，片岡延太郎，公文克八，富谷金三郎（簡易科M22卒），樋口槌次郎，村山儀七，森 修吉，山本喜太郎，和田小太郎，（以上12名，中退）。</p> <p>東京府下下板橋山林局用地を樹木試験場として東京山林学校へ貸付。</p>

年/月/日	事項・資料 [出典]
1885/02 (M18) 09	東京山林学校入学生氏名（2月入学，25名）：全員の氏名は不詳。 東京山林学校入学生氏名（9月入学，9名）：全員の氏名は不詳。 1885/M18年2月，9月入学と思われる卒業生：和田國次郎（M21卒）；有田虎藏，白杵永次郎，齊藤宇一郎，齊藤音作，三戸章造，鈴木審三，仙田桐一郎，橋口正美，林駒之助，松浦萬次郎（以上10名，M23卒），井上章慶，内山房吉，勝間田重泰，木村喬顕，籠手田彦三，佐々木（工藤）和策，鹽澤 健，柴田義雄，鶴田（相浦）貞次郎，中牟田五郎，八戸道雄，原 音吉，福田介三郎，前田 讓，三木隆太郎，望月 常，森山爲太郎，山口信夫，渡邊雅太郎（以上19名，M25卒）。
1886/01/18 (M19) 02/21	中村彌六が東京山林学校教授専任となる。 東京山林学校入学生氏名（2月入学，8名）：井伊谷爲藏，佐藤銀五郎，田中勇太郎，西田又二，弘田伸穎（以上5名，M25卒）；氏名不詳（3名中退，農林学校農学部，海軍などへ）。
03	農商務省官制が制定され，山林学校は山林局第一課の所管となる。
04/17	駒場農学校官制，東京山林学校官制公布（勅令18），農商務大臣の直轄となる。
05/04	東京山林学校速成科を設置，速成科規則制定，修業年限2年（規則第一条：「東京山林学校速成科ハ林務ニ従事スヘキ官吏ヲ養成スル爲メ速ニ森林學術ヲ習得セシムルヲ以テ目的トス」）（山林学校時代末期で，実際の生徒募集は行われなかった）。
07/12	農商務大臣西郷従道，官制案を添え東京農林学校の設立を閣議に要請，経費節約が主目的（07/22認可）。
07/22	松野 礎と中村彌六が東京農林学校教授となる。
07/23	東京農林学校官制公布（勅令56），駒場農学校と東京山林学校とを廃止し，東京農林学校を設置。校長，幹事，教授，助教，助教補，訓導，舎監，書記を置く（07/24位置を駒場と定める）。
08/06	（東京山林学校廃校時の学生数126名，うち官費生5名）[右田] ²⁴⁾ 。 東京農林学校校則（全70条）公布（農商告15），農学部，林学部，獣医学部の3学部のほかに予備科と各学部付設の速成科を置く，修業年限，農・林および各速成科2年間（1887/M20/12から3年間），獣医，予備3年間，入学年齢，専門学部で18歳以上25歳以下，教官会議を設定。
09	林学速成科入学生徒31名（志願者222名，無試験入学11名）。
10/11	東京農林学校，開校式を挙行（東京農林学校長 前田猷吉 諭示）[山林57]。 （10/12始業，11/25開校記念日を10/12と定める）。
10/16	旧東京山林学校卒業13名：磯山廣居，江崎政忠，田町與三郎，中川鉦次郎（守格）ら，M15/12/01入学，入学時48名，4年間在学。
1887/06/30 (M20)	東京農林学校林学部卒業11名：白河太郎，内藤確介，村田重治ら，M16/09入学，入学時42名，M19/10東京農林学校林学部2年編入（試験による），通算4年間在学が主。
07	文官試験試補および見習規則施行。
秋	私立東京農林学校予備校開校，中村彌六の記憶および生徒の集合写真 ²⁵⁾ から判明した本予備校出身の農科大学卒業生氏名を，学科別，卒業年順に記載する，林学本科：三村鐘三郎，松田力熊，宇都宮 寛，樋口左門，森 忠三郎，吉田義季，林学乙科：新 萬，奥谷千代也，古川徳之助，田淵正之，馬杉豊太郎，田島 定，内田長義，宮川八十八，漆山雅喜，農学本科：稲垣乙丙，伊藤隆吾，白坂 哲，田中虎次，安藤 安，農芸化学本科：鈴木梅太郎，宮地鐵治，前野長成，石塚鐵平，高林盛基，獣医学本科：坂 常三郎，望月龍三，このほかに林学以外の乙科卒業生がいると思われる。
11/11	傭外国人教師 Eustach GRASMANN 着任。
12/28	東京農林学校校則改正，学科制を採用，本科（農科，獣医科，林科）と予科に分ち，別に簡易科（速成科を改称，農科，獣医科，林科，水産科）を置く，修業年限3年間，撰科研究生制度を設置。

年/月/日	事項・資料 [出典]
1888/01/12 (M21) 07 12/10	<p>傭外国人教師 Heinrich MAYR 着任。 東京農林学校林科本科卒業14名：柴田榮吉，松波秀實，和田國次郎ら，M19/10東京農林学校林学部1年編入（試験による）農林学校に2年間在学，山林学校からの通算在学期間は編入試験の結果で異なる，たとえば和田はM18/02入学で3年間半の最短記録，柴田はM17/09入学で4年間，松波はM16/02入学で5年間半となる。 志賀泰山が農商務技師試補（山林局勤務）となる。</p>
1889/02/01 (M22) 08/05 09/04 10/04 11	<p>中村彌六が東京農林学校教授を辞任，林務官となる（02/18山林局勤務）。 農商務大臣井上 馨，東京農林学校「本科卒業生ヲシテ学士ト称スルコトヲ得セシムルノ件」を請議（08/23認可）[江崎]⁸⁾。 東京農林学校校則改正，再度学部制が復活，農学部，獣医学部，林学部の3学部を置き，各学部を本科と予科に分ける，従前の簡易科は各学部別科と改められた。 東京農林学校および旧駒場農学校の本科卒業生，「高等試験ヲ要セス其修メタル学科ニ関スル行政官試補ニ採用スルコトヲ得」となる（勅令110）。 東京農林学校林学部簡易科卒業20名：石川寅之丞，宮崎精允，和田匡夫ら（1886/M19/09入学，速成科→簡易科→別科→乙科→実科の第一回卒業生）。</p>
1890/05/07 (M23) 06/12 06/20 07/25 09/10 09/13 11/07 11/14 11/19 12/22	<p>東京農林学校校則改正，各学部の本科を甲科，別科を乙科に改称，各学部中に甲乙2科と予科とを並置。 農商務省所轄東京農林学校を帝国大学農科大学に改組，東京農林学校を本学の分科大学とする（勅令92），帝国大学令第10条に農科大学を加える（勅令93）。 松野 磧が農科大学教授となる。 旧東京農林学校林学部甲科卒業18名：本多静六，川瀬善太郎，河合鍾太郎，林 駒之助ら，M19/10東京農林学校予（備）科3年編入（試験による），その後，予科の年限が3年間から4年間に延長されたため，農林学校に4年間在学，通算在学期間は，M17/02入学の本多は6年間半，M17/09入学の川瀬は6年間（旧東京農林学校甲科生は仮に農科大学生とする，卒業したときは，農科大学準卒業生とする，但し高等中学校に於いて学力の検査を経，高等中学校卒業生と同等の資格ありと認められた者は農科大学卒業生となす）。 旧東京農林学校林学部乙科卒業36名：新 萬，杉崎森藏，武田正次郎，高木惣夫ら農科大学，学科課程（本科，乙科）を制定，農学科一部，農学科二部（農芸化学），林学科，獣医学科で構成。 志賀泰山が農科大学教授となる（東京大林区署長と兼務）。 農科大学，陸上競技会を举行。 農科大学，農学科，林学科，獣医学科乙科規則を制定。 農科大学卒業生に対して，農学士，林学士，獣医学士の称号を授与（10/19分科大学通則中改正）。 松野 磧が非職となる（農科大学教授）。</p>
1891/02/28 (M24) 07 -	<p>傭外国人教師 Heinrich MAYR 任期満了。 農科大学林学科乙科卒業18名：池部 定ら。 第一高等中学校と農科大学との間で敷地交換の議が生じ始める。</p>
1892/07/10 (M25) 07/15 07/26 09	<p>農科大学林学科本科卒業26名：佐藤銀五郎，八戸道雄ら，M19/10東京農林学校予科2年編入（試験による），農林学校に4年間，農科大学に2年間在学，通算在学期間はM19/02東京山林学校入学者が最短の6年間半。 農科大学林学科乙科卒業12名：奥谷千代也，古川徳之助，田淵正之ら。 本多静六が農科大学助教授となる（1893/M26/09 林学第二講座担任，1900/M33/06教授）。 農科大学林学科課程（本科，乙科）改正。</p>
1893/03/30 (M26) 07 09/08 09/22 10 11/10	<p>帝国大学総長文学博士加藤弘之は願により本官を免ぜられ，文部省専門学務局長兼非職元元老院議員濱尾 新が帝国大学総長に任ぜられる。 農科大学林学科乙科卒業14名：田島 定，中堀幾三郎，馬杉豊太郎ら。 農科大学林学科に三講座を置く（勅令93）。 志賀泰山が農科大学講師となる（09/09 教授を辞任，林学第一講座担任）。 文官任用令・文官試験規則施行。 松野 磧が林務官となる（東京大林区署勤務）。</p>

年/月/日	事項・資料 [出典]
1894/07 (M27) 11/29	農科大学林学科本科卒業9名：右田半四郎，白澤保美，小出房吉，成川房幸ら，1887/M20/09東京農林学校予科1年入学，農林学校に3年間，農科大学に1+3年間 在学，当時の高等中学校は予科3年，本科2年の計5年間，それとの釣り合いのため 大学で1年間プラス，通算在学期間7年間，農科大学正規の第一回卒業生とされる。 農科大学林学科乙科卒業15名：内田長儀，宮川八十八ら。 千葉県長狭郡天津町の山林336haを林学科実習用として政府より交付（千葉演習林新 設）。
1895/07/12 (M28) 07 08/06 09	傭外国人教師 Eustach GRASMANN 任期満了。 農科大学林学科本科卒業5名：三村鐘三郎ら。 農科大学林学科乙科卒業12名：中村弘人ら。 川瀬善太郎が農科大学教授となる（林学第三講座担任）。 農科大学林学科課程（本科，乙科）改正。
1896/07 (M29)	農科大学林学科本科卒業8名：新島善直，松田力熊ら。 農科大学林学科乙科卒業13名：漆山雅喜，服部正次郎ら。
1897/06/22 (M30) 07 12/25	京都帝国大学の創設にともない，帝国大学を東京帝国大学と改称（勅令208）。 農科大学林学科本科卒業5名：宇都宮 寛，樋口左文ら。 農科大学林学科乙科卒業10名：廣瀬徳太郎ら。 千葉県君津郡亀山村奥山官林1822haを農科大学演習林に編入。
1898/05/13 (M31) 07 07/21 09/09 09	農科大学で乙科を廃止し実科を設置，教育水準を上げ，中堅技術者を育成。 農科大学林学科本科卒業5名：森 忠三郎，諸戸北郎ら。 農科大学林学科乙科卒業11名：松村繁栄ら。 農科大学附属演習林に演習林長が置かれる（勅令171）。 川瀬善太郎が農科大学附属演習林長となる。 農科大学林学科実科課程制定。
1899/03 (M32) 07 10	林学博士の学位授与，中村彌六，志賀泰山，川瀬善太郎，本多静六，河合鍾太郎。 農科大学林学科本科卒業3名：堀田正逸，渡邊音吉，吉田義季。 農科大学林学科乙科卒業11名：藤枝俊信ら。 北海道石狩郡空知郡官林23,600haを農科大学演習林に編入（北海道演習林新設）。
1900/03/01 (M33) 04/17 07	農科大学，篤志林業夫規則を制定。 志賀泰山が農科大学講師を辞任する。 農科大学林学科卒業，乙科14名：松野義次ら，実科10名：本郷高德ら。

[出典] の表示のない事項は，主に以下の文献によった，駒場農学校等史料，維新～明治38年森林歴史概要 [山林281]，東大一覧沿革略，東大百年史年表，東大百年史農学部略年表，林学関係大学卒業生名簿，付旧制高等専門学校卒業生名簿（日本林学会1961）。

附表-2. 経歴 (松野 礪, 中村彌六, 志賀泰山)

松野 礪 [人事記録 東京大学所蔵]

農科大学教授 従六位 松野 礪

東京府平民 舊山口藩士族

弘化4 (1847) 年丁未3月7日 長門國美弥郡大田村ニ於テ生

年號 月 日	學業 官職 賞罰 等	當該官衙等
嘉永 6 (1853)年ヨリ 萬延 元(1860)年迄	士族 羽仁藤左衛門 全五郎吉等ニ就キ 普通和漢學ヲ修ム	
文久 元(1861)年ヨリ	防州山口ニ於テ岡 融次 全彦太郎ニ就 漢學ヲ修メ 併テ医士 坪井信道ニ就キ 蘭學初歩ヲ學フ	
明治 2 (1869)年	開成学校御雇 瑞西人カトリル氏ニ就キ 独乙學初歩ヲ學フ	
明治 3 (1870)年	北白川宮殿下ニ隨從シ 独乙國伯林ニ留學シ ドクトル「ミュルレル」「グレゴロビエス」及ヒ「ゲリケ」等ノ諸氏ニ就キ 普通學ヲ修ム	
明治 5年2月 (1872) 10月	「ハルツブルグ」ニ於テ 森林官「シュライベル」及ヒ全「ウキシケルホフ」氏ニ就キ 營林學ヲ修ム 「ノイスタットエーベルスワルド」へ 官立「フォルストアカデミー」ニ入學ス	
明治 8年6月 (1875) 8月2日 8月28日 8月29日 10月29日	全科卒業 帰朝 地理寮御雇申付 月給七拾円下賜候事 山林課申付候事 爲官林調査 熊谷縣出張申付候事	内務省 地理寮 内務省
明治 9年3月18日 (1876) 6月12日 11月25日 12月18日	筑摩縣出張申付候事 地理寮御用掛申付 月俸七拾円給與候事 但取扱准判任候事 地理助 室田秀雄 爲御用豆州天城山出張ニ隨行申付候事 月俸七拾円給與候處拾円増加候事 但取扱准判任候事	全 全 全 全
明治10年 1月 (1877) 1月17日 全日 全日 8月20日	地理寮ヲ廢シ 地理局ヲ置カル 内務省御用掛申付 月俸六拾円給與候事 但取扱准判任候事 地理局事務取扱申付候事 山林課申付候事 爲静岡縣下天城山官林栽植 及 神奈川縣下小田原城山苗木仕立場検査御用 巡回申付候事	内務省 全 全 全
明治11年 4月29日 (1878) 6月12日	山林課第一部専務申付候事 中國筋 巡回申付候事	地理局 内務省
明治12年 2月5日 (1879) 5月9日 5月12日 5月17日 5月20日 9月20日	別段ノ翻譯等申付候ニ付 本年一月ヨリ月々金拾五円ツ、給與候事 第三林區 第四林區 巡回申付候事 出張中官林作業課兼山林課第一部申付候事 山林局事務取扱申付候事 本課林制掛兼試験場掛申付候事 内國博覽会事務掛兼務申付候事	全 全 地理局 内務省 山林局 内務省

年號 月 日	學業 官職 賞罰 等	當該官衙等
明治13年 (1880) 6月11日 9月2日 9月10日 9月25日	爲豆州天城山炭焼場検査出張申付候事 静岡縣下伊豆國天城山出張申付候事 月俸六拾円繻譯料拾五円給與候處 更二月俸九拾円給與候事 外國品購求掛兼務申付候事	内務省 全 全 山林局
明治14年 (1881) 4月 4月12日 4月13日 6月14日 6月17日 7月1日 7月8日 7月23日 10月28日 11月9日 12月16日 12月26日	農商務省ヲ置カル 當省御用掛申付取扱准判任候事 山林局事務取扱申付候事 御用有之豆州天城山出張申付候事 自今取扱委任ニ准シ候事 御巡幸供奉被仰付候事 學務課長被申付候事 御巡幸供奉被免候事 皇城建築御用材掛兼務申付候事 博覽會掛兼務申付候事 但專ラ山林共進會事務可取扱事 任農商務權少書記官 博覽會掛兼務差免候事	農商務省 全 全 全 全 山林局 農商務省 全 全 太政大臣 農商務省
明治15年 (1882) 1月19日 2月17日 4月20日 6月17日 11月11日	山林部出品審査科長申付候事 敍正七位 米麦大豆畑菜種及山林共進會事務勉勵候ニ付 爲慰勞金四拾 円下賜候事 兼任參事院員外議官補 兼任山林學校長 兼參事院員外議官補如故	全 太政大臣 農商務省 太政大臣 全
明治16年 (1883) 4月24日 7月15日 8月9日	神奈川縣下相州志田山出張申付候事 御用有之静岡縣下巡回申付候事 御用有之静岡縣下巡回申付置候處 尚神奈川縣下巡回申付候事	農商務省 全 全
明治17年 (1884) 1月19日 2月14日 全日 3月29日 7月29日	依願免兼參事院員外議官補 任東京山林學校長 兼東京山林學校教授如故 月俸百五拾円下賜候事 敍從六位 御用有之栃木縣下巡回申付候事	太政官 太政大臣 太政官 太政大臣 農商務省
明治19年 (1886) 1月20日 4月 4月21日 全日 7月22日 7月22日 全日 7月23日	独乙國皇帝陛下ヨリ贈與シタル王冠第三等勳章ヲ受領シ及ヒ佩 用スルヲ允許候事 奏任官官等改正セラル 敍奏任官三等 上級俸下賜 東京山林學校廢セラル 任東京農林學校教授 敍奏任官三等 上級俸下賜	賞勳局總裁 總理大臣 農商務省 總理大臣 全 農商務省
明治20年 (1887) 7月13日 9月21日 12月26日	林学研究ノ爲メ 二週間長野縣 出張ヲ命ス 森林施業案調査委員ヲ命ス 森林施業案調査事務ニ関シ特別ノ勤勞アルニ因リ其賞トシテ金 四拾円下賜	全 全 全
明治22年 (1889) 7月3日 12月18日	神奈川長野岐阜三縣下 出張ヲ命ス 林學部部長ヲ命ス	全 全

年號 月 日	學業 官職 賞罰 等	當該官衙等
明治23年 (1890) 6月11日 6月12日 全日 6月20日 全日 全日 12月22日	東京農林学校官制被廢 前官ノ非職ヲ命ス 残務取調ヲ命ス 任農科大學教授 敍奏任官三等 上級俸下賜 非職ヲ命ス	文部省 全 文部大臣 全 文部省 全
明治24年 7月24日	俸給全被定	
明治26年 (1893) 11月10日 全日	任林務官 敍高等官七等 四級俸下賜	

松野 礪 経歴補遺 主に [村田]²⁹⁾による

明治26年 11月10日	東京大林區署在勤ヲ命ス	
明治27年 (1894) 4月24日 -	長野大林區署長ヲ命ス ザクセン王国ワイマール大公ヨリ白鷺三等勲章を受領	
明治29年 (1896) 2月7日 9月8日 10月8日 12月25日	東京大林區署長ヲ命ス 叙勲六等授單光旭日章 陞叙高等官六等 叙正六位	
明治32年 (1899) 4月24日 7月16日	任農商務技師高等官六等七級俸下賜 大日本山林會有功金章ヲ贈與セラル	
明治33年 (1900) 1月20日 5月7日 10月10日	府縣聯合共進會調査委員ヲ命ス 陞叙高等官五等 任營林技師兼農商務技師高等官五等五級俸	
明治34年 (1901) 9月20日 11月9日	第二回和歌山縣物産共進會林産物審査官トシテ同縣へ出張被命 山林學創始二十年紀祝賀 (門下生)	
明治35年 12月27日	陞叙高等官四等	
明治36年 6月26日	叙勲五等授瑞寶章	
明治38年 (1905) 2月28日 4月10日 11月1日	陞叙高等官三等 叙從五位 山林局林業試驗所長ヲ命ス	
明治39年 (1906) 4月1日 全日	任山林技師 叙高等官三等	
明治41年 (1908) 5月14日 全日 全日 全日	死去 叙正五位 特旨ヲ以テ位一級被進 叙勲四等授瑞寶章	

原文は縦書き，西暦を追加，東京大学所蔵人事記録は毛筆書き，字体はできるだけ原文に従った。

中村彌六 [履歴書]³³⁾ (原文は縦書き, 西暦を追加)長野縣平民 中村彌六
安政元(1854)年12月8日生

年號 月 日	學業 官職 賞罰 等	當該官衙等
	生家ニテ漢學ヲ修ム 信州高遠藩學校 句讀トナル	
明治2(1869)年	安井息軒ノ門ニ入り漢學ヲ修ム	
明治3(1870)年	開成學校ニ入學 獨逸語學ヲ修ム	
明治9年 (1876)	8月30日 雇獨逸語學教員申付候事 但月俸二十三圓下賜候事 9月10日 自今月俸二十八圓交付候事	東京外語學校 同
明治10年 (1877)	3月7日 依願雇差免候事 5月10日 大阪師範學校教師申付候事 但月俸二十八圓交付候事 5月29日 監事兼勤申付候事 12月3日 月俸金三十三圓給與候事	同 大阪府 同 同
明治11年 (1878)	1月20日 虎列刺病校内ニ傳染ノ際格別盡力ノ賞トシテ金貳圓下賜候事 10月5日 地理局雇申付候事 但月給金二十五圓交付候事 山林課第一部申付候事	同 内務省
明治12年 (1879)	5月 山林局雇申付候事 但月給金二十五圓下賜候事 6月 月給金十五圓増給候事 本課利用掛申付候事 7月17日 依願雇差免候事	同 同 同
明治13年 (1880)	3月30日 御用掛申付候事 但取扱判任ニ準シ月俸金八十圓下賜候事 林稅賦課法 官林管理法 出納規則等 取調申付候事 御用有之獨逸國在留申付候事	大藏省
明治14年	7月6日 報告課勤務申付候事	同
明治15年 (1882)	3月6日 御用有之歸朝申付候事 6月28日 獨逸國森林學士ニセラレ候事 12月29日 歸朝	同
明治16年 (1883)	10月4日 任農商務權少書記官 10月20日 兼任東京山林學校教授 12月8日 敘正七位 (内閣官制の制定は明治18年12月)	農商務省 同 内閣(ママ)
明治19年 (1886)	1月18日 免本官專任東京山林學校教授 上級俸下賜 4月28日 敘奏任官四等 東京山林學校會計主務ヲ命ス 7月22日 任東京農林學校教授 敘奏任官四等 7月23日 上級俸下賜	農商務省 内閣 農商務省 同 内閣 農商務省
明治20年	12月22日 林務上參考諸規則取調ヲ命ス	同
明治21年	10月19日 官林官有地取調委員ヲ命ス	内閣
明治22年 (1889)	2月1日 任林務官 敘奏任官四等 2月2日 上級俸下賜 2月18日 任所未定中山林局勤務ヲ命ス 11月5日 任農商務三等技師 山林局勤務ヲ命ス 敘奏任官三等 下級俸下賜	農商務省 内閣 農商務省 同 同 内閣 農商務省
明治23年 (1890)	3月11日 非職ヲ命ス 9月27日 依願免本官	同 同
明治24(ママ)年	7月1日 長野縣第六區ヨリ衆議院議員ニ當選 (明治23年の誤り)	

志賀泰山 [人事記録 東京大学所蔵]

林務官 志賀泰山

東京府平民 旧宇和島藩士族

安政元(1854)年8月21日 伊豫國北宇和郡宇和島竜光院前町ニ於テ生ル

年號 月 日	學業 官職 賞罰 等	當該官衙等
明治4年(1871)	南校ニ入学独逸学ヲ修業シ引續キ開成学校ニ入り鑛山学ヲ学フ	
明治8年(1875)	開成学校鑛山学科廃止セラル	
明治10年 (1877) 2月1日 5月7日 12月3日	教師ニ雇ヒ一ヶ月金貳拾八円交付候事 月俸三拾円交付候事 月俸三拾五円交付候事	大阪師範学校 全 全
明治11年 (1878) 2月9日 2月12日 2月20日 8月13日	滋賀縣へ出頭申付候事 大津師範学校理化学教員申付候事 月俸金四拾円給与候事 在職中勉勵候ニ付為其賞金拾七円五拾錢給与候事 大津師範学校監事兼勤申付候事	全 滋賀縣 大阪師範学校 滋賀縣
明治13年 (1880) 3月23日 9月10日	兼監事差免候事 兼滋賀縣公立大津病院理化学教師嘱託 月手当貳拾円	全 公立大津病院
明治14年 (1881) 11月11日 11月14日	依願職務差免候事 在職中格別勉勵ニ付為慰勞金四拾円給与候事	滋賀縣 全
明治15年 (1882) 1月12日 9月9日	理化学教師ニ雇ヒ一ヶ月金三拾五円交付候事 任東京師範学校助教諭 年俸金四百貳拾円給与候事	体操傳習所 文部省
明治16年 (1883) 7月21日 8月9日 10月23日	任東京師範学校(空白)年俸金四百貳拾円給与候事(マ)	文部省
	兼任山林学校助教 月手当金貳拾円給与候事	農商務省
	任山林学校助教 月俸金六拾円下賜候事	全
明治17年 (1884) 9月9日 10月7日 12月18日 12月15日	東京大学豫備門御用掛兼勤申付候事 為手当一ヶ年金貳百四拾 円給与教員勤務申付候事 東京大学御用掛兼勤申付候事 醫學部勤務申付候事 任東京大学豫備門教諭 年俸金七百貳拾円給与候事 東京大学御用掛兼勤申付候事 醫學部勤務申付候事	東京大学 全 文部省 東京大学
明治18年 (1885) 1月10日 9月9日 9月30日 10月3日 10月5日	農商務省御用掛兼勤申付候事 判任ニ準シ月手当金貳拾円給与 候事 山林局事務取扱申付候事 依願免本官 農商務省御用掛申付候事 取扱準判任月俸金四拾五円下賜 山 林局勤務申付候事 滿三ヶ年間独逸國留学申付候事 為学資一ヶ年銀貨千円給与候 事 非職申付候事	農商務省 文部省 農商務省 全 全
明治20年 12月16日	独逸國留学中旅費手当トシテ銀貨百五拾円給与	全
明治21年 (1888) 12月10日 12月26日	農商務技師試補ヲ命ス 年俸金九百円下賜 山林局勤務ヲ命ス 群馬栃木両縣下巡回ヲ命ス	全 全

年號 月 日	學業 官職 賞罰 等	當該官衙等
明治22年 (1889)	1月28日 群馬縣出張ヲ免ス 2月1日 任農商務四等技師 敍奏任官四等 2月2日 下級俸下賜 5月13日 愛媛岡山両大林区并奈良縣巡回ヲ命ス 5月16日 熊本大林区巡回ヲ命ス 6月20日 帰京ノ途次京都大林区巡回ヲ命ス 9月6日 宮崎大林区巡回ヲ命ス 9月24日 兼任林務官 敍奏任官四等 9月25日 東京大林区署長ヲ命ス 帰京ヲ命ス	農商務省 内閣 農商務省 全 全 全 全 内閣 農商務省
明治23年 (1890)	5月26日 中級俸下賜 8月28日 上級俸下賜 9月2日 林制取調委員ヲ命ス 9月6日 免本官專任林務官 9月13日 兼任農科大学教授 敍奏任官四等 年俸金四百円下賜	全 全 全 内閣 文部省
明治24年 (1891)	6月26日 學術実地指導及林業取調ノ為 京都府并岐阜長野二縣下出張ヲ命ス 12月19日 九級俸三分ノ一下賜	帝国大学 文部省
明治26年 (1893)	3月31日 職務格別勲励ニ付為其賞金百五拾円下賜 9月9日 職務格別勲励ニ付為其賞金百円下賜 9月9日 免兼農科大学教授 9月22日 農科大学講師ヲ囑託ス 林学第一講座ニ属スル職務擔任ノ事 林学第一講座ニ属スル職務擔任ニ付手當一ヶ年金四百円ヲ給ス	全 全 内閣 帝国大学
明治27年 (1894)	5月19日 學術上取調ノ為 石川山口熊本ノ三縣下ニ出張ヲ命ス 7月17日 學術実地指導ノ為 宮城青森秋田山形四縣下へ出張ヲ囑託ス	全 全
明治29年 (1896)	1月31日 陞敍高等官五等 2月7日 依願免本官并兼官 2月18日 満七年以上在官ニ付金四百三十七円五拾銭下賜 3月10日 敍従六位 特旨 9月25日 自今手當一ヶ年金五百円ヲ給ス 12月17日 學術実地指導ノ為 茨城縣下へ出張ヲ囑託ス	内閣 全 農商務省 宮内省 帝国大学 全
明治30年 (1897)	9月30日 任林務官兼農商務省森林監督官農商務技師 敍高等官五等 五級俸下賜 東京大林区署長ヲ命ス 山林局勤務ヲ命ス 10月13日 足尾銅山鑛毒事件調査委員被仰付 11月27日 足尾銅山鑛毒事件調査委員被免	農商務省 内閣 全
明治31年 (1898)	4月30日 群馬地方森林會議員ニ選定ス 5月25日 東京地方森林會議員ニ選定ス 6月27日 林学第一講座ニ属スル職務担任手當一ヶ年金六百円ヲ給ス 6月29日 免兼官 四級俸下賜 10月31日 三級俸下賜 12月22日 敍正六位	農商務省 全 東京帝国大学 農商務省 全
明治32年 (1899)	3月27日 林学博士ノ学位ヲ授与セラル 4月27日 依願免兼官	文部大臣 農商務省
明治33年 (1900)	3月28日 御用有之欧州各国へ被差遣 4月17日 依願東京帝国大学農科大学講師囑託ヲ解ク 4月27日 兼任農商務技師 敍高等官四等 山林局勤務ヲ命ス	全 東京帝国大学 農商務省

原文は毛筆縦書き、西曆を追加、字体はできるだけ原文に従った。

附表-3. 松野先生記念碑, 松野記念林関係年表・資料

年/月/日	事項・資料 [出典]
1908/M41/05/14 06	松野 礪死去。 未亡人から蔵書数千冊を山林会へ寄贈 [山林307], 功績記念醸金開始(月日不詳)。
1909/M42/07~ 1911/M44/02	<p>記念事業の経過：</p> <p style="text-align: center;">故松野先生記念に關する報告</p> <p>豫て諸君の賛同を得たる 故松野 礪先生功績記念の爲め醸金したる金額は明治四十二年七月迄に其額貳千貳百餘圓に上りたるを以て 同月七日赤坂溜池三會堂に於て發起人總會を開き 其使用方法を協議したるに左の如く決定せり</p> <p>一、東京帝國大學農科大學清澄演習林内に 松野記念林と稱する林地を設くる爲 先生の未亡人の名義を以て金千五百圓を 同學に寄附すること</p> <p>二、同演習林内適當の場處に 松野先生の記念碑を建設すること</p> <p>仍て東京帝國大學へ向け夫々の手續を運び 同年十一月左記の許可を得たり</p> <p style="text-align: center;">許可書寫の一</p> <p>千葉縣下演習林接近の土地を購し 之を該演習林に組入れ 松野記念林の名稱を附する爲 別記の金額本學へ寄附相成度旨承諾致候 御厚志深謝の至に候 乃ち寄附の趣旨に依り土地の購入費に充つ可く候 敬具</p> <p style="text-align: right;">明治四十二年十一月十二日 東京帝國大學總長 男爵 濱尾 新 ㊤</p> <p style="text-align: center;">松野くらはら 殿</p> <p style="text-align: center;">記</p> <p style="text-align: center;">一金 壹千五百圓</p> <p style="text-align: center;">同上の二</p> <p style="text-align: center;">故農商務省山林技師 松野 礪 記念碑建立發起人總代</p> <p style="text-align: center;">林學博士 川瀬善太郎</p> <p style="text-align: center;">林學博士 白澤 保美</p> <p>本年十月五日付願 故農商務省山林技師 松野 礪 記念碑を本學農科大學附屬千葉縣下演習林内に建立の件 聽許す</p> <p>但本文据付方に付ては 本學の指示を受く可し</p> <p style="text-align: right;">明治四十二年十一月六日 東京帝國大學總長 男爵 濱尾 新 ㊤</p> <p>右に對し 東京帝國大學農科大學に於ては 清澄演習林の一部を松野記念林に選定し 又 小生等は記念碑の建設に従事して明治四十三年九月全く其功を竣へたり</p> <p>記念碑は右 松野記念林に隣接せる切通と稱する處に建立し 之れに使用したる石材は仙臺石(長十尺四寸 幅四尺)にして大形なる御影石の礎石上に据ゑ 之れに彫刻せる文字は左の如し</p> <p style="text-align: center;">表面文字 寫</p> <p style="text-align: center;">松野先生記念碑</p> <p style="text-align: center;">正六位勲五等 日高 秩父 題</p> <p style="text-align: center;">裏面文字 寫</p> <p>先生諱礪松野氏山口縣人明治三年從北白川宮能久親王之獨逸國留五年專修林學業成而歸爾來當林業教育之要路叙正五位勲四等常孜孜教養後進林學之基礎賴以立功績尤著今世志斯學者莫不受先生薰陶可謂我邦林學自先生始也普魯西國王贈王冠勲三等索遜和維麻大公贈白鷺勲三等亦賞其功也四十一年五月十四日病卒距其生弘化四年三月十七日享年六十二門下生追慕先生德業汎謀于同志捐貲得安房清澄地若干經營而爲松野記念林欲傳先生功績於不朽乃建碑表之</p> <p style="text-align: center;">明治四十二年十月</p> <p style="text-align: right;">從四位勲三等 川瀬善太郎 撰 從七位 小林 春成 書 宮 龜年 鐫</p>

年/月/日	事項・資料 [出典]																												
1909/M42/07～ 1911/M44/02	<p>(故松野 礪先生は山口県の出身である。明治3年北白川宮能久親王に従ってドイツへ渡り、5年間とどまって林学を修め帰国した。以来、林業教育の主要な道筋をつけ、正五位勲四等に叙された。つねに熱心に後輩を教え育て、林学の基礎を創った功績は大きい。今、林学を志す者で、先生の感化を受けない者はなく、わが国の林学は先生に始まるといえよう。その功績を賞して、ドイツ国皇帝陛下は王冠三等勲章を、ザクセン王国ワイマル大公は白鷺三等勲章を贈与された。明治41年5月14日、病のため死去。弘化4年3月17日生れ、享年62歳であった。門下生は先生の立派な業績を懐かしむため、広く仲間呼びかけて醸金した。先生の功績が永く伝わるよう、安房清澄に少々の土地を区画して松野記念林を設け、碑を建てる。〔筆者らによる口語訳〕</p> <p style="text-align: center;">収支決算書 圓 (読みやすいように変更)</p> <table border="1" data-bbox="463 595 1126 852"> <thead> <tr> <th colspan="2" data-bbox="463 595 797 627">収入</th> <th colspan="2" data-bbox="797 595 1126 627">支出</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td data-bbox="463 633 659 666">醸金高</td> <td data-bbox="659 633 797 666">2,246.395</td> <td data-bbox="797 633 993 666">記念林購入寄附</td> <td data-bbox="993 633 1126 666">1,500.00</td> </tr> <tr> <td data-bbox="463 672 659 705">銀行預ヶ金利子</td> <td data-bbox="659 672 797 705">17.42</td> <td data-bbox="797 672 993 705">建碑一切費</td> <td data-bbox="993 672 1126 705">599.70</td> </tr> <tr> <td data-bbox="463 710 659 743">貯金利子</td> <td data-bbox="659 710 797 743">33.72</td> <td data-bbox="797 710 993 743">印刷及廣告料</td> <td data-bbox="993 710 1126 743">45.00</td> </tr> <tr> <td data-bbox="463 749 659 782">計</td> <td data-bbox="659 749 797 782">2,297.535</td> <td data-bbox="797 749 993 782">通信費</td> <td data-bbox="993 749 1126 782">9.81</td> </tr> <tr> <td data-bbox="463 788 659 821"></td> <td data-bbox="659 788 797 821"></td> <td data-bbox="797 788 993 821">雑費</td> <td data-bbox="993 788 1126 821">18.61</td> </tr> <tr> <td data-bbox="463 826 659 859">残金</td> <td data-bbox="659 826 797 859">124.415</td> <td data-bbox="797 826 993 859">計</td> <td data-bbox="993 826 1126 859">2,173.12</td> </tr> </tbody> </table> <p>右は明治四十三年十二月末日現在にして 残金百貳拾四圓四拾壹錢五厘は猶要すべき廣告料通信費及雑費等に宛て 残餘は之を大日本山林會資金として同會へ寄贈の見込に有之候間 右取計濟の上は改めて御報告に及ぶ可候 明治四十四年二月</p> <p style="text-align: center;">發起人總代</p> <p style="text-align: center;">石川 寅之丞 川瀬 善太郎 村田 重治 松波 秀實 江崎 政忠 白澤 保美 〔山林339広告, 原文は縦書き〕</p>	収入		支出		醸金高	2,246.395	記念林購入寄附	1,500.00	銀行預ヶ金利子	17.42	建碑一切費	599.70	貯金利子	33.72	印刷及廣告料	45.00	計	2,297.535	通信費	9.81			雑費	18.61	残金	124.415	計	2,173.12
収入		支出																											
醸金高	2,246.395	記念林購入寄附	1,500.00																										
銀行預ヶ金利子	17.42	建碑一切費	599.70																										
貯金利子	33.72	印刷及廣告料	45.00																										
計	2,297.535	通信費	9.81																										
		雑費	18.61																										
残金	124.415	計	2,173.12																										
1913/T2	<p>大学一覽に掲載された記念林記事： 明治四十三年 清澄山林字切通南澤ノ一部ニ 故松野 礪氏記念林ヲ設定セリ 是同氏ノ本邦 林學上ニ於ケル功績ヲ後世ニ傳ヘンカタメ 東京農林學校並本學林學科同實科出身者及其他有志者ノ寄附ニ係ルモノナリ [東京帝國大學一覽 從大正二年至大正三年, 原文は縦書き]</p>																												
1915/T4	<p>来演者視察コースの一項目になった記念碑, 記念林： 清澄派出所(標本類)→浅間山(天然林林相)→妙見越(七本杉)→梨ノ木台(清澄山林俯瞰)→高天神(測量三角点, 奥山山林遠望)→一杯水(林区署時代造林地)→東漢沢(スギ林)→太平(ヒノキ造林成績)→足谷(量水試験設備)→硯石(火入れと林相, クスノキ造林地)→小屋ヶ尾(野獸園, 椎茸栽培)→七曲(外国樹種見本林)→切通(松野先生記念碑, 松野記念林俯瞰)→南沢(スギ造林成績)→長坂(内国樹種見本林) [1915/T4年9月3日, 菌部一郎から高嶋規孝への主任交替時の引き継ぎ事項]</p>																												
1916/T5	<p>森林試験測定地の設定： 南沢スギ林(記念林)内に4箇所の森林試験測定地が置かれた。本数, 直径, 樹高, 材積などの経年変化を知るための固定試験地で, 安野, 郷台, 郷田倉, 札郷, 千石, 黒塚, ニノ台, 遠矢ヶ台のスギ林内にも, 同目的の試験地が設定された。</p>																												
1919/T8	<p>間伐試験地の設定： 南沢スギ林(記念林)内に1箇所の間伐試験地(強度)が置かれた。1922/T11年に後沢スギ林内に設定される間伐試験地(弱度および択伐的)に対応する。</p>																												

年/月/日	事項・資料 [出典]
1922/T11/04/26	大日本山林会会員による視察： 千葉県で第32回大会が開催され、その後の視察旅行で250名ほどの会員が千演を訪れた。ほぼ上記の1915年のコースに沿い、切通で記念碑、記念林を視察した〔山林478〕。なお、視察項目のひとつに「切通南澤松野記念林内 杉間伐試験地」があげられている〔東京帝國大學農學部附屬清澄演習林概要〕（会員に配布）。
1933/S8	東京帝國大學農學部附屬千葉縣演習林概要(1933)に記念林の関係写真2枚を掲載： 「松野記念林ノ全景（宇南澤）」「同上内生長試験地第一號（明治二十八年植栽）」。
1940/S15	東京帝國大學千葉縣演習林視察案内（1940, 1942）に視察項目として掲載： 「南澤, 杉造林地（松野先生記念林）45K, 16.65ha」。
1943/S18/04	演習林五十周年記念式典参加者の視察： 本多静六, 白澤保美ら。
1948, 1949	アイオン台風, キテイ台風による被害：視察案内（1958）参照。
1953/S28	千葉縣演習林視察案内（1953）に視察項目として掲載： 「南澤, スギ造林地（松野記念林）45K ₂ , 16.02ha」。
1958/S33	演習林の視察案内（1958）に掲載の記念林記事： 南沢スギ造林地（松野先生記念林）45K ₄ , 14.31ha。 林齢62年, 平均直径28.3cm, 平均樹高18.3m, 平均蓄積351m ³ /ha, 平均生長量5.6m ³ /ha, 平均本数558本/ha（1958年調査）, 本林は演習林編入後の最初の造林地で, 明治28-30年（1895-1897）植栽で, この中に森林試験測定地および間伐試験地などが設定されている。生長優良な南沢第1号試験地は昭和23年（1948）9月, 昭和24年（1949）8月のアイオン, キテイ台風の再度の来襲により甚大な被害を受けたために廃止した。跡地に昭和24年に山武スギを植栽している。（以後, 記念林に触れた概要, 視察案内はない）。
1993/H5～ 1994/H6	演習林創設百周年記念造林： 1993/H5年11月に一部を伐採, 翌春スギを再造林（実生およびクローン）。
2006/H18/10	記念林の現況： 45C ₁₀ スギ林（本多静六による千演最初の造林地）： 110年生, 11.48ha, 成育良好, 1993/H5年までに, 森林試験測定地, 間伐試験地はすべて廃止, 2002/H14年ごろ県道の拡幅工事で林地0.15haが減少, 2005/H17年10月の台風（10/08-09, 清澄で降水量330mm）により県道下側法面が崩壊, スギ立木16本, 計30m ³ を伐採。 45C ₉ など（アイオン, キテイ台風被害跡再造林地）： 59年生, 上記, 視察案内（1958）のサンブスギ植栽地の所在は不明, 林齢からC ₉ のほかC ₆ , C ₇ につき, 被害跡地の再造林か, 検討の必要がある。 45C ₁₀₋₁ スギ林（百周年記念再造林地）： 12年生, 1.14ha, シカの食害, 崩壊などのため, 1995/H7, 97/H9, 98/H10, 2002/H14年に計1,929本を補植（樹種別内訳, スギ120, マツ1,377, イヌマキ375, コノテガシワ57本）。

